梵漢對照

新譯金光明經

梵漢對照 新譯金光明經

序

本書刊行の目的はこれを梵文金光明經を讀む學徒の前に提供し幾分その勞を省かんとするにある。隨つて本書と梵文原典とは分離すべからざる關係を有する。譯文の生硬にして流暢ならざるもの或は有らむ。然れども梵文の難解なる箇處を出來得る限り明瞭ならしめんと努力した自然の結果である。

原書は昭和六年一月刊行の梵文金光明最勝王經である。南條先生の遺された校訂本の草稿を整理したものである。出版に際し十分注意はしたつもりでも、まだ若干の誤植を次から次に發見し、梵文の修正も後から後へと異つた考が出て來るので、これらを挾註にして置いたから、讀者は原書をこれによつて訂正せられたい。

支那譯對照は最も古い曇無讖譯だけに止めた。合部や義淨譯の對照もなすべきであるが、かなり煩雜な印刷となるから割愛した。これらの比較は學者の研究

に委せる。

文獻的な叙述は原書の緒論に讓るが、現存の支那譯三部は次の如くである。

(一)　金光明經四卷、北涼元始年間(412—421 A. D.)曇無讖譯。本書に對照。

(二)　合部金光明經七卷、隋の開皇十七年(597 A. D.)に曇無讖譯を根柢とし、これを補ふに眞諦、耶舍崛多、闍那崛多の譯を以てした編成本である。編成者は沙門寶貴である。但しこの合部經の序は彥琮の手になつたものらしい。寶貴が書いたやうに英文の緒論に言つてゐるのは訂正を要する。

(三)　金光明最勝王經十卷、唐の則天長安三年(703 A. D.)義淨譯。

現在の梵本はこの中で曇無讖譯に近きが如きも、未だ必ずしも同じとは云へぬ。これが幾分增廣せられたやうな形である。恐らく亦これ一種の異本であらう。合部や義淨譯の要素もかなりに含まれてゐる。

本文中の數字は原書の頁である。對比する便宜を考慮して添加した。

尙ほ此の機會を以て本書挾註に洩れた正誤を左に擧げる。勿論これが總てゞは無いであらう。得るに隨つて何等かの方法で發表しよう。

頁	行	誤	正
XIV	20	Chiness	Chinese
XXVII	2	Introduetion	Introduction
XXVII	14	vataḥ	vartaḥ
XXVIII	7	”	”
7	17	tūya	tūrya
12	13	nya	nyaṃ
14	7	pavaṃta	parvataṃ
”	10	sarva loka	sarvaloka
”	18	vaṇā	varṇā
16n	1	sphu	sphū
47n	2	gya	gyu
63	10	pitṛṇā	pitṛṇāṃ

昭和七年十二月

泉芳璟

東來本意爲斯文
繙得梵書心始穩

此地曾期有異聞
忘他街上暑如焚

——南條文雄——

目次

金光明經卷第一

北凉三藏法師曇無讖譯

金光明經序品第一

梵漢對照

新譯金光明經

泉芳璟譯

因緣品第一

唵、吉祥なる一切の諸佛菩薩に歸命す。唵、尊貴なる聖吉祥智慧成滿に歸命す。呪に云く、唵、シュルティ、スムリティ、ガティ、ヴィジャエース、ヷーハー(啓示と傳說の境界を克服するものよ、莎婆訶)。

十波羅蜜最勝の功德は種々の理趣と共に示され、
一切智者によりて世間利樂のために十地は說かれ、
斷常を離れ、離垢なる中道の說かれたる、
金光明と名づけられたる、かの經典を、覺を求むるものをして聽かしめよ。

如是我聞。一時佛住王舍
大城耆闍崛山。是時如來
遊於無量甚深法性諸佛行
處。過諸菩薩所行淸淨
是金光明　諸經之王
若有聞者　則能思惟
無上微妙　甚深之義
如是經典　常爲四方
四佛世尊　之所護持
東方阿閦　南方寶相
西無量壽　北微妙聲
我今當說　懺悔等法
所生功德　爲無有上
能壞諸苦　盡不善業
一切種智　而爲根本
無量功德　之所莊嚴

(一) 我によりて聞かれたり。一時、如來は鷲峰なる甚深の佛境界なる法界に於て住しき。

菩薩集會大菩家天女、辯才[2]大天女、吉祥大天女、堅牢大地天女、訶梨帝大天女、是の如きを上首とせる大天女等、及び多くの天、龍、藥叉、羅刹娑、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦、人、非人と倶なりき。時に尊者阿難陀は世尊に白して言へり、「世尊よ、如何に彼等の調伏はあるべきや」。世尊は偈を以て言へり。「想念あり。離垢なる三昧、法の實義は難問を以て建立せられず」。

【注】時に阿難陀以下の一節は恐らく何等か他の經典の混入せるものなるべし。寧ろ省くを可とす。又校訂梵文にも注意せる如く、十波羅蜜云々の一偈は十地經の最初の偈と全く同じ。只十地とあるを金光明と置き替へたるに過ぎず。而してこの偈は此處にあるよりも十地經の最初に在る方寧ろ其の處を得たりと謂ふべし。

(二) 淸淨にして離塵なる最勝の菩薩の中に、この金光明最勝帝王經なる因緣はあり。

除滅諸苦　與無量樂
諸根不具　壽命損減
貧窮困苦　諸天捨離
親厚鬪訟　王法所加
各各忿諍　財物損耗
愁憂恐怖　惡星災異
衆邪蠱道　變怪相續
臥見惡夢　晝則愁惱
當淨洗浴　聽是經典
至心淸淨　著淨潔衣
專聽是經　甚深行處
諸佛威德　能悉消除
如是諸惡　令其寂滅
護世四王　將諸官屬
幷及無量　夜叉之衆
悉來擁護　持是經者
大辯天神　尼連河神

(三) かくて甚深の聽聞によりて、甚深の省察によりて、四方に於て、諸佛に加持は加持せらる。

(四) 東方に於て阿閦王、南方に於て寶幢、西方に於て無量光、北方に於て鼓音聲あり。

(五) 一切の罪過を消滅せしめんがために、最勝吉祥發露なる一切の罪過を滅盡する、かの加持を我れは說くべし。

(六) 〔3〕そは一切の樂を與へ、一切の苦を滅するものなり。　一切智なる眞理の根本にして、一切の吉祥を以て嚴飾せらる。

(七) 諸根毀壞し、壽命損滅敗壞し、不吉に閉塞せられ、神祇に棄捨せられたる諸有情あらむ。

(八) 愛人に忿怒を得し人々、家事の煩累に苦しめられ、相互に障礙し、財物の損失によりて苦しめられむ。

(九) 憂悲、劬勞に於て、損失に於て、恐怖に於て、災禍に於て、星宿の壓迫に於て、壓鎭の恐るべき障礙によりて、

鬼子母神　地神堅牢
大梵尊天　三十三天
大神龍王　緊那羅王
阿修羅王　與其眷屬
悉共至彼　擁護是人
晝夜不離　我今所説
諸佛世尊　甚深祕密
微妙行處　億百千劫
甚難得値　若得聞經
若爲他説　若心隨喜
若設供養　如是之人
於無量劫　常爲諸天
八部所敬　如是修行
生功德者　得不思議
無量福聚　亦爲十方
諸佛世尊　深行菩薩
之所護持　著淨衣服

【註】壓鎭は惡鬼の一種、原語 Kakhorda なり。Mahāvutpatti, CXCVII. 141 を見よ。)

(一〇) 夢の中に憂悲、劬勞を招來すべき惡事を見む。彼は淨浴して最勝の經典を聞くべし。

(一一) 淨信にして善意に、淨潔の衣を以て莊嚴せられ、この甚深の佛境界なる經典を聞く

(一二) 彼等一切生類には一切是の如き常に恐るべき不幸あるも、此の經典の威力によりて鎭靜せむ。

(一三) 宰相と倶なる、將帥と倶なる、彼等護世者は自から【4】多倶胝の藥叉と共に彼等の守護をなすべし。

(一四) 辯才大天女、尼連禪(河)住居の(女神)群生の母なる訶梨帝(女神)、堅牢地神。

(一五) 梵王、帝釋、大神通緊那羅王、迦樓羅王、藥叉、乾闥婆、龍神と共に、

(一六) 軍團、勢力、車乘と共に、彼處に往きて、彼等は日夜心を專らにしてその守護をなすべし。

以上妙香　慈心供養
常不遠離　身意清淨
無諸垢穢　歡喜悦豫
深樂是典　若得聽聞
當知善得　人身人道
及以正命　若聞懺悔
執持在心　是上善根
諸佛所讚

(一七) われ甚深の佛境界なる、一切諸佛の祕奥なる、俱胝劫にも得難きこの經典を宣說すべし。

(一八) この經典を聽き、人をして聽かしめ、誰にもあれ隨喜し、供養をなす

(一九) 彼等は多俱胝劫の間、天、龍、人、緊那羅、阿修羅、祕密衆によりて供養せられむ。

(二〇) 福を造れる彼等衆生の生ずる福聚は無邊無數不可思議なり。

(二一) 十方は一切の諸佛によりて及び甚深の行ある諸菩薩によりて攝受せらるべし。

【註】 本文の如く diśo daśa と讀まば以上の如し。但し梵本脚註に隨ひ、digāsthitaiḥ を採らば、十方に住せる諸佛によりて……彼等は攝受せらるべしの意となる。

(二二) [5] 芳香水と共に淨衣を着し、慈心に安立して、怠ることなくそは供養せらるべし。

【註】 原文 cīvara は寧ろ cīvaru と正して、單數業格の訛語と見るを可とす。隨つ

てpādaの前一字の間隔を要す。この文の主語「それ」とは經典をさす。

（二三）心を自ら廣博離垢となすべし。心を歡喜せしめつゝこの經を聽くべし。

二四　そは人中に歡び迎へられ、人なる果は善く得られむ。この經を聽かむものは幸福なる生を活くべし。

【註】「幸福なる生」原典各本 sukhitāś ca に作るもこの語中性なればtāś caは寧ろtāni caと讀むべし。tāni caの訛形なり。

（二五）この經が說き示され、耳竅に入れる彼等は、善根を植ゑ、多くの諸佛に照さるべし。

以上吉祥なる金光明最勝經帝王の中、因緣品第一。

如來壽量品第二【6】

復その時、王舍大城に妙幢 Ruciraketu と名くる菩薩摩訶薩住せり。過

金光明經壽量品第二

爾時王舍城中。有菩薩摩訶薩名曰信相。已曾供養過去無量億那由他百千諸

佛。種諸善根。是信相菩薩作是思惟。何因何緣。釋迦如來壽命短促方八十年。

復更念言。如佛所說有二因緣壽命得長。何等爲二一者不殺。二者施食。而我世尊。於無量百千億那由他阿僧祇劫。修不殺戒具足十善。飲食惠施不可限量。乃至已身骨髓肉血充是飽滿飢餓衆生。況餘飲食。

大士如是至心念佛。思是義時其室自然廣博嚴事天紺琉璃種種衆寶。雜廁間錯以成其地。猶如如來所居淨土。有妙香氣過諸天香。煙雲垂布遍滿其室。其

去の諸佛に供養をなし、善根を植ゑ、多倶胝尼由他百千の諸佛に奉事せり。彼念へらく「何の因、何の緣ありてか世尊釋迦牟尼の壽量はかく八十歳にして短促なるや」。

彼復念へらく「世尊は說けり、『長壽者たるに於て二の因緣あり。何をか二となす。殺生の遮止と食物の施與となり。世尊釋迦牟尼は無數多百千倶胝尼由他劫の間、殺生を遮止せり。十善業道を執受せる限り、世尊によりて諸有情に對し、内外諸物は捨てられたり。乃至自己の身肉、血漿、骨髓を以て、飢えたる諸有情は滿足せしめられたり。何に況んや餘他の食物をや』」。【一】

時にかの佛を憶念し意作する人のこの是の如き思慮をなせる時、屋宅は廣博宏大となりき。如來の變作にして、青玉合成し、多くの天寶を鏤ばめ、天超過の妙香を以て覆はれたり。その屋宅に於て、四方に四個の天寶合成の牀座は出現せり。その牀座に於て、天寶の布帛を施設せる天の榻牀は出現せり。その榻牀の上に多くの天寶を鏤ばめたる如

室四面。各有四寶上妙高座自然而出。純以天衣而爲敷具。是妙座上各有諸佛所受用華衆寶合成。於蓮華上有四如來。東方名阿閦。南方名寶相。西方名無量壽。北方名微妙聲。是四如來自然而坐師子座上。放大光明照王舍城。及此三千大千世界。乃至十方恒河沙等諸佛世界、雨諸天華作天妓樂。爾時三千大千世界所有衆生。以佛神力受天快樂。諸根不具即得具足。擧要言之。一切世間所有利益。未曾有事悉具出現。

來變作の蓮華出現せり。その蓮華の上に四佛世尊は出現せり。東方に阿閦如來出現し、南方に寶幢如來出現し、西方に無量壽如來出現し、北方に鼓音聲如來出現せり。彼等諸佛世尊のその師子座の上に出現す

【註】第一品の第三偈第四偈はこの四方四佛に言及す。蓋しこれこの部分の重說か。

るや否や、その時王舍大城は大光明を以て覆はれたり。三千大千世界のある限り、普ねく十方に於て恒河沙數に等しき世界は光明を以て覆はれたり。天華雨ふり、天樂は【8】奏したりき。而してかの三千大千世界に於て一切諸有情は佛の威神によりて天の快樂を具足せり。生盲の有情は色を見たり。聾ひたる有情は有情より聲を聞けり。心狂亂

【註】「聲を」の原語刊本にśabdāniに作るも、パリ本によりśabdānに正すべきが如し。

せる有情は正念を得たり。散亂心のものは念あるを得たり。裸形の有情は衣服を以て覆はれたり。根缺の有情は身支を具足せり。渴ける有情は渴を離れたり。病に苦しめる有情は病患を離れたり。身羸

爾時信相菩薩。見是諸佛及希有事。歡喜踊躍恭敬合掌。向諸世尊至心念佛。作是思惟。釋迦如來無量功德。唯壽命中心生疑惑。云何如來壽命如是方八十年。

爾時四佛。以正遍知告信相菩薩。善男子。汝今不應思量如來壽命短促。何以故。善男子。我等不見諸天世人魔衆梵衆沙門婆羅門人及非人有能思算如來壽量知其齊限。唯除如來。時四如來。將欲宣暢

劣の有情は諸根を圓滿せり。廣く世間に於て多くの希有未曾有なる諸法の出現ありき。

時に妙幢菩薩摩訶薩は彼等諸佛世尊を見て希有なるを得たり。「これそも如何ぞ」と滿足し歡喜し、慶喜し、喜悅の心を生じて、彼等諸佛世尊に對して合掌し、種々に彼等諸佛世尊を念じ、世尊釋迦牟尼の功德を念じ、世尊釋迦牟尼の壽量に疑惑を懷きたる彼は、かの思慮をなしつゝ立てり。「これ如何ぞ、これ何の故ぞ。世尊釋迦牟尼の壽量は八十歲にしてかく短促なるや」と。

【註】「種々に」の原語 ākāratas は直譯すれば「身相より」なり。西藏譯 rnam-par 又は rnam-pa-las よりこの譯語を作れり。

〔9〕時にかれら諸佛世尊は正念正知にして、かの妙幢菩薩に告げて言へり。「善家男子よ、汝、世尊釋迦牟尼の壽量は短促なりとかくの如く思ふ勿れ。其の故は如何。善家男子よ、諸天、魔、梵、婆羅門を含める世界に於て、天、人、阿修羅と倶なる有情の中に、乃至無上なる如來應供正等覺者

釋迦文佛所得壽命。欲色界天。諸龍鬼神乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽。及無量百千億那由他菩薩摩訶薩。以佛神力悉來聚集信相菩薩摩訶薩室。爾時四佛。於大衆中略以偈喩說釋迦如來所得壽量。而作頌曰。

一切諸水　可知幾滴
無有能數　釋尊壽命
諸須彌山　可知斤兩
無有能量　釋尊壽命
一切大地　可知塵數
無有能算　釋尊壽命
虛空分界　尚可盡邊
無有能計　釋尊壽命

を除き、世尊釋迦牟尼如來の壽量の邊際を知るに適するものを我等は見ず。」彼等諸佛世尊の如來壽量の說示をなせしや否や、その時佛の威神力によりて、欲界色界の諸天子、乃至、龍、藥叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽に至るまで來集せり。多俱胝百千の菩薩はかの妙幢菩薩摩訶薩の屋舍に於て來集せり。時にかの諸如來は一切の集會に對して世尊釋迦牟尼の壽量の說示を偈もて說いて言へり。

(一) 一切の海水に於て水滴を以て數ふることを得るとも、釋迦牟尼の壽命を數へむことは竟に能はじ。

(二) 〔10〕蘇迷盧を極微となして數へ得るとも、釋迦牟尼の壽命を數へむことは竟に能はじ。

(三) 大地に有りとあらゆる極微を一切數へ得るとも、釋迦牟尼の壽命を數へむことは竟に能はじ。

(四) 若し人有りて何ものかによりて虛空を量らんも、釋迦牟尼の壽命

不可計劫　億百千萬
佛壽如是　無量無邊
以是因緣　故說二緣
不害物命　施食無量
是故大士　壽不可計
無量無邊　亦無齊限
是故汝今　不應於佛
無量壽命　而生疑惑

【註】「量ちんも」の原語はPrathitumなり。これならば「擴げんも」とすべきなり。而もこれにては意義をなさず。これを假りにPramitumと讀み替へたり。劍橋本及びパリ本はこの頌を闕く。

を數へむことは竟に能はじ。

(五)是の如く說かれたる劫波、及び俱胝百劫にも、かの覺者は住すべし。數ふるも得られず。

(六)彼に他の毀傷を止むると多くの食の與へらるゝと二の因、二の緣あるが故に、

(七)彼の大我者の壽數は得られず。かく說かれし劫波の間數ふるとも、亦是の如く(得られ)ざるが故に、

(八)この故に疑あらざれ。あゝ何等の疑をもなさゞれ。如何なる數も勝者の壽量の邊際を得ず。

[三]時にその會に於て、其處に親教師に授記を得たる憍陳如Kauṇḍinyaと名くる婆羅門あり。多千の婆羅門と俱に、世尊の供養をなせしが、如

來の大般涅槃の語を聞きて、突如として座より起ち、世尊の兩足を頂禮して世尊にかくの如く言へり。「若し實に世尊は一切有情の哀愍者、大

【註】　梵文 bhagavan とあれど bhagavān の誤植。

悲者利樂者、一切有情の父母の如きもの、無等等者、月の如きもの、光明作者、大智慧日出現者ならば、又若し汝は一切有情を自己の羅睺羅と見たまふならば、われに一の賚賜を與へよ。」世尊は默然として聽許せり。

時に佛の威神によりてその會に一切有情喜見と名くる梨車毘童子あり。彼に辯才は生せり。彼れ親教師に授記を得たる憍陳如婆羅門に是の如く云へり。「大婆羅門よ、汝世尊に如何なる一の賚賜を請ふや。われ汝にその賚賜を與ふべし。」婆羅門の云く、「梨車毘童子よ、我れ此處に世尊に對して供養をなさんがために、世尊に芥子の實許りの骨身を與へんことを欲求す。粉末の骨身を執らんがためにこの芥子の實許

【註】　原語 cūrṇaṃ dhātuṃ abhiprayojanāya とあり。この三語詮顯する所明かならず。或は註釋の語の竄入なるか。寧ろ省きて可なり。

りなる骨身を供養すれば、神の自在は得らると是の如く聞かれたり。
聞け汝[12]梨車毘童子よ、金光明最勝經は一切聲聞獨覺にとりて知り難し。金光明最勝經は實に是の如き相功德を具足してあるべきなり。
あゝ梨車毘童子よ、是の如く金光明最勝經は知り難く、覺り難し。われら邊洲に住する婆羅門にとりては芥子の實許りの骨身を篋中に置きて保持するを可とす。われ汝にこの賚賜を請ふ。これによりて諸有情は神の自在を得べきなり。あゝ實に汝梨車毘童子よ、芥子の實許りの骨身を如來に請へ。骨身を寶篋の中に置きて、保持するが故に神の

【註】原語單に yācitum とあり。この一文の主語は tvam なればこれに相當する arhasi と云ふが如き語ありしなるべし。

【註】この下梵文若干混亂あり。意義通じ難し。「保持するが故に」dhārayāt の語は推定なり。これに對して寫本には ca hitāya の語あり。されど詮顯する所無し。

自在を得べしと、かくの如く欲する我によりて、おゝ梨車毘童子よ、賚賜

【註】又「と、かくの如く欲する」は iticchatā と讀みて次行の mayā に關係せしめたるなり。隨て現行版の推定なる iticchase は改め、其の次の段落標は省くものとす。

は願求せられたり。

時に一切有情喜見と名くる梨車毘童子は親教師に授記を得たる憍陳如婆羅門は偈を以て言へり。

【註】原典各寫本みな世間 loka に作る。固より loka にも有情の意なきに非ざれど、義に sattva とあるが故に統一上これを改めたり。

(九) 恒河の流に於て諸の蓮花は生じ[13]鵄は眞紅の色となり、倶翅羅鳥は螺貝の色とならん時、

(一〇) 閻浮樹が多羅の實を生じ、奄羅の花が棗椰子を生せん時、その時にこそ芥子許りの舍利はあれ。

【註】舍利の原語 dhātu 前に骨身と譯せるものに同じ。

(一一) 若し龜毛の上衣を以て覆はれ、冬時に於て寒冷を除くべくんば、その時舍利はあるべきなり。

(一二) 若し蚊の足より成る樓臺の堅牢にして動搖せざる有らば、その時舍利は有るべきなり。

(一三) 若し一切の蛭鋭き大なる白き歯を生せば、その時舎利はあるべきなり。

(一四) 若し兎の角によりて堅牢なる梯隥が有るべく、天界の上昇に資すべくんば、その時舎利はあるべきなり。

(一五) 若し彼の梯隥を上昇し、鼠が月を食しつゝ羅睺を逐ふならば、その時舎利はあるべきなり。

(一六) 若し聚落を行く蠅が酒の甕を飲み盡して家に於て住處を營むべくんば、その時舎利はあるべきなり。

(一七) 若し驢馬が頻婆の脣を具し、快活となり、舞踊、歌詠を善くせば、その時舎利はあるべきなり。

【註】 原語 bimbostha-sampanna は推定なり。 唐譯「若使驢脣色赤如頻婆果。」若し寫本の一に見ゆる vidyopasampanna を取らば「智慧を具し」とすべし。 是も亦得たり。

(一八) 【4】若し梟と鴉とが閑處に行きて樂しみ、互に相順和せば、その時舎利はあるべきなり。

【註】 原語 rahogatāḥ 現行本の sahāgatāḥ は推定なり。 印度本の外各本一致す。 梵本

脚註に說せり。

時舍利はあるべきなり。

（一九）若し波羅奢の葉の傘蓋廣大にして雨を障え得ば、その時舍利はあるべきなり。

（二〇）大海の船舫機關を具し、帆を有せるが、陸地に上り行かば、その時舍利はあるべきなり。

（二一）若し鵄梟と舍倶那鳥とが嘴もて相伴ひ、香醉山に行かんには、その時舍利はあるべきなり。

これらの偈を聞きて親教師に授記を得たる憍陳如婆羅門は一切有情憙見なる梨車毘童子に偈を說て言へり。

【註】此にも loka とあり。sattva とすべし。loka にても sattva にても可なれど、一定するを可とす。sarva を離せるは誤植なり。

（二二）善きかな、善きかな最上の童子よ、勝者の子よ、大音を有するもの

【註】mahā-gira なる原語を今は -girā より來るものと見て是の如く譯す。若し-giri

より來るものとせば「大山の如き」と譯し得べし。 西藏譯に tshig-po che とあるより見れば「大音あるもの」とする方寧ろこれに近きか。

よ、汝は方便を善くする勇者にして、最上の授記を得たり。

(二三) 童子よ、世間守護者、救度者なる、如來の不可思議なる大我身を次第の如くわれより聽け。

(二四) 佛境界は不可思議なり。 又如來は無等者なり。 一切諸佛は常に寂靜にして、一切諸佛は所行平等なり。

(二五) これら一切諸佛は等しき色を有し、諸佛に於て此に法性有り。

【15】彼の世尊は造作ならず。 如來は出生せず。

(二六) 金剛堅固の身にして變化身を示現す。 大仙の舍利は芥子許りと雖も有ることなし。

(二七) その身白骨血漿に非ずして何處にか舍利あるべき。 諸有情の利樂のために方便して舍利を留む。

(二八) 正覺者は法身なり。 如來は法界なり。 世尊の身は是の如く法

爾時信相菩薩摩訶薩。聞
是四佛宣說如來壽命無

の說示は是の如し。

(二九) これは我によりて聞かれたり。知りて我に賚賜を請ふ。眞理の授記のために、牟尼の最上の出生はなされたり。

【註】utpādaを中性に用ひたり。京都本にはmuneとあり。若し爾らば「牟尼よ」とするも亦得たり。現行本の脚註にはこれを脫せり。

時に三萬二千の天子はかの如來の甚深なる壽量の說示を聞きて、一切は無上なる正等覺に心を發せり。彼等は心意踊悅して同音同聲に偈を說いて言はく、

(三〇) 佛は涅槃せず。法は滅せず。諸有情の成熟のために涅槃を示す。

(三一) 世尊、覺者は不可思議なり。如來は常住の身なり。諸有情の利樂のために種種の莊嚴を示す。

【16】時に妙幢菩薩はかれら諸佛世尊及びかの二人の正士の前にして、世尊釋迦牟尼の壽量の說示を聞き、滿足し歡喜し、踊躍し、欣喜し慶喜の

量。深心信解歡喜踊躍。說是如來壽量品時。無量無邊阿僧祇衆生。發阿耨多羅三藐三菩提心。時四如來忽然不現

金光明經懺悔品第三

爾時信相菩薩。卽於其夜夢見金鼓。其狀姝大其明普照喻如日光。復於光中得見十方無量無邊諸佛世尊。衆寶樹下坐琉璃座。與無量百千眷屬圍繞而爲說法。見有一人似婆羅門。以枹擊鼓出大音聲。其聲演說懺悔偈頌。

時信相菩薩。從夢寤已。

念を生じて、廣大なる愛樂愉悅を以て滿たされたり。かの如來壽量の說示の說かれし時、無量無數の諸有情の心は無上正等覺に於て生じたり。而して彼等如來は隱沒せり。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經の中、如來壽量說示品第二。

[17] 夢品第三

時に妙幢菩薩は眠りて夢の中に黃金より成れる金鼓を見たり。普ねく光輝けり。譬へば日輪の如し。一切の方處に於て、寶樹の下に、琉璃合成の師子座の上に坐し、多百千の會衆に圍繞せられ、法を說ける無量無數の諸佛を見たりき。又彼處に婆羅門の形なる一人のその鼓を擊てるを見たり。彼處にその鼓聲より是の如きこれらの偈を出すを聞けり。

時に妙幢菩薩は目さむるや否や、その偈を憶念したり。念じつゝ其

至心憶念夢中所聞懺悔偈頌。過夜至日出王舍城。爾時亦有無量無邊百千衆生與菩薩俱往耆闍崛山至於佛所。至佛所已頂禮佛足右繞三匝。却坐一面敬心合掌。瞻仰尊顏目不暫捨。以其夢中見金鼓及懺悔偈。向如來說

昨夜所夢　至心憶持
夢見金鼓　妙色晃耀
其光大盛　明踰於日
遍照十方　恒沙世界
又因此光　得見諸佛
衆寶樹下　坐琉璃座
無量大衆　圍繞說法
見婆羅門　擊是金鼓

の夜を過ぎて王舍大城を出で、多千の衆生と倶に、鷲峰山王の方に世尊の方に往詣し、往詣して世尊の兩足を頭を以て禮し、世尊を三たび右に遶りて一面に坐せり。

時に妙幢菩薩は一面に坐して、世尊の方に合掌を[18]傾け、夢中に鼓聲によりて聞かれしかの發露の偈頌なるものを說けり。

以上金光明最勝帝王經中、夢品第三。

懺悔品第四【19】

【註】懺悔の原語deśanā先に或は「說示」或は「發露」と譯す。同一語なり。勿論kṣamāが懺悔又は懺摩、悔過の正當なる原語なることを忘れたるに非ず。只古譯者の先縱に任せ、敢へて異を立てざるのみ。

（一）一夜不忘の我によりて夢の中に普ねく金光に輝ける美はしき鼓は見られたり。

其鼓音中　說如是偈
是大金鼓　所出妙音
悉能滅除　三世諸苦
地獄餓鬼　畜生等苦
貧窮困苦　及諸有苦
是鼓所出　微妙之音
能除衆生　諸惱所逼
斷衆怖畏　令得無懼
猶如諸佛　得無所畏
諸佛聖人　所成功德
離於生死　到大智岸
如是衆生　所得功德
定及助道　猶如大海
是鼓所出　如是妙音
令衆生得　梵音深遠
證佛無上　菩提勝果
轉無上輪　微妙清淨
住壽無量　不思議劫
演說正法　利益衆生
能害煩惱　消除諸苦

(二) 日輪の如く普ねく燃えつゝ輝けり。十方は照され、普ねく諸佛は見られたり。

(三) 寶樹の下、輝く琉璃(の座)に坐し、多百千の會衆に圍繞せられたり。

(四) その鼓は婆羅門形のものによりて擊たれたり。その擊たるゝ時これらの偈頌は聞かれたり。

(五) 金光明最勝の鼓によりて三千世界に於て衆苦は(鎭靜せよかし)。世間に於て惡趣の苦、夜摩の苦、並に貧窮の苦は鎭靜せよかし。

(六) 又かの鼓聲の響もて世間に於て一切の苦厄は鎭靜せよかし。[20] 心傷める普ねき有情、是の如き恐怖あるものは恐怖を鎭靜せよ、牟尼帝王よ。

【註】「心傷める」以下の半頌は各本若干の異なる讀方あり。今假に一の推定讀方に隨ふ。梵文大乘集菩薩學論二一六頁には「牟尼帝王の恐怖なく恐怖を鎭靜せるが如く、衆生をして恐怖なからしめよ。」とあり。

(七) 輪廻に於て一切智者牟尼帝王が一切の聖功德を具せるが如く、是

【註】「輪廻に於て」の原語 saṃsāra を saṃsārī と讀み、これを一語として切離すべし。

貪瞋癡等　悉令寂滅
若有衆生　處在地獄
大火熾然　燒炙其身
若聞金鼓　微妙音聲
所出言教　即尋禮佛
亦令衆生　得知宿命
百生千生　千萬億生
令心正念　諸佛世尊
亦聞無上　微妙之言
是金鼓中　所出妙音
復令衆生　値遇諸佛
遠離一切　諸惡業等
善修無量　白淨之業
諸天世人　及餘衆生
隨其所思　諸所願求
如是金鼓　所出之音
皆悉能令　成就具足
若有衆生　墮大地獄
猛火炎熾　焚燒其身
無有救護　流轉諸難

の如く衆生は三昧覺支功德の海となれかし。

（八）又かの鼓聲の響によりて、一切有情は梵音聲あれかし。佛性最上覺支に觸れ清淨法輪を轉せよかし。

（九）不可思議劫波の間、住せしめよ。世間利樂のために法を說かしめよ。煩惱を斷せしめよ。諸苦を除去せしめよ。又貪瞋癡を鎭靜せよ。

【註】「諸苦を」の原語 duḥkhāṃ とあれど、寧ろこれは duḥkhā と中性に改めて可ならむ。各本皆男性なるが故に、且らく改めざりしのみ。

【註】瞋の原語 doṣa とあれど dveṣa に同じ。訛語なり。

（一〇）無幸處にある有情にしてその身猛火に燒燃されたる彼をして鼓の奏せらるゝを聞かしめ、[21]南無佛陀の語を得しめよ。

【註】dundubhi と sampravāditaṃ とを離すべし。

（一一）一切有情をして百生、千倶胝劫に生念ならしめ、常に牟尼帝王を念じつゝ、彼等の廣大の語を聞かしめよ。

（一二）又かの鼓聲の響によりて、諸佛と倶に常に集會することを得し

當令是等　悉滅諸苦
若有衆生　諸苦所切
三惡道報　及以人中
如是金鼓　所出之音
悉能滅除　一切諸苦
無依無歸　無有救護
我爲是等　作爲依處
是諸世尊　今當證知
久已於我　生大悲心
在在處處　十方諸佛
現在世雄　兩足之尊
我本所作　惡不善業
今者懺悔　諸十力前
不識諸佛　及父母恩
不解善法　造作衆惡
自恃種姓　及諸財寶
盛年放逸　作諸惡行
心念不善　口作惡業
隨心所作　不見其過
凡夫愚行　無知闇覆

めよ。惡業を遠離せしめよ。淨業なる善を行せしめよ。

（一三）諸人阿修羅等一切生類の懺悔願求のために、彼等に請はしめよ。

【註】原文[illegible]を[illegible]に正すべし。

又この鼓聲の響によりて、我れは彼等に對して一切これを成滿せしめむ。

【註】西藏譯少略あり。「一切人天有命者の彼等の有する所思と所願とを、この鼓の音聲によりて、彼等のそれらを總て滿足せしめよ」。

（一四）恐るべき捺落迦に生じ、身は火にて燒かれ熱せられ、憂悲に充され、彷徨する諸有情は、其の中に於てそれによりて消滅あるべし。

（一五）【22】地獄、餓鬼、人界に於て、極めて恐るべき苦の有情あらんに、この鼓聲の響によりて、彼等の諸苦は一切鎮靜なれかし。

（一六）われは無救、無濟、無依處となされたる彼等の救濟者、依處、最上の歸依たるべし。

（一七）慈悲哀愍の心ある十方に安立せる諸佛はわれを憶念せよかし。

親近惡友　煩惱亂心
五欲因緣　心生忿恚
不知厭足　故作衆惡
親近非聖　因生慳嫉
貧窮因緣　姦諂作惡
繫屬於他　常有怖畏
不得自在　而造諸惡
貪欲恚癡　擾動其心
渴愛所逼　造作衆惡
依因衣食　及以女色
諸結惱熱　造作衆惡
身口意惡　所集三業
如是衆罪　今悉懺悔
或不恭敬　佛法聖衆
如是衆罪　今悉懺悔
或不恭敬　緣覺菩薩
如是衆罪　今悉懺悔
以無智故　誹謗正法
不知恭敬　父母尊長
如是衆罪　今悉懺悔

過失を執受せよかし。

(一八) わが過去に造る所の極重の惡業の一切これを十力の前に立てる我は懺悔すべし。

(一九) 父母を蔑にし、諸佛を知らず、善を知らざる我によりて過惡は造られたり。

(二〇) 勢力に醉ひ、種姓美貌に醉ひ、青春に醉へる我によりて過惡は造られたり。

(二一) 惡作の業によりて、過惡を觀せざる我によりて惡念、惡語の過惡は造られたり。

(二二) 愚夫の意行によりて無知に覆蔽せられし意によりて【23】惡友のために克服せられて、心煩惱に惑亂せられて、

(二三) 遊戲愛樂に誘惑せられ、憂悲病患に逼られ、富の滿されざる忿恨を懷く我によりて過惡は造られたり。

(二四) 聖ならざる人々との接觸より、嫉妬の因によりて、諂誑貧窮の忿

愚惑所覆　驕慢放逸
因貪恚癡　造作諸惡
如是衆罪　今悉懺悔
我今供養　無量無邊
二千大千　世界諸佛
我當拔濟　十方一切
無量衆生　所有諸苦
我當安止　不可思議
阿僧祇衆　令住十地
已得安止　住十地者
悉令具足　如來正覺
爲一衆生　億劫修行
使無量衆　令度苦海
我當爲是　諸衆生等
演說微妙　甚淨悔法
所謂金光　滅除諸惡
千劫所作　極重惡業
若能至心　一懺悔者
如是衆罪　悉皆滅盡
我今已說　懺悔之法

恨を懷く我によりて過惡は造られたり」

（二五）かの苦厄來現の時、愛欲の恐怖を因とせる、不自在となれる我によりて過惡は造られたり。

（二六）搖動心のために、愛欲忿怒のために、飢渴に苦しめられたる我によりて過惡は造られたり。

（二七）飲料のために、食物のために、衣服のために、婦女求欲の因によりて、種々の煩惱に苦しめられたる我によりて惡は造られたり。

（二八）身口意三種の惡行なる、是の如き種類によりて造られたるかの一切を我は懺悔す。

（二九）諸佛、諸法、又は諸の聲聞に於て、なされたる不敬あるべし。その一切をわれは懺悔す。

（三〇）諸の獨覺、又諸の菩薩に於てなされたる不敬あるべし。その一切をわれは懺悔す。

（三一）[24] 無知なる我によりて常に正法は誹謗せられ、父母に於て（な

是金光明　清淨微妙
速能滅除　一切業障
我當安止　住於十地
十種珍寶　以爲脚足
成佛無上　功德光明
令諸衆生　度三有海
諸佛所有　甚深法藏
不可思議　無量功德
一切種智　願悉具足
百千禪定　根力覺道
不可思議　諸陀羅尼
十力世尊　我當成就
諸佛世尊　有大慈悲
當證微誠　哀受我悔
若我百劫　所作衆惡
以是因緣　生大憂苦
貧窮困乏　愁熱驚懼
怖畏惡業　心常怯劣
在在處處　暫無歡樂
十方現在　大悲世尊

されし)不敬はあるべし。その一切をわれは懺悔す。

(三二) 頑魯の故に蒙昧の故に、憍慢、貢高に覆はるゝが故に、貪慾瞋恚愚癡の故に(造られし)その一切をわれは懺悔す。

(三三) 十方世界に於て十力の聖者を供養して、十方に於て諸の有情を諸苦より度脱せしめむ。

(三四) われは不可思議なる一切有情を十地に安立せしむべし。十地に安立して一切は如來となるべし。

(三五) 一々の有情のためにわれは倶胝劫修行すべし。かくてそれら一切を苦海より解脱せしめ得べし。

(三六) 彼等諸有情に對してわれは金光明最勝といへる一切の業を滅盡することの甚深の懺悔を示すべし。

(三七) 千劫の中に極重の惡業の造られたるその一切を一時に開示して滅盡に行かしめよ

(三八) われこの最勝の法なる金光明を示すべし。[25] 清淨(の法)を聞く

能除衆生　一切怖畏
願當受我　誠心懺悔
令我恐懼　悉得消除
我之所有　煩惱業垢
惟願現在　諸佛世尊
以大悲水　洗除令淨
過去諸惡　今悉懺悔
現所作罪　誠心發露
所未作者　更不敢作
已作之業　不敢覆藏
身業三種　口業有四
意三業行　今悉懺悔
身口所作　及以意思
十種惡業　一切懺悔
遠離十惡　修行十善
安止十住　速十力尊
所造惡業　應受惡報
今於佛前　誠心懺悔
若此國土　及餘世界
所有善法　悉以廻向

彼等の罪業の滅盡は速かにあれかし。

【註】「速かにあれかし」は sadyo 'stu なる推定の讀方による。寫本の sampyāntu, sahyantu 等にては意義をなさず。

（三九）われ最上の十地に立つべし。後に佛の功徳を以てかれら十寳を輝かしめ、諸有海より超度すべし。

【註】校訂本 tān daśa-ratnākare vare とあるものは推定なるが、これを取消して tān daśa-ratnān pare vare と讀む。

（四〇）われ不可思議の佛功徳によりて諸佛海瀑流なる、甚深の功徳海なる、一切智性を滿足すべし。

【註】「諸佛海」は西藏支那譯よりせる推定なり。尙ほ acintiyabudha は -buddha の誤植なり。

（四一）百千の三昧を以て、不可思議の陀羅尼を以て、根力覺支を以て、われは十力最勝者たるべし。

【註】「たるべし」の原語 bhave は各寫本 bhaveyam に作るもの丶修正なり。脚註に加ふべきもの。

我所修行　身口意業
願於來世　證無上道
若在諸有　六趣險難
愚癡無智　造作衆惡
今於佛前　皆悉懺悔
世間所有　生死險難
種種婬欲　愚煩惱難
如是諸難　我今懺悔
心輕躁難　近惡友難
三有險難　及三毒難
遇無難難　値好時難
修功德難　値佛亦難
如是諸難　今悉懺悔
諸佛世尊　我所依止
是故我今　敬禮佛海
金色晃耀　猶如須彌
是故我今　頂禮最勝
其色無上　如天眞金
眼目淸淨　如紺琉璃
功德威神　名稱顯著

(四二) 佛よ、憶念の心もて我を觀察せよ。罪を攝受せよ、われを怖畏より解脫せしめよ。

(四三) 過去百劫の中に、われによりて造られたる過惡のために、我は心悲み、惘れむべく、渇愛によりて惱亂せらる。

(四四) 罪業ありて心怯劣なるわれは常に怖畏し、我が行かむ所、何處として幸福あることなし。

(四五) 諸佛は一切大悲者なり。勝者は有情の怖畏を除去す。罪を攝受せよ。われを怖畏より解脫せしめよ。

【註】 atyaya とあるは atyayaṃ (罪を)の誤植。第四十二偈後半と略ぼ同じ。

(四六) 諸の如來はわがために煩惱の業果を除去したまへかし。[26] 諸佛は大悲離垢の水を以てわれを沐浴せしめたまへかし。

(四七) われによりて過去に造られたる、罪過をわれ懺悔す。又われによりて今(造られたる)罪過なるその一切をわれは懺悔す。

(四八) 一切の惡作によりて未來に不幸を招くべき一切なる、我が惡作

佛日大悲　滅一切闇
善淨無垢　離諸塵翳
無上佛日　大光普照
煩惱火熾　令心焦熱
唯佛能除　如月淸涼
三十二相　八十種好
莊嚴其身　覩之無厭
功德巍巍　明網顯耀
安住三界　如日照世
猶如琉璃　淨無瑕穢
妙色廣大　種種各異
其色紅赤　如日初出
頗梨白銀　校飾光網
如是種種　莊嚴佛日
三有之中　生死大海
潦水波蕩　惱亂我心
其味苦毒　最爲麁澁
如來網明　能令枯涸
妙身莊嚴　相好殊特
金色光明　遍照一切

なるべきその罪業をわれは覆藏せず。

(四九) 身業に三種、口(業)に四種、又意業に三種あり。その一切をわれは懺悔す。

(五〇) 身を以て造り、口を以て造り、意を以て思慮する、十種の所造業、その一切をわれは懺悔す。

(五一) 十不善業を遠離し、十善(業)を奉行して、われは十地に立つべし。又十力最勝を見るべきなり。

(五二) 希求せられざる果報を招來するわが罪業なる一切をわれ諸佛の前に立ちて懺悔す。

(五三) この閻浮洲、及び其の他の世界に於て、何人かの作すかの善業の一切を我は隨喜すべし。

(五四) [27]身口意を以て我に得られたる福德なる、その善根によりて我は最勝の覺に至るべし。

(五五) 生死趣厄難の愚夫の慧によりて造られし所の極重の惡業なる

智慧大海　彌滿三界
是故我今　稽首敬禮
如大海水　共量難知
大地微塵　不可稱計
諸須彌山　難可度量
虛空邊際　亦不可得
諸佛亦爾　功德無量
一切有心　無能知者
於無量劫　極心思惟
不能得知　佛功德邊
大地諸山　尙可知量
毛滴海水　亦可知數
諸佛功德　無能知者
相好莊嚴　名稱讚歎
如是功德　令衆皆得
我以善業　諸因緣故
來世不久　成於佛道
講宣妙法　利益衆生
度脫一切　無量諸苦
摧伏諸魔　及其眷屬

その一切の惡業をわれは十力の面前に立ちて懺悔す。

【註】「十力の面前に」の原語 daśabala-sammukhaṃ agrataḥ の中、sammukham は推定なり。寫本には saṃkaṭam とあり。意義をなさず。義淨譯には「親對」等の語あり。西藏譯は mi-mñam と見えたり。asama「無等」の意なり。

(五六) 生の苦難、種々愛慾行の苦難、世間苦難生死苦難、一切癡人の造作する煩惱の苦難。

(五七) 散動狂心の苦難に於て、惡友の來現の苦難、生死の苦難中に貪染の苦難、瞋恚、愚癡、闇冥の苦難。

(五八) 無暇處の苦難、死時の苦難、福德を得ざるの苦難によりて、積聚する所の罪業なるその一切を無比なる勝者に面して立てる我は懺悔す。

【註】五六偈より五八偈に至る三偈は寫本の爛敗錯雜甚しく義淨譯等を以て推定して讀みたる箇處あり。傍線を施せるもの〻如きは其の一例なり。詩調も未だ整理するの遑なし。最後の句より判ずるに帝金剛(インドラヴヂュラ)調なるが如し。後日の考勘に俟つ。

(五九) われ功德海の如き金色なる諸方邊際を照耀する諸佛を敬禮す。

轉於無上　清淨法輪
住壽無量　不思議劫
充足衆生　甘露法味
我當具足　六波羅蜜
猶如過佛　之所成就
斷諸煩惱　除一切苦
悉滅貪欲　及恚癡等
我當憶念　宿命之事
百生千生　千萬億生
常當至心　正念諸佛
所說微妙　無上正法
我因善業　常值諸佛
遠離諸惡　修諸善業
一切世界　所有衆生
無量苦惱　我當悉滅
若有衆生　諸根毀壞
不具足者　悉令具足
十方世界　所有病苦
羸瘦頓乏　無救護者
悉令解脫　如是諸苦

かれら勝者に歸依す。頭を以て彼等一切勝者に歸命す。

(六〇) 金色にして黃金無垢の光あり。[28] 身は琉璃、離垢、清淨の眼を有し、吉祥、威力、名稱、火焰の藏なる佛日、大悲の光、暗冥の除滅者なり。

【註】「金色にして」の次に若干の脫落あり。

(六一) 離塵にして、美はしく、輝ける身を有し、覺日黃金無垢(の光)を出す身を有し、灼熱の火の如く、心煩惱の火に熱せられたるものに對し、牟尼の月光網は清涼なり。

(六二) 三十二相を具し、諸根身支美はしく、輝く隨好を以て照耀せる身支あり、吉祥、福德、威力、光焰亂轉せる光網あり。三界に於て黑暗の中に日輪の如く住す。

(六三) 琉璃、離塵、廣博、種種色あり。赤銅の曙色を以て、白銀、水精、眞紅の身を有す。種種多樣に莊嚴せられたる光網あり。大牟尼よ、汝は日輪の如く輝けり。

(六四) 生死の河水に墮在し、厄難の瀑流の中にありて、憂悲に惑亂せら

還得勢力　平復如本
若犯王法　臨當刑戮
無量怖畏　愁憂苦惱
如是之人　悉令解脫
若受鞭撻　繫縛枷鎖
種種苦事　逼切其身
無量百千　愁憂驚畏
種種恐懼　擾亂其心
如是無邊　諸苦惱等
願使一切　悉得解脫
若有衆生　飢渴所惱
令得種種　甘美飲食
盲者得視　聾者得聽
瘂者得言　裸者得衣
貧窮之者　卽得寶藏
倉庫盈溢　無所乏少
一切皆受　安隱快樂
乃至無有　一人受苦
衆生相視　和顏悅色
形貌端嚴　人所喜見

れ、死の水、老の波、[29]苦の海は極めて熾烈に震撼する時、善逝の光明網によりて我れ超度せしめむ。

(六五) 我れ黃金威耀の身なる、金色輝ける身を有する、智慧の藏なる、一切三世間中に堅固なる、種種色ある、淸淨相の身を有する諸覺者を敬禮す。

(六六) 大海に於て水の無量なるが如く、大地の極微を以て無邊なるが如く、迷盧(山)の寶石を以て邊際無比なるが如く、又虛空の邊際彼岸無きが如く、

(六七) 是の如く實に佛の功德は無邊際にして、一切有情にとりて知る能はず。多劫の間思慮せむも、功德の邊際を知る能はず。

(六八) 巖石、山岳、巨海を含める大地は多劫波にしてその數を知り得べし。又水は毛端許りの量をも(知り得べし)。[30] 佛の功德の、尖端と彼岸は(知り)得られず。

【註】 校訂本の guṇa は gaṇa に改むべし。脚註の京都本を採る。

心常思念　他人善事
飲食飽滿　功德具足
隨諸衆生　之所思念
皆願令得　種種妓樂
箜篌箏笛　琴瑟鼓吹
如是種種　微妙音聲
江河池沼　流泉諸水
金華遍布　及優鉢羅
隨諸衆生　之所思念
即得種種　衣服飲食
錢財珍寶　金銀琉璃
眞珠璧玉　雜厠瓔珞
願諸衆生　不聞惡聲
乃至無有　可惡見者
願諸衆生　色貌微妙
各各相於　共相愛念
世間所有　資生之具
隨其所念　悉令具足
願諸衆生　諸所求索
如其所須　應念即得

(六九) 彼等一切の有情は、功德、讚嘆、名稱聲譽を以て輝ける相好を以て八十種好嚴飾の身を以て是の如くなれかし。

【註】 kotyā とあるものは kīrtyā の誤植。

(七〇) 我れこの善業を以て久しからずして世に於て佛となるべし。世間利樂のために法を說き、多苦に逼迫せらるゝ諸有情を解脫せしむべし。

(七一) 我れ勢力と軍團を有せる魔を征服し、淨法輪を轉ずべし。不可思議劫波の間世に住し、甘露食を以て有情を滿足せしむべし。

【註】(「甘露食を以て」の原文は amṛtena pāṇinā なれば「甘露の手を以て」と譯せざるべからず。されどこれにては意義通ぜず。「甘露の水を以て」卽ち amṛtena pānena ならば可能ならざるに非ず。pānena を韻律の拘束上 pāninā となし又これを pāninā となし、更にこれを pāṇinā と寫誤せしことはあり得べしと思はる。然るに曇無讖譯の「甘露法味」義淨譯の「甘露味」より見る時は、或はこれ amṛtena pāśinā の誤寫ならずやとも思はる。pāśinā は prāśinā の訛語形にして prāśinā は prāśin (食ふ)の具格單數の形、固より形容詞なれば amṛta を名詞と見、主語とし「食ふ甘露」の意と見る。これ亦得たり。amṛta-prāśin なる用例は辭典にも見えたれば、これをかく二語として使用することも有り得べき

香華諸樹　常於三時
雨細末香　及塗身香
衆生受者　歡喜快樂
願諸衆生　常得供養
不可思議　十方諸佛
無上妙法　清淨無垢
及諸菩薩　聲聞大衆
願諸衆生　常得遠離
三惡八難　値無難處
覲親諸佛　無上之王
願諸衆生　常生尊貴
多饒財寶　安隱豐樂
上妙色像　莊嚴其身
功德成就　有大名稱
願諸女人　皆成男子
具足智慧　精勤不懈
一切皆行　菩薩之道
勤心修習　六波羅蜜
常見十方　無量諸佛
坐寶樹下　琉璃座上

なり。今「甘露食」と世しはこれに準ふ。勿論此の語は[illegible]（食ふ）なる語根より來る。

（七二）過去に過去諸佛のありし如く、無上なる六波羅蜜を成滿すべし。煩惱を滅し、諸苦を散じ、貪瞋癡を鎭むべし。

（七三）〔3〕我常に生念なるべし。百生千倶胝生の間、常に牟尼帝王を念ずべし。彼等の廣大の語を聞くべし。

【註】第十一頌と比較せよ。

（七四）我れこの善業を以て常に諸佛と倶に相會するを得む。惡業を遠離して清淨なる福德を行ずべし。

【註】第十二頌と比較すべし。

（七五）一切の國土に於て、一切生類の一切の罪業は世に於て滅せよかし。諸根不具なるもの、身支缺陋なるものは一切今や善備せる諸根あれかし。

（七六）病患のために力衰へ、身瘦せ、十方に於て依怙無き彼等一切は容易に病患より解脫して、無病にして諸根强盛なるを得よかし。

安住禪定　自在快樂
演說正法　衆所樂聞
若我現在　及過去世
所作惡業　諸有險難
應得惡果　不適意者
願悉滅盡　令無有餘
若諸衆生　三有繫縛
生死羅網　彌密堅固
願以智刀　割斷破裂
除諸苦惱　早成菩提
若此閻浮　及餘他方
無量世界　所有衆生
所作種種　善妙功德
我今深心　隨其歡喜
我今以此　隨喜功德
及身口意　所作善業
願於來世　成無上道
得淨無垢　吉祥果報
若有敬禮　讚歎十力
信心清淨　無諸疑網

（七七）〔32〕惡王、盜賊の爲に捉へられ、縛せられ種種多樣百(種)の恐怖を以て苦厄を得む。彼等極めて怖畏すべき、百(種)の怖畏によりて苦厄に陷り苦しめられたる彼等一切の有情は解脫せよかし。

【註】校訂本 te sarve は恐らくは ye sarve に作るべきが如し。

（七八）縛に縛せられ苦しめられ、種種の苦厄にありて多百千の苦に惱亂せられ、種種の怖畏極重の憂悲を得て苦しめられたる、

【註】「ありて」と譯せし原語は saṃsthitā hi にしてこれ推定なり。寫本は daśasthitāni に作る。意義明かならず。daśa を daṇḍa ならむかとも考へしが結局今の如くに定めたり。

（七九）一切彼等は縛より解脫せよかし。打たれたるものは笞杖より解脫せよかし。斬らるべきものは生命に解脫せよかし。困厄に陷れるものは一切怖畏なかれかし。

（八〇）飢渴に苦しめられたる彼等有情は種種の飲食を得よかし。盲ひたるものも種種の色を見よかし。聾ひたるものも微妙の音聲を

能作如是　所說懺悔
便得超越　六十劫罪
諸善男子　及善女人
諸王刹利　婆羅門等
若有恭敬　合掌向佛
稱歎如來　拜讚此偈
在在生處　常識宿命
諸根具足　淸淨端嚴
種種功德　悉皆成就
在在處處　常爲國王
輔相大臣　之行恭敬
非於一佛　五佛十佛
種諸功德　聞是懺悔
若於無量　百千萬億
諸佛如來　種諸善根
然後乃得　聞是懺悔

聞けかし。

(八一) 裸形なるものも種種の衣服を得よかし。[33] 貧窮なる有情は富を得よかし。一切の有情は多くの財穀、種種の寶ありて幸福なれかし。

(八二) 誰にてもあれ、苦受は隨逐せざれかし。一切の有情は見るに美はしかれ。美貌にして、心悅豫に、容姿愛すべく、常に多くの幸福は聚まれかし。

(八三) 諸の市民は心寂靜にして福德昌榮に、箜篌、小鼓、大鼓、妙音(の樂器)黃金の紅蓮、靑蓮等の蓮華を有せる、泉流、湖水、池沼、河川、

(八四) 食物、飲料、衣服、財物、貨幣、寶玉眞珠の裝飾黃金、靑玉種種の寶は念に隨つて彼等の前にあれかし。

(八五) [34] 何處にもあれ苦の聲は世間に於て有らざれかし。一人の有情も違逆の觀なかれかし。一切彼等は殊勝の色あり、相互に照耀せよかし。

(八六) 人間世界に於て、何にてもあれ幸福は彼等にとりて意念と俱に生せよ。念に隨つて一切の願求は福德なる果を以て滿足せしめよかし。

(八七) 香、鬘、塗油、燒香、末香、種種の華、三時に樹々より雨ふり、滿足せる彼等有情は執受せよかし。

【註】 kusumaṃ ca pūrṇam なる校訂本に隨へば「華は滿ちたり」と譯すべし。今 śikṣāsamuccaya の引用文 kusumaṃ vicitram の方を採りて「種種の華」と譯せり。各據一義並不相違と謂ふべし。

(八八) 十方に於て菩薩聲聞と俱なる一切如來の覺に安住する法に對し、不可思議の供養をなせよかし。

(八九) [35] 下趣を一切遠離せしめよ。八種無暇處の生を超えしめよ。勝者王の形像に近づかしめよ。常に諸佛と俱に會することを得しめよ。

(九〇) 種族高貴にして常に多くの財物穀類を以て倉廩豐饒なれかし。

容姿、勢力、名稱、聲譽を以て多劫の間莊嚴せしめよ。

（九一）一切の女人をして常に男子にして勇者、英雄、智者、學者ならしめよ。彼等一切は常に覺のために行じ、彼等は六波羅蜜を行ぜよかし。

【註】　各寫本は nitya-rata に作る。かくては「一切の女人は常に樂まれてあれ」といふが如き意となる。涼譯「願諸女人皆成男子」、唐譯「悉願女人變爲男」に對せば、誰か享樂の意と思料せむ。校訂本智者 vijña は vidu と正してこれを切離すを可とす。その前の ca、ca は省くべし。

（九二）彼等は十方に於て、最勝寶樹の下に、琉璃の師子座に樂しく坐せる諸佛を拜見せよかし。演說せらるゝ法を聽けかし。

（九三）過去生死苦難の中に於て得られたる罪業はわれによりて打ち克たれたり。[36] 罪業に專らならるるものが保有する所の彼等一切は殘る所なく滅盡せよかし。

（九四）生死の縛に臨み、輪廻の索によりて緊く繫縛せられたる一切の有情は智慧の光によりて照されてあれかし。縛より解脫せよかし。諸苦より離脫せよかし。

【註】 原語 duḥkhair upaji bhavantu の upaji は果して何の意たるやを明かにせず。恐らくは duḥkhad apavarja bhontu と云ふ如きものならむ。西蔵譯には sdug-bsňal-rnams las (myur-du) thar-gyur (thab) cig とあるより、かくの如く見らる。梵本脚註の推定は取消す。

(九五) 此の閻浮洲及び他の世界に於て諸有情は種種甚深の福德を爲さむ。その一切の福德を我は随喜す。

(九六) 身口意によりて得られたる、その福德の随喜によりて、果を具せる願の成就はわれにあれかし。われは離塵最勝の覺に達すべし。

(九七) 常に悅豫淸淨無垢の意を以て、十力を禮し滿足せしむる彼は[37]この廻向懺悔によりて六十劫の間惡趣を離るべし。

(九七) これらの宣說せられたる偈を以て諸の男子、女人、婆羅門剎帝利、並びに合掌して立ち牟尼を滿足せしむる彼は百生に於て一切の處に生念なるべし。

(九九) 一切の身、一切の根、輝ける身、種種の圓滿なる功德を具足し、常に人帝王に供養せられ、到る處にかくの如きものとなるべし。

金光明經讃歎品第四

爾時佛告地神堅牢。善女天。過去有王名金龍尊。常以讃歎。讃歎去來現在諸佛

我今尊重　敬禮讃歎
去來現在　十方諸佛
諸佛清淨　微妙寂滅
色中上色　金光照耀

(一〇〇) 彼等は一佛の前に善を作せしに非ず。二三(佛)に非ず、五(佛)に非ず。十(佛)に非ず。

(一〇一) この懺悔がその耳數に入るべきその人の善は千佛の前になされたり。

【註】原文 tathī は teṣām と改むるを可とす。次の yeṣām に一致するものなり。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、懺悔品第四。

蓮華藏一切如來讃嘆品第五【38】

時に世尊は菩薩集會なる善家天女に告げて言へり。「善家天女よ、又彼の時に金臂帝王なる王ありき。この蓮華藏なる一切如來讃嘆を以て過去未來現在の諸佛を讃じて言へり。

【註】原語 suvarṇabhujendra 涼譯の金龍尊、唐譯の金龍主より見るに suvarṇabhujagendra とありしならむ。

於諸聲中　佛聲最上
猶如大梵　深遠雷音
其髪紺黑　光螺焔起
蜂翠孔雀　色不得喩
其齒鮮白　猶如珂雪
顯發金顔　分齊分明
其目脩廣　清淨無垢
如青蓮華　映水開敷
舌相廣長　形色紅輝
光明照耀　如華初生
眉間毫相　白如珂月
右旋潤澤　如淨琉璃
眉細脩揚　形如月初
其色黑耀　過於蜂王
鼻高圓直　如鑄金鋌
微妙柔軟　當于面門
如來勝相　次第最上
得味眞正　無與等者
一一毛孔　一毛旋生
軟細紺青　猶孔雀項

(一) 過去の勝者、十方世界に於て現在し、保持するかれら勝者に敬禮す。我れかの僧衆の一となるべし。

【註】 校訂本 praśasyiye なる推定を取消し、脚註の prabhajisye を本文に入る。

(二) 寂靜にして極めて寂靜なる清淨牟尼帝王、その身は金色に輝き、一切の天阿修羅の妙音ある覺者、梵音聲の響を有せり。

(三) 六足の髻、地生の髪[39]紺青の旋文ある髪に似たり。螺貝と雪の如き極めて白き齒あり。黄金の光に輝ける臍あり。

【註】 原語 saṭ-pada(六足)は蜜蜂のこと。maula は mauli と讀み頂髻のことゝ解す。

【註】 原文に kāśa 印度本の keśa を採る。

(四) 紺青にして廣く清淨なる眼、紺青にして蓮華の開敷せる輝あり。紅蓮の如き好色の廣長舌あり。その顔は蓮華の輝ある蓮華の如し。

【註】 原文 pracyuti は phallita と讀む。

(五) 螺貝蓮華の如き口に旋毛あり。右旋して吠琉璃の色あり。微細

【註】 varttita は vartita の誤植。推定なり。寫本は varjita と見えたり。

卽於生時　身放大光
普照十方　無量國土
滅盡三界　一切諸苦
令諸衆生　悉受快樂
地獄畜生　及以餓鬼
諸人天等　安隱無患
悉滅一切　無量惡趣
身色微妙　如融金聚
面貌淸淨　如月盛滿
佛身明耀　如日初出
進止威儀　猶如師子
脩臂下垂　立過于膝
猶如風動　婆羅樹枝
圓光一尋　能照無量
猶如聚集　百千日月
佛身淨妙　無諸垢穢
其明普照　一切佛刹
佛光巍巍　明焰熾盛
悉能隱蔽　無量日月
佛日燈炬　照無量界

【註】 veruli なる原語明かならず。恐らくは vaidūrya の訛轉形ならむか。

なる(眉の)月は纎月の如く牟尼の身支は蜜蜂の輝の如し。

(六) 鼻は金鋌の如く、好色柔軟に、面上に高く豊かに、脩直にして殊妙なる好き鼻、一切勝者の眉は常に柔軟なり。

(七) 毛孔の端は一齊にして一面なり。【40】毛髮は右旋せり。紺青の色

【註】 校訂本 eka-same cita とあるは eka-samaikaṭa と改む。ekata は ekānta の韻律的省約なり。

あり。輝く耳釧あり。紺青にして孔雀の頸の如く輝けり。

(八) その身生じて齊整に光耀あり。十方世間に於て一切供養せられたり。三界に於て無邊の苦を滅し、有情は一切の樂を以て滿足せしめらる。

【註】 pūjita と sarvi を分離すべし。ananta praśānta trilokeの三語も分離すべし。tarpita-sattvam は結合すべし。

(九) これら地獄趣に於て、傍生趣に於て、餓鬼、天、阿修羅、人趣に於て、有情

皆令衆生　尋光見佛
本所修習　百千行業
聚集功德　莊嚴佛身
臂𦟛纖圓　如象王鼻
手足淨軟　敬愛無厭
去來諸佛　數如微塵
現在諸佛　亦復如是
如是如來　我今悉禮
身口淸淨　意亦如是
以妙香華　供養奉獻
百千功德　讚詠歌歎
設以百舌　於千劫中
歎佛功德　不能得盡
如以所有　現世功德
種種深固　微妙第一
設復千舌　欲讚一佛
尙不能盡　功德少分
況欲歎美　諸佛功德
大地及天　以爲大海
乃至有頂　滿其中水

は一切の樂を得、惡趣に於て一切寂靜ならむ。

(一〇) 色、好色、黃金の如く、その身鍛冶せる黃金の光あり。その顏は離塵なること月の如く、その顏は照耀して極めて離塵なり。

(一一) その身柔軟、若き身體生長せり。歩むこと師子の如く、力强きこと象の如し。[41] 懸垂せる手、懸垂せる臂、風に亂るゝ沙羅の枝の如し。

(一二) その光は輝く天光を放ち、燃ゆる千の日輪の如し。無垢最上の身を以て無邊の刹土は一切照されたる牟尼帝王なり。

(一三) 無邊百千に於て刹土は月の光網あり。彼等一切は佛光遍照のために究竟せり。

(一四) 百千に於て刹土は世間燈なる佛日あり。百千の佛日あり。有情をして如來日輪を拜見せしめよ。

(一五) その身は百千の福德より輝き、その身は一切功德を以て莊嚴せられ、勝者の臂は醉象の如し。[42] その手は離垢の好相を以て飾ら

【註】 cita を arcita に訂正す。

倘以一毛　知其滴數
無有能知　佛一功德
我今以禮　讚歎諸佛
身口意業　悉皆清淨
一切所修　無量善業
與諸衆生　證無上道
如是人王　讚歎佛已
復作如是　無量誓願
若我來世　無量無邊
阿僧祇劫　在在生處
常於夢中　見妙金鼓
得聞懺悔　深奧之聲
今所讚歎　面貌清淨
願我來世　亦得如是
諸佛功德　不可思議
於百千劫　甚難得値
願於當來　無量之世
夜則夢見　晝如實說
我當具足　修行六度
濟拔衆生　越於苦海

れたり。

（一六）地面の如く塵に等し。過去の諸佛は微細塵の如し。微細塵の如く現在し、微細塵の如く安住する、

（一七）彼等勝者に對し、身口意を以て淨信なるわれは善心に於て百色の華を供へ、芳香を供へて敬禮を作す。

（一八）最上種々多種なる百の舌を以ても、百千劫によりて勝者のかの功德成就寂滅なる佛の功德を語り(得)ず。

（一九）百の舌を以ても、一の勝者の功德を語る能はじ。【43】實に一切の勝者の一功德を廣く說くことは能はじ。

（二〇）一切諸天を含む所說の群衆、一切有頂の住處に於て、水にて充たされむ。毛端の執受によりて量り得るも、善逝の一功德を(量り得)ず。

（二一）身口淨意を以てわれ一切の勝者を讃す。この集められたる我が最上福德の果によりて、有情は勝者となるべし。

（二二）是の如く人主は佛を讃じ、是の如く王は願を作せり。何處にも

然後我身　成無上道
令我世界　無與等者
奉貢金鼓　讚佛因緣
以此果報　當來之世
値釋迦佛　得受記莂
拜令二子　金龍金光
常生我家　同共受記
若有衆生　無救護者
衆苦逼切　無所依止
我於當來　爲是等輩
作大救護　及依止處
能除衆苦　悉令滅盡
施與衆生　諸善安樂
我未來世　行菩薩道
不計劫數　如盡本際
以此金光　懺悔因緣
使我惡海　及以業海
煩惱大海　悉竭無餘
我功德海　願悉成就
智慧大海　清淨具足

あれ、我に未來無邊劫の生あらむ所に、

(二三) われは夢の中に是の如きこの小鼓を見、かしこに是の如き懺悔を聞く。【44】蓮華藏は是の如き勝者讚歎をなし、生々の中、かしこに念を得む。

(二四) 千劫にも得ること難き、無邊無比なる佛の功德を夢の中にだも聞きて、日中に彼等の中に示すべし。

【注】 ama は ana として次の語に冠す。

(二五) 諸有情は苦海を解脫せよかし、六波羅蜜を滿足せよかし。後に無上菩提を得しめ、我が無等なる國土はあるべし。

(二六) 小鼓の賦與する異熟果によりて、一切勝者の讚嘆のために、われ釋迦牟尼帝王に面見し、其處にして授記を得べし。

(二七) 【45】我が子なる二人の童子あり。金主と金光なるかれら童子は其處に無上覺の授記を得べし。

(二八) 有情の守護なく、救護なく、衞護なき、困厄に陷れるものゝ中に、當

無量功德　助菩提道
猶如大海　珍寶具足
以此金光　懺悔力故
菩提功德　光明無礙
慧光無垢　照徹清淨
我當來世　身光普照
功德威神　光明焰盛
於三界中　最勝殊特
諸功德力　無所減少
當度衆生　越於苦海
幷復安置　功德大海
來世多劫　行菩提道
如昔諸佛　行菩提者
三世諸佛　淨妙國土
諸佛至尊　無量功德
令我來世　得此殊異
功德淨土　如佛世尊
信相當知　爾時國王
金龍尊者　則汝身是
爾時二子　金龍金光

來一切救護、保護、依怙とならむ。

(二九) 苦の因を盡し、一切樂の藏たり。過去際の如く、未來劫に覺を行ずべし。

(三〇) 金光明最勝の懺悔のために、わが過惡の海は涸渇せよかし。わが業海は分散せよかし。わが煩惱海は截斷せよかし。

(三一) 【46】わが福德海は滿足せよかし。わが智慧海は淨められよかし。離塵智慧光の力によりて、われは一切功德の海とならむ。

(三二) 覺の功德を以て功德の寶は充滿せむ。懺悔金光明の力を以てわが福德の光はあるべし。わが覺の光は淨められよかし。

(三三) わが身光はあるべし。福德光明遍照し、われは一切三界に於て常に福德力を具足して殊勝ならむ。

(三四) 苦海を超度すべし。一切樂の海に處して、過去際の如く未來劫に覺を行ずべし。

(三五) 三界に於て殊勝なる國土のある如く【47】一切勝者の無邊なる功

今汝二子　銀相等是

金光明經空品第五

無量餘經　已廣說空
是故此中　略而解說
衆生根鈍　尠於智慧
不能廣知　無量空義
故此尊經　略而說之
異妙方便　種種因緣
爲鈍根故　起大悲心
今我演說　此妙經典
如我所解　知衆生意
是身虛僞　猶如空聚
六入村落　結賊所止

德によりて、是の如く無邊功德ある一切國土は當來われにまであるべきなり。

【註】此の一品には爛敗の部分相當に多く、讀み難し。更に修正の後正譯を作るべし。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、蓮華藏一切如來讚嘆品第五。

空性品第六【49】

時に世尊はその時これらの偈を宣べたり。

(一) 他の不可思議經典の中、空法は極めて廣く說かれたり。故にこの最上經典の中に空法は汝等に要略して說かる。

(二) 一切少智の有情は無智の故に一切法を知る能はず。見よ、此に最勝帝王經によりて空法は要略して說かれたり。

【註】若し yasyeha sûtre dvipadôttamena と讀まば「彼のために此の經中に於て兩足尊によりて」と譯すべし。

一切自住　各不相知
眼根受色　耳分別聲
鼻嗅諸香　舌嗜於味
所有身根　貪受諸觸
意根分別　一切諸法
六情諸根　各各自緣
諸塵境界　不行他緣
心如幻化　馳騁六情
而常妄想　分別諸法
猶如世人　馳走空聚
六賊所害　愚不知避
心常依止　六根境界
各各自知　所伺之處
隨行色聲　香味觸法
心處六情　如鳥投網
其心在在　常處諸根
隨逐諸塵　無有暫捨
身空虛僞　不可長養
無有諍訟　亦無正主
從諸因緣　和合而有

(三) 又他の方便理趣の因によりて、有情哀愍の力を生ぜんがために【49】諸の有情の知るべき如くに、この最上經帝王は說かれたり。

(四) 此の身は空聚落の如し。諸根は六賊の衆の如し。彼等は一切一聚落に於て住す。彼等は互に相知らず。

(五) 此等の中に眼根は色に走り、耳根は聲を緣じ、鼻根は種種の香に牽かれ、舌根は常に味に走る。

(六) 身根は觸に行きて走り、意根は法を緣じ、六根かくの如く各自自の境に走る。

(七) 【50】心は幻の如く動轉す。又六根は境を緣ず。人の空聚落に走り、諸賊によりて戰闘に依止するが如し。

(八) 心が六境に依止する如く、根は境を知る。色と聲と香と味と觸と法境となり。

(九) 一切六根の中に心は鳥の動轉するが如く根に入る。根に依止する在在處處、何處にまれ根は自我を知ることなし。

無有堅實　妄想故起
業力機關　假爲空聚
地水火風　合集成立
隨時增減　共相殘害
猶如四蛇　同處一篋
四大蚖蛇　其性各異
二上二下　諸方亦二
如是蛇大　悉滅無餘
地水二蛇　其性沈下
風火二蛇　性輕上昇
心識二性　躁動不停
隨業受報　人天諸趣
隨所作業　而墮諸有
水火風種　散滅壞時
大小不淨　盈流於外
體生諸蟲　無可愛樂
捐棄塚間　如朽敗木
善女當觀　諸法如是
何處有人　及以衆生
本性空寂　無明故有

【註】 kurvatu にては詮顯する所無し。kutraci と推定す。

(一〇) 身は動搖無く、努力無し。堅固ならず。緣によりて生ず。【51】虛妄分別より生起し、業機關、空聚落の如く住す。

【註】 abhūta を次の語に結合せよ。

(一一) 地水火風は諸方に於て聚落の邊に立てる賊の如し。常に互に殘害すること同室に於ける毒蛇の如し。

(一二) 彼等界蛇に四種あり。二(蛇)上に行き、二(蛇)下に行く。各方に於て二者各々一切かれら界蛇を滅ぼす、

(一三) 地蛇と水蛇とこの二は下方に滅盡し、火蛇と風蛇とこの二は空際に向つて上方に行く。

(一四) 【52】心は識の中間に居り、過去に造られたる(業)に隨つて行き、天人三惡趣に於て、前生に造られたる(業)の如くに轉生す。

(一五) 身は膽と風と痰の盡際より得られ、尿水、糞便充滿して樂しむべきなく、墓地に捨てられたる木片の如し。

如是諸大　一一不實
本自不生　性無和合
以是因緣　我說諸大
從本不實　和合而有
無明體相　本自不有
妄想因緣　和合而有
無所有故　假名無明
是故我說　名曰無明
行識名色　六入觸受
愛取有生　老死愁惱
衆苦行業　不可思議
生死無除　輪轉不息
本無有生　亦無和合
不善思惟　心所所造
我斷一切　諸見纒等
以智慧刀　裂煩惱網
五陰舍宅　觀悉空寂
證無上道　微妙功德
開甘露門　示甘露器
入甘露城　處甘露室

(一六) 汝善女神よ、これらを以て觀せよ。是の如くそこに何等か有情若くは我なるもの有らむ。これら一切諸法は空なり。無明より縁生じ、

(一七) これら大種は一切虛妄なり。大種本來無體の故に【53】此の故に大種は無生なり。知られざるが故に何時も有ることなし。

(一八) 無明より縁生ず。知られざるによつて無明の語あり。是の故に我によりてこれ無明と說かる。行識は名色と倶なり。

(一九) 六處、觸、受、愛、取、有、生、老、死、憂、悲、苦惱、不可思議の輪廻あり。

【註】saṃskāra は西藏譯の如く saṃsāra に改むべし。

(二〇) 生死輪に於て彼等は立ち、非有より生じて無生なる如く、是の如く、自から見に墮せる非如理觀察を斷せよ。

(二一) 智慧の刀を以て煩惱の網を切斷せよ。諸蘊の舍宅を空の如しと見よ。殊勝なる覺の功德に觸れよ。【54】わが爲に不死城の門を開け。

令諸衆生　食甘露味
吹大法螺　擊大法鼓
然大法炬　雨勝法雨
我今摧伏　一切怨結
豎立第一　微妙法幢
度諸衆生　於生死海
永斷三惡　無量苦惱
煩惱熾然　燒諸衆生
無有救護　無所依止
我以甘露　清凉美味
充足是輩　令離焦熱
於無量劫　遊修諸行
供養恭敬　諸佛世尊
堅固修習　菩提之道
求於如來　眞實法身
捨諸所重　肢節手足
頭目髓腦　所愛妻子
錢財珍寶　眞珠瓔珞
金銀琉璃　種種異物

金光明經卷第一

(二二) かの甘露味の器を示せ。清淨なる不死城の舍宅に入れ。われは不死の味を以て自らを滿足すべし。わがために最上の法鼓を擊て。

【註】 西藏譯 khu-ba (味) とあるに準ふ。

(二三) わがために最上の法螺を吹け。わがために最上の法炬を燃せ。わがために最上の法雨を雨らせ。わがために煩惱の怨敵は打ち勝たれたり。

(二四) わがために無上の法幢を建てよ。わがために諸有有情海は超度せられたり。生類のためにわれ煩惱の火焰を鎭靜してわがために三惡趣は閉ぢられたり。

(二五) この故にわれ過去多劫の間[35]不可思議なる導師を供養し、正法身を希求しつゝ、堅固行によりて覺のために行じ、

(二六) 兩手、兩足、財物、貨幣、寶玉、眞珠の裝飾、兩眼、最勝の身、愛する妻子、黃金、琉璃、種種の寶を捨施せむ。

(二七) 三千(世界)に於て、一切樹林を截斷し、一切を粉末となし、微細塵の如くなさむ。

【註】この第二七偈以下、梵文爛敗、殆んど讀むべからず。殊にこの一頌は全く頌法に當らず。蓋し首盧迦が寫誤と註釋の混入に禍されて亂れたるものなるべし。

(二八) 虛空界に至るまで粉末の聚を作り、地塵に等しきものを不能の碎分となし、

【註】原語 aśakad は aśakya の誤植。これも推定のみ。寫本は脚註の如し。

(二九) 智慧ある多くの有情は一切を數へ得べし。勝者の智は(數へ得)ず。

(三〇) [56] 大牟尼の一念轉の智は多倶胝劫にも如何にしても數へ能はじ。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、空性品第六。

金光明經卷第二

北涼三藏法師曇無讖譯

金光明經四天王品第六

爾時毘沙門天王。提頭賴吒天王。毘留勒叉天王。毘留博叉天王。倶從座起偏袒右肩。右膝著地胡跪合掌。白佛言。世尊。是金光明微妙經典衆經之王諸佛世尊之所護念。莊嚴菩薩深妙功德。常爲諸天之所恭敬。能令天王心生歡喜。亦爲護世之所讚歎。此經能照諸天宮殿。是經能與衆生快樂。是經能令地獄餓鬼畜生諸河焦乾枯竭。是經能除一切怖畏。是經能却他方怨賊。是經

四大王品第七[57]

時に多聞大王、持國大王、增長大王、廣目大王は座より起ち、一肩に衣を覆ひ、右膝輪を地に著けて、世尊の方に合掌を傾け、世尊に白して言へり。「世尊よ、この金光明經帝王經は一切如來によりて宣說せられ、一切如來によりて瞻視せられ、一切如來を具足し、一切菩薩の衆に敬禮せられ、一切天衆に供養せられ、一切天帝衆に歡喜せられ、一切諸王に詠嘆し、讃美せられ、種種に稱揚せられ、一切天の住處を照耀し、一切有情に最上の樂を與ふるものにして、一切地獄、傍生、夜摩界の苦を鎭め、一切の怖畏を滅し、一切の怨敵輪を轉じ、饑饉の災厄を滅し、疾疫の災厄を滅し、智慧照耀し、最上の[58]寂靜を作り、憂悲苦厄を滅し、種種苦患を滅し、百千の苦患を滅ぼすものなり。大德世尊よ、この金光明最勝帝王經の會中に於て廣く宣說せらるゝ時、我等四大王は軍勢眷屬と倶に、この聽法によりて法

能除穀貴飢饉。是經能愈
一切疫病。是經能滅惡星
變異。是經能除一切憂惱、
舉要言之。是經能滅一切
衆生無量無邊百千苦惱、
世尊。是金光明微妙經典。
若在大衆廣宣説時。我等
四王及餘眷屬。聞此甘露
無上法味。增益身力心進
勇鋭具諸威德。世尊。我
等四王。能説正法修行正
法、爲世法王以法治世。
世尊。我等四王及天龍鬼
神、乾闥婆阿脩羅迦樓羅
緊那羅摩睺羅伽。以法治
世。遮諸惡鬼噉精氣者。
世尊。我等四王二十八部
諸鬼神等。及無量百千鬼
神。以淨天眼過於人眼。
常觀擁護此閻浮提。世尊。

の甘露味を以て天身大威力を增長すべし。我等の身に於て精進と威力、と勢力を生ずべし。我等の威光と吉祥と幸福は身の中に入るべし。世尊よ、われら四大王は正法を具し、正法を語り、法王なり。大德世尊よ、われらは天、龍、藥叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽をして正法によりて王業をなさしむべし。世尊よ、われら四大王は二十八藥叉神將と倶に、多百千の藥叉と倶に一切常に閻浮洲を人間に超過せる淨天眼を以て觀察し、守護し、成熟すべし。[59] 大德世尊よ、此の因によりてわれら四大王について護世者といふ名は生せり。

是故我等名護世王。
若此國土有諸衰耗怨賊侵境饑饉疾疫種種艱難。若有比丘受持是經。我等四王當共勸請。令是比丘以我力故。疾往彼所國邑郡縣。廣宣流布是金光明微妙經典。令如是等種種百千衰耗之事悉皆滅盡。

世尊。如諸國王所有土境。是持經者若至其國。是王應當往是人所聽受如是微妙經典。聞已歡喜復當護念恭敬是人。世尊。

「大德世尊よ、若し何人かこの閻浮洲に於て顚倒して侵略によりて打たれむ。饑饉若くは種種なる厄難、百の厄難、千の厄難、百千の厄難を以て打たれむ。大德世尊よ、われら四大王はこの金光明最勝帝王經及び帝王經受持者なる彼等比丘の勸發をなすべし。大德世尊よ、若しかれら法師比丘がわれら四大王の勸發及び佛の加持によりて、如何なる國土にもあれ、進入すべきそれらの國土に於て、この金光明最勝帝王經を廣說せんに、是の如き國土に存する種種なる百の厄難、千の厄難、百千の厄難は消滅すべし。

【註】 yesu yesu……tesu tesu といふ讀方に從ふ。脚註を參照。

「大德世尊よ、人王の國土に於て、彼等帝王經受持者なる法師比丘は往詣すべし。【60】この人王はこの金光明最勝帝王經を聞くべし。聞き已りて彼等帝王經受持者なる比丘に對し、一切の敵對者より守護、救護、攝受、衞護をなすべし。大德世尊よ、われら四大王はかの人王の一切國

我等四王。復當勤心擁護是王及國人民。爲除衰患令得安隱。世尊。若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷受持是經。若諸人王有能供給施其所安。我等四王。亦常令是王及國人民一切安隱具足無患。世尊。若有四衆受持讀誦是妙經典。若諸人王有能供養恭敬尊重讃歎。我等四王。亦復當令如是人王於諸王中常得第一供養恭敬尊重讃歎。亦令餘王欽尙羨慕稱讃其善。

爾時世尊讃歎護世四天王等。善哉善哉。汝等四王。過去。已曾供養恭敬尊重讃歎無量百千萬億諸佛。

土に行ける諸有情に對し、守護、救護、攝受、衞護、寂靜安穩をなすべし。大德世尊よ、若し一切の人王が帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に對し、一切安樂の供給によりて安樂ならしめば、大德世尊よ、われら四大王はかの人王を一切の王よりも一層恭敬、尊重、敬重、供養せられ、一切國土に於て讃嘆せらるゝものとなすべし。」

時に世尊は四大王に善哉を宣せり。「善きかな、善きかな大王よ、善きかな、善きかな、われらの大王よ、かくてかくの如き汝等は過去の諸佛に供養をなし、善根を[61]植ゑたる倶胝百千の諸佛に奉事し、正法を具し、

於諸佛所種諸善根。說於正法。修行正法。以法治世爲人天王。汝等今日長夜利益於諸衆生行大悲心。施與衆生一切樂具。能遮諸惡勸興諸善。以是義故。若有人王能供養恭敬此金光明微妙經典。汝等正應如是護念。滅其苦惱與其安樂。汝等四王及諸眷屬。無量無邊百千鬼神。若能護念如是經者。即是護持去來現在諸佛正法。汝等四王及餘天衆百千鬼神。與阿脩羅共戰鬪時。汝等諸天常得勝利。汝等若能護念此經。悉能消伏一切諸苦。所謂怨賊饑饉疾疫。若四部衆有能受持讀誦此經。汝等亦應勤心

正法を語り、正法を以て諸天諸人をして王業をなさしめよ。かくて過去長夜の間、諸の有情に對し、利樂の心あり、安樂慈心あり、一切有情利樂信樂を具足し、一切の不利樂を滅し、一切有情に對して一切利樂を積集せんと勤む。かゝる汝等四大王は人王と、及び金光明最勝帝王經の供養、恭敬に勤むる彼等に對して守護、攝受、衞護、寂靜安穩をなせ。されば汝等四大王及び百千の藥叉の眷屬によりて、過去、未來、現在の諸佛世尊の法眼は守護せられ、衞護せられ、攝受せられてあるべきなり。かくて汝等四大王、全眷屬多百千の藥叉、諸天の天と阿修羅の戰鬪に於て勝利

【註】 校訂本 saṭala は sakala に一定すべし。

はあるべきなり。阿修羅の敗衂はあるべきなり。一切の侵略摧破者なる金光明最勝帝王經のために、[62]かれら帝王經受持者なる比丘、比丘尼優婆塞、優婆夷に對して汝等は守護、救護衞護、寂靜安穩をなせ。」

守護。爲除衰惱施與安樂。

爾時四王復白佛言。世尊。是金光明微妙經典。於未來世在所流布。若國土城邑郡縣村落隨所至處。若諸國王以天律治世。復能恭敬至心聽受是妙經典。幷復尊重供養供給持是經典四部之衆以是因緣。我等時時得聞如是微妙經典。聞已卽得增益身力。心進勇銳具諸威德。是故我等及無量鬼神。常當隱形隨其妙典所流布處。而作擁護令無留難。亦當護念聽是經典諸國王等及其人民。除其患難悉令安隱。他方怨賊亦便退散。

時に多聞大王、持國大王、增長大王、廣目大王は座より起ち、衣服を以て一肩を覆ひ、右膝輪を地に着けて、世尊の方に合掌を傾け、世尊に白して言へり。「大德世尊よ、この金光明最勝帝王經は、未來の世、聚落城邑王國に於て流布すべし。人王の國土に達すべし。大德世尊よ、如何なる人王もかの天帝本誓なる王論によりて王業をなさむ。又かの金光明最勝帝王經の聽聞者にして、かれら帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を尊重し、恭敬し、奉事し、供養せむ。常に彼は金光明最勝帝王經を聽くべし。この聽法によりて、勸發法不死福德を[83]內性とせるわれら四大王、全眷屬、及び多百千の藥叉、羅刹等の天身をそは大勢力もて增長すべし。われらの身に於て大なる精進、勢力、體力、及び我等の威力、吉祥、幸福は增長すべし。されば大德世尊よ、われら四大王、全眷屬は多百千の藥叉と倶に、隱形身を以て、現在及び未來この金光明最勝帝王經の

若有人王聽是經時。隣國怨敵興如是念。當具四兵壞彼國土。世尊。以是經典威神力故。爾時隣敵更有異怨爲作留難。於其境界起諸衰惱災異疫病。爾時怨敵起如是等諸惡事已。備具四兵。發向是國規往討罰我等爾時。當與眷屬無量無邊百千鬼神。隱蔽其形爲作護助。令彼

流布する聚落城邑王國に往詣すべし。而して彼等人王のこの金光明最勝帝王經を聽く父母と供養者とに守護、衛護、攝受、救護、笞杖の除去、兵戈の除去、寂靜安穩をなすべし。彼等王の家族、彼等の王國、國土境界に對して、守護、衛護、攝受、救護、笞杖の除去、兵戈の除去、寂靜安穩をなすべし。【54】彼等國土を一切の怖畏厄難より解脫せしめ、他方怨敵を退散せしむべし。

「ある人王ありて、金光明最勝帝王經を聽き、尊重し供養せんに、他の隣國の敵王あらむ。大德世尊よ、かの隣國の敵王、かくの如きの念を起さむ。かくの如きわれは討伐のために四衆(の兵)と軍、團を率ゐて彼の國土に往かむと。其の時復大德世尊よ、金光明最勝帝王經の威神力を以て、かの隣國の敵王に對して他王との戰鬪あるべし。(彼の敵王)自の國土に起る國土の蹂躙あるべし。恐るべき王の動搖あるべし。妖星疾疫は國土に生ずべし。種種百(種)の擾亂は國土に生ずべし。又大德世尊よ、かの隣國の敵王に對して自の國土に起るかくの如き種種百(種)の

怨敵自然退散。起諸怖懼種種留難。彼國兵衆尙不能到。況復當能有所破壞。

爾時佛讃四天王等。善哉善哉。汝等四王。乃能擁護我百千億那由他劫所可修習阿耨多羅三藐三菩提。及諸人王受持是經恭敬供養者。爲消衰患。令其安樂。復能擁護宮殿舍

厄難、種種百(種)の擾亂あるべきに當り、又大德世尊よ、彼の隣國の敵王は四衆の兵を糾合して[65]侵略のために自の國土より出づべし。彼の敵王は四衆(の兵)と軍團を率ゐてこの金光明最勝帝王經の存する所のその國土に往かんと欲してあらむ。その(國土)を滅亡せんと欲してあらむ。大德世尊よ、かくの如き我等四大王は衆眷屬、多百千の藥叉、羅刹と倶に隱形身を以てかしこに往詣すべし。かの侵略の軍を中途にして不成功に退散せしむべし。種種百(種)の擾亂を起し、障礙を作すべし。かくてその侵略の軍はその國土に來ることすらも能はざらむ。況んや彼の討伐をなすべきをや。」

時に世尊はかれら四大王に善哉を宣せり。「善きかな、善きかな、大王よ、卿等の大王たることや善し。卿等は無數倶胝尼由他百千劫の間、かの無上正等覺のために、この金光明最勝帝王經を聽くかれら人王の守護、衞護、攝受[66]救護、寂靜安穩をなすべきなり。かれら王族、かれら市城かれら王國、かれら國土を守護すべし。衞護、攝受、救護、笞杖の除去、兵戈

宅城邑村國落土邊疆。乃至怨賊悉令退散。滅其衰惱令得安隱。亦令一切閻浮提內所有諸王無諸凶衰鬪訟之事。

四王當知。此閻浮提八萬四千城邑聚落。八萬四千諸人王等。各於其國娛樂快樂。各各於國而得自在於自所有錢財珍寶。各各自足不相侵奪。如其宿世所修集業隨業受報。不生

の除去、寂靜安穩をなすべし。かれら國土を一切の怖畏、苦難、厄難、困厄より解脱せしむべし。敵の侵略を退散せしむべし。一切閻浮洲におるかの人王の無鬪爭、無謀策、無衝突、無諍論のために努力をなせ。かくてこの卿等四大王、全眷屬にとりてこの四閻浮洲に於て彼々の國土に於てかれら八萬四千の市城は安樂ならむ。又彼等はかの王位自在を以て樂むべし。又かの財富の集積を以て互に毀損せざるべし。互に毀損を生せざるべし。自の過去に積聚せる業に隨つて王位を得べし。自の王位自在によりて彼等は滿足すべし。而して互に討滅することなかるべし。討伐のために國土に侵入せざるべし。

「かくて又この閻浮洲に於て、かれら八萬四千の市城に於てかれら八萬四千の諸王は互に利樂の心あり、慈悲の心あり、安樂の心あり。互に無鬪爭、無謀策〔67〕無衝突、無諍論を以て各自の國土に於て安樂なるべし。この福德を以て、四大王と全眷屬にとりては、この閻浮洲は繁榮なるべし。豐饒にして樂しむべく、人民繁殖し、殷富にして勢力あるべし。

惡心貪求他國。各各自生利益之心。生於慈心安樂之心不諍訟心不破壞心無繫縛心無楚撻心。各於其土自生愛樂。上下和睦猶如水乳。心相愛念增諸善根。以是因緣故。此閻浮提安隱豐樂。人民熾盛大地沃壤。陰陽調和時不越序。日月星宿不失常度。風雨隨時無諸災橫。人民豐實自足於財心無貪吝。亦無嫉妬等行十善。其人壽終多生天上。天宮充滿增益天衆。

若未來世有諸人王聽是經典。及供養恭敬受持是經四部之衆。是王則爲安樂利益汝等四王及餘眷屬無

一切の季節、月節、半月、年時は秩序に契合すべし。晝夜、星辰、日月、度に應ずべし。時を以て雨は地上に灑ぐべし。一切閻浮洲にある有情は一切の財物穀米に富むべし。而して多くの資財ありて心に慳吝なかるべし。捨施と十善業道の具足あるべし。加ふるに善趣天界に生ずべし。天宮は諸天と天子を以て充たさるべし。

「誰にてもあれ大王あらむ。是の如きの金光明最勝帝王經の聽聞者恭敬者、供養者ならむ、而して彼等帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の切望を恭敬し、尊重し、奉事し、供養すべし、卿等四大王及び全眷

量百千諸鬼神等。何以故。汝等四王。若得時時聞是經典 則爲已得正法之水。服甘露味增益身力。心進勇銳具諸威德。是諸人王。若能至心聽受是經。則爲已能供養於我。若供養我則是供養過去未來現在諸佛。若能供養過去未來現在諸佛。則得無量不可思議功德之聚。以是因緣。是諸人王應得擁護。及后妃婇女中宮眷屬諸王子等亦應得護。衰惱消滅快樂熾盛。宮殿堂宇安隱清淨無諸災變。護宅之神增長威德。亦受無量歡悅快樂。是諸國土所有人民。悉受種種五欲之樂。一切惡事悉皆消滅。

屬、多百千[67]の藥叉を哀愍して常に金光明最勝帝王經を聽かむ。この聽法の水によりて卿等のその身を滿足せしむべし。卿等のその身を大勢力を以て增長せしむべし。而して卿等の身の精進、勢力、體力は身について生ずべし。又卿等の威力と吉祥と幸福を增長すべし。而してその人王によりてわれ釋迦牟尼如來應供正等覺者の不可思議なる大なる、廣博なる供養はなさるべきなり。かの人王によりて一切資具を以て過去未來現在の多倶胝尼由他百千の如來の不可思議なる、大なる、廣博なる供養はなさるべきなり。かくてかの人王に對して大なる

【註】pūjakṛtā は pūjā kṛtā の誤植なり。l. 11 vistīrṇāṃ は vistīrṇā とすべし。

守護はなさるべきなり。かくてかの王に對し、守護、衛護、救護、攝護、保護笞杖の除去、兵戈の除去、寂靜安穩はなさるべきなり。第一夫人、王子、一切の後宮一切の王族に對し大なる守護はなさるべきなり。衛護、攝護、保護、寂靜安穩はなさるべきなり。王族[68]住の諸神及び奪精氣神は安樂善心を具足すべく、快樂を得べし。かれら王國、かれら國土は守護せ

爾時四天王白佛言。世尊。未來之世若有人王。欲得護身及后妃婇女諸王子等宮殿屋宅。得第一護身所王領最爲殊勝。具不可思議王者功德。欲得攝取無量福聚。國土無有他力怨賊。無諸憂惱及諸苦事。世尊。如是人王。不應放逸散亂其心。應生恭敬謙下之心。應當莊嚴第一微妙最勝宮宅。種種香汁持用灑地。散種種華敷大法座師子之座。兼以無量珍琦異物而爲校飾。張施種種無數微妙幢幡寶蓋。當淨洗浴以香塗身。著好淨

らるべし。成熟せられ、苦厄なく、憂愁なかるべし。一切の侵略、不幸、困難は摧破せらるべし」と。

かくの如く語られて多聞大王、持國大王、增長大王、廣目大王はすべて世尊に白して言へり。「世尊よ、かの人王は沐浴をなすべきなり。芳香ある衣服を著け、新しき上妙の服を纏ひ、種種の嚴具を飾るべきなり。自身の方には卑小なる座が施設せらるべし。そこにその座に着きて王位の憍慢はあるべからず。又王によりて自から貢高の振舞あるべからず。心諂僞傲慢の迷妄を遠離して、この金光明最勝帝王經は聽かるべきなり。かの法師なる比丘の前に師の想を生ずべし。かの人王によりて、その時、第一夫人、王子、王女、[70]及び一切後宮の群は愛と利を以て見らるべきなり。又第一夫人、王子、王女及び一切後宮の群は愛語を以て話さるべきなり。種々なる聞法供養は命せらるべきなり。不可思議無比なる歡喜を以て自己を滿足せしむべし。不可思議なる喜樂を以て樂まさるべきなり。諸根樂むべきなり。又自ら大力なるべし。

衣瓔珞自嚴。坐卑小座不自高大。除去自在離諸放逸。謙下自卑除去驕慢。正念聽受如是妙典。於說法者生世尊想。復於宮內后妃王子婇女眷屬。生慈哀心和顏與語。勸以種種供養之具供養法師。是王爾時既勸化已。即生無量歡喜快樂。心懷悅豫倍復自勵。不生疲倦多作利益。於說法者倍生恭敬。

爾時佛告四天大王。爾時人王。應著白淨鮮潔之衣。種種瓔珞齊整莊嚴。執持素白微妙上蓋。服飾容儀不失常則。躬出奉迎說法之人。何以故。是王如是隨其舉足步步之中。即是

大歡喜を以て自己を喜ばすべし。大なる親愛を生じて法師は安立せしめらるべし。」

かくの如く語れる時、世尊は四大王に對して言へり。「その時實に又大王よ、かの人王によりて純白清白の新淨衣は著らるべきなり。種種の莊嚴を以て自らを飾るべし。大なる王の威力を以て、大なる王の莊嚴を以て、種種の寶吉祥を攝受して、その王家より出づべきなり。而してかの法師なる比丘の承迎に趣くべきなり。その故は如何。かの人

供養値遇百千億那由他諸佛世尊。復得超越如是等劫生死之難。
復於來世爾所劫中。常得封受轉輪王位。隨其步步亦得如是現世功德不可思議自在之力。常得最勝極妙七寶人天宮殿。在在生處增益壽命。言語辯了人所信用。無所畏忌。有大名稱。常爲人天之所恭敬。天上人中受上妙樂。得大勢力具足威德。身色微妙端嚴第一。常値諸佛遇善知識。成就具足無量福聚。汝等四天王。如是人王。見如是等種種無量功德利益。是故此王應當躬出奉迎法師。若一由旬至百千由旬。於說法師應生佛想。

王が足を置く所、倶胝尼由他百千劫の間彼は生死より面を背くべし。[71] その間倶胝尼由他百千の轉輪王族となるべし。彼の足を進むる間、現法に大なる王位自在を以て增長すべし。多倶胝尼由他百千の殊勝なる生處なる、七寶所成の天宮の得あるべし。又多くの天の勝れたる人々の百千の王族の子の得あるべし。一切の生に於て大自在の得あるべし。又長壽なるべし。又長命なるべし。又辯才を具し、その語は採るに適し、名譽あり、廣き稱譽、稱讃あるべし。天人阿修羅を含める世界の中に利樂せらるべし。上々の人天の樂を得べし。大力と大諸健那力速疾を有し、美貌にして、淨信あり、見るに堪へ、最勝の淨蓮華色を具足すべし。一切生に於て如來の倶會に行くべし。無量の功德聚を攝受

【註】 dṛṣṭadhārmikeṇa は -kānām と正すべし。acintyena は推定なり。されど寧ろ durvjñeyena とすべきか。義淨譯「感應難思」。されど尙ほ考ふべし。

【註】 ādeya-vacana 西藏譯の tshig-gzurpar os-par「語の取るに適する」、「取語に於て適する」涼譯「人所信用無所畏忌」唐譯「人天信受無所畏懼」。

應作是念。今日釋迦如來正智。入於我宮受我供養爲我說法我聞是法。卽不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。已爲得値百千萬億那由他佛。已爲供養過去未來現在諸佛。已得畢竟三惡道苦。我今已種百千無量轉輪聖王釋梵之因。已種無邊善根種子。已令無量百千萬億諸衆生等度於生死。已集無量無邊福聚。後宮眷屬已得擁護宮宅諸衰悉已消滅。國土無有怨賊棘刺。他方怨敵不能侵陵。

すべし。【72】かくの如きこの大王功德讃嘆を見る彼の王によりて法師は一由旬(の遠き)より起立して(迎へ)らるべし。かの法師の前に於て師の想は起さるべし。かくの如く念は發さるべし。今日わが釋迦牟尼如來應供正等覺者はこの王家に入るべし。今日わが釋迦牟尼如來應供正等覺者はこの王家に於て親族を敎ふべし。一切世間難信の聽法をわれは聞くべし。今日われこの聽法によりて無上なる正等覺より退轉せざるべし。今日われによりて倶胝尼由他百千の如來は親近せられてあるべし。今日われによりて過去未來現在の諸佛世尊に對する不可思議、廣大、廣博なる供養はなさるべし。今日乃至わが地獄趣、傍生趣、夜魔界の苦は斷絕せられてあるべし。今日われによりて多倶胝尼由他百千の梵帝王の身を得べき善根の種子は植ゑらるべし。今日われによりて多倶胝尼由他百千の釋羅の身を得べき善根は植ゑらるべし。今日われによりて多倶胝尼由他百千の【73】轉輪王の身を得べき善根の種子は植ゑらるべし。今日われによりて倶胝尼由他百千の有

汝等四王。如是人王。應作如是供養正法。淸淨聽受是妙經典。及恭敬供養尊重讃歎持是經典四部之衆。亦當廻此所得最勝功德之分。施與汝等及餘眷屬諸天鬼神。聚集如是諸善功德。現世常得無量無邊不可思議自在之利。威德勢力成就具足。能以正法摧伏諸惡。

情は生死より解脱せしめらるべし。今日われによりて不可思議廣博無量の福聚は攝受せらるべし。今日わが一切後宮の大保護はなさるべし。今日わが王族に於て不可思議殊勝、無上、大寂靜と安穩とはなさるべし。今日わがこの一切國土は守護せられ、衞護せられ、逼迫なく、憂患なく、一切の怨敵によりて摧破せられず、病患なく不幸なかるべしと。

「四大王よ、かの人王この種の正法尊重によりて金光明最勝帝王經を受持する比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を恭敬し、尊重し、奉事する時、汝等四大王はかれら全眷屬、天衆及び百千の藥叉に對し、現前に大法の支分を[74]與ふべし。而してかの人王は福德聚善聚によりて、又かの大なる現

【註】此の下に三頁餘に亙る脫落あり。而してその部分は次下四頁を隔つる或る錯處へ移動し居れり。この錯簡は各寫本に共通なり。校訂本は支那譯によりてこれを正當の位置に復せり。校訂本脚註を見よ。

法不可思議自身によりて、王位自在を具足すべし。吉祥と威光と幸福を以て莊嚴してあるべし。一切の仇讎、一切の怨敵は正法を以て攝受

爾時四王白佛言。世尊。若未來世有諸人王。作如是等恭敬正法。至心聽受是妙經典。及恭敬供養尊重讚歎持是經典四部之衆。嚴治舍宅香汁灑地。專心正念聽說法時。我等四王亦當在中共聽此法。願諸人王爲自利故。以已所得功德少分施與我等。世尊。是諸人王於說法者所坐之處。爲我等故燒種種香供養是經是妙香氣。於一念頃卽至我等諸天宮殿。其香卽時變成香蓋。其香微妙金色晃耀照我等宮釋宮梵宮。大辯天神。功德天神。堅牢地神。散

せられてあるべし。」

是の如く言はれし時、四大王は世尊に白して言へり。「大德世尊よ、或る人王あらむ。かれはこれら是の如き法尊重を以て金光明最勝帝王經を聽くべし。而してかれら帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を恭敬し、尊重し、奉事し、供養すべし。われら四大王のためにその王族は極めて淨められ、他を淨からしむ。種種の香水を灑ぐべし。而してかの聽法を我等四大王と倶に共通して聞くべし。自己のために一切の諸天は如何ばかりにてもあれ現前に祥福を學ぶべし。大德世尊よ、かの比丘の法座に着くや否や、かの人王によりて【75】我等四大王のために種種の香は薰せしめらるべし。大德世尊よ、香の熏せらるると共にかの金光明最勝帝王經の供養のために、種種の香に於て種種の香烟雲は出づべし。彼等（香烟雲）はその刹那、瞬間、頃刻に於て我等四大王

【註】 祥福なる語を此處にて如何に譯すべきかを知らず。此の語細きものを意味し得るが如し。雲とは推定譯のみ。

脂鬼神。最大將軍。二十八部鬼神大將。摩醯首羅。金剛密迹。摩尼跋陀鬼神大將。鬼子母。與五百兒子周匝圍繞。阿耨達龍王。娑竭羅龍王。如是等衆。自於宮殿各各得聞是人王手擎香爐供養經時。種種妙香氣。及見香蓋光明普照。是香蓋光明亦照一切諸天宮殿。

佛告四王。是香蓋光明非但至汝四王宮殿。何以故。是諸人王手擎香爐。供養經時其香遍布。於一念頃

の宮殿に行きたる種種の香烟雲の傘蓋として虚空の中に立つべし。而して彼等は殊勝の香を聞くべし。而して黄金合成の光明は出現すべし。而してこの光明によりて我等の宮殿は照されてあるべし。大

【註】dhūpa は dhūma の寫誤ならむ。

徳世尊よ、彼等(香烟雲)は索訶界主なる梵天、及釋羅天帝、辯才天女、堅牢大(地)神、吉祥大天女、正了知(大將)、大藥叉軍主、二十八部の大藥叉軍主、大自在天子、金剛手大藥叉軍主、摩尼跋陀羅大藥叉軍主訶梨帝(母)の五百子眷屬、無熱龍王、及び大徳世尊よ、各各の宮殿に住せる彼等に對して、その刹那瞬間、頃刻に種種なる香烟雲の傘蓋として虚空の中に[76]立つべし。而して彼等は殊勝の香を聞くべし。而して黄金合成の光明は出現すべし而してこの光明によりて一切の宮殿は照されてあるべし。」

是の如く語りし時、世尊は四大王にこれを言へり。「啻に各自の宮殿に住せる卿等四大王に對して種種なる香烟雲の傘蓋が虚空の中に立てるのみならんや。その故は如何。大王よ、かの金光明最勝帝王經の

遍至三千大千世界。百億日月。百億大海。百億須彌山。百億大鐵圍山小鐵圍山及諸山王。百億四天下。百億四天王。百億三十三天。乃至百億非想非非想天。於此三千大千世界。百億三十三天。一切龍鬼。乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽。宮殿虛空悉滿種種香煙雲蓋。其蓋金光亦照宮殿。如是三千大千世界。所有種種香煙雲蓋。皆是此經威神力故。是諸香氣。不但遍此三千大千世界。於一念頃亦遍十方無量無邊恒河沙等百千萬億諸佛世界。於諸佛上虛空之中。亦成香蓋。金光普照。亦復如

供養のために、彼の人王によりて種種なる香が熏せらるゝや否や、その時、香爐を手に執れる(彼)より、種種の香烟雲は出づべし。その刹那、瞬間、

【註】 -tāṃ nānā- と讀むべし。

頃刻に、かの一切三千大千世界に於て、百倶胝の月、百倶胝の蘇迷盧山王、百倶胝の輪圍(山)、大輪圍山王、百倶胝の四大洲、百倶胝の四大王天、百倶胝の三十三天、乃至百倶胝の非想非非想天、かれら一切百倶胝の三千大千世界、三十三天處に於て、宮殿に住せる一切天、龍、藥叉、乾闥婆阿修羅、迦樓羅、緊那羅、【77】摩睺羅伽、に對して、虛空の中に住せる種種なる香烟雲の傘蓋は立つべし。彼等は殊勝の香を聞くべし。一切天宮に於て金色の光明は出現すべし。而してその光明によりて一切の天宮は照されてあるべし。恰も三千大千世界に於て、一切天宮に(住せる)かれら種種

【註】「傘蓋は立つべし」より「照されてあるべし」までの一節は繰り返さる。蓋しこれ錯簡のために、連續せざる部分を强ゐて連續せしめんとして筆寫者が企てたる附加なり。今これを省く。

是。諸佛世尊聞是妙香。見是香蓋及金色光。於十方界恒河沙等諸佛世界。作如是等神力變化已。異口同音於說法者稱讚。善哉善哉。大士。汝能宣流布如是甚深微妙經典。則爲成就無量無邊不可思議功德之聚。若有聞是甚深經典。所得功德則爲不少。況持讀誦爲他衆生開示分別演說其義。何以故。善男子。此金光明微妙經典。無量無邊那由他諸菩薩等。若得聞者。卽不退於阿耨多羅三藐三菩提。爾時十方無量無邊恒河沙等。諸佛世界現在諸佛。異口同聲作如是言。善男子。汝於來世必定當得坐

の香烟雲の傘蓋は虛空の中に立てる如く、かくの如く大王よ、かの金光明最勝帝王經の威力によりて、かの香爐を手にせる人王によりて、かの金光明最勝帝王經の供養のために熏せられたる種種の香は、その剎那、

【註】「供養のために」の次なる「種々の香烟雲は立つべし」の一句は省くべし。

瞬間、頃刻に、普ねく十方に於て多恒河沙に等しき倶胝尼由他百千の佛國に於て、[78]多恒河沙に等しき、倶胝尼由他百千の如來に對して、彼等種種なる香烟雲傘蓋は虛空の中に立つべし。かれら沙の如き倶胝尼由

【註】恐らくは原文「多恒河」の字を脱せしならむ。

他百千の佛の上に彼等は殊勝の香を聞くべし。金色合成せる光明は出現すべし。而してその光明によりてかれら多恒河沙に等しき倶胝尼由他百千の佛國は照されてあるべし。又大王よ、これらの種類の大神變が出現するや否や、かれら多恒河沙に等しき倶胝尼由他百千の佛國に安立せる諸の如來はかの法師を護念すべし。善哉を唱ふべし。善きかな、善きかな正士よ、又善きかな、汝正士よ、汝はこの是の如き甚深

於道場菩提樹下。於三界中最尊最勝。出過一切衆生之上。勤修力故受諸苦行。善能莊嚴菩提道場。能壞三千大千世界外道邪論。摧伏諸魔怨賊異形。覺了諸法第一寂滅淸淨無垢甚深無上菩提之道。善男子。汝已能坐金剛座處。轉於無上諸佛所讚十二種行甚深法輪。能擊無上最大法鼓。能吹無上極妙法螺。能竪無上最勝法幢。能然無上極明法炬。能雨無上甘露法雨。能斷無量煩惱怨結。能令無量百千萬億那由他衆。度於無涯可畏大海。解脫生死無際輪轉。値遇無量百千萬億那由他佛。

なる、是の如き深義ある、是の如き深き光明を具せる、是の如き不可思議功徳法を具せる、金光明最勝帝王經を廣く開說せんと欲す。乃至この金光明最勝帝王經を聽くこれら諸有情は少善根を具するにあらざるべし。況んや攝受し、受持し、書寫し、[79]書寫せしめ、說かしめ、全得し、廣く會中に宣說し、說示せしめ、廣說し、理の如く意中に現せしめんをや。其の故如何。人ありて金光明最勝帝王經を聽くと共に多倶胝尼由他百千の菩薩は無上なる正等覺より退轉せざるべし。時に、かれら普ねく十方に於て、恒河沙に等しき倶胝尼由他百千の佛國に於て、各自の國に安立せる、多倶胝尼由他百千の如來はその時、一齊に同一の語音聲を以てかの法座に着きたる法師比丘に對して言へり。正士よ、汝は未來世に於て道場に往詣すべし。正士よ、汝は最勝道場に往き、王樹の下に坐し、一切三世間中最も殊勝なり、三時中苦行修行行力を具せる、加持に加持せられたる、多倶胝百千劫にも難作なるものを一切有情に示すべし。

【註】原語 itareṭa は恐らく avarepa なるべし。

【註】 adhiṣṭhānāy adhiṣṭhitāy の āya は削るべし。

正士よ汝は道場を莊嚴すべし。汝は[80]一切三千大千世界を守護すべし。正士よ、汝は王樹の下に坐し、變作身形最勝可怖畏現形なる種種の

【註】 kṛtṛma は kṛtrima の訛形。

變形不可思議の魔軍を征服すべし。正士よ、汝は最勝道場に往き、無比寂靜、離塵、甚深なる無上正等覺を證得すべし。正士よ、汝は聖堅固金剛座に坐して一切勝者讃嘆、最勝甚深なる十二相の無上法輪を轉ずべし。正士よ、汝は無上なる法樂器を鼓すべし。正士よ、汝は無上なる大法螺

【註】 sañjñi の意義明かならず。これは東京本にのみあり。寧ろ省くを可とす。

を吹くべし。正士よ、汝は大なる法幢を建つべし。正士よ、汝は無上なる法炬を輝かすべし。正士よ、汝は大法雨を雨ふらすべし。正士よ、汝は多百千の煩惱を克服すべし。正士よ、汝は多倶胝尼由他百千の恐怖せるものを大怖畏の海より度脫せしむべし。正士よ、汝は多倶胝尼由他百千の如來を喜ばしむべし。」[81]

爾時四天王復白佛言。世尊。是金光明微妙經典。能得未來現在種種無量功德。是故人王。若得聞是微妙經典。則爲已於百千萬億無量佛所種諸善根。我以敬念是人王故。復見無量福德利故。我等四王及餘眷屬無量百千萬億鬼神。於自宮殿見是種種香煙雲蓋瑞應之時。我當隱蔽不現其身。爲聽法故。當至是王所至宮殿講法之處。大梵天王。釋提桓因。大辯天神。功德天神。堅牢地神。散脂鬼神。大將軍等。二十八部鬼神。大將。摩醯首羅。金剛密迹。摩尼跋陀鬼神大將。鬼子母及五百兒子。周匝圍繞。

かくの如く、語られし時、四大王は世尊に白して言へり。「大德世尊よ、人王ありてこの金光明最勝帝王經のかくの如き現法と、魔軍降伏の功德と千佛の許に植ゑたる善根を見る時、無量の福聚の攝受を見つゝ各自の宮殿に居するわれら四大王は全眷屬多百千の藥叉と倶に、種種の香烟雲に勸勵せられ、哀愍の故に、同じく聽法のために、隱形身を以て、かの人王の過去行積集によりて淨められたる、種種の香水を灑げる、種種の莊嚴を飾れる、王の家の方に往詣すべし。索訶界主なる梵天、天帝釋羅、辯才天女、吉祥大天女、堅牢地神、正了知大藥叉軍主、二十八部大藥叉軍主、大自在天子、金剛手秘密主、摩尼跋陀羅大藥叉軍主、訶梨帝(母)五百子眷屬、無熱龍王、娑竭羅龍王【82】及び多倶胝尼由他百千の諸天は隱形身を以て、かしこにかの人王のかの種種の莊嚴を飾れる王族、かの法師比丘の華を散せる地上に、淨く攝受せられ、種種の莊嚴を飾り、施設せられたる法座ある所に、聽法のためにあるべきなり。

【註】「かしこに」以下の一段梵文若干の爛敗あるが如し。今暫らく想定譯を施し、後

阿耨達龍王。娑竭羅龍王。無量百千萬億那由他鬼神諸天。如是等衆爲聽法故。悉自隱蔽不現其身。至是人王所止宮殿講法之處。

世尊。我等四王及餘眷屬無量鬼神。悉當同心以是人王爲善知識。同共一行善相應行。能爲無上大法施主。以甘露味充足我等。我等應當擁護是王。除其衰患令得安隱。及其宮宅國土城邑。諸惡災患悉令消滅。

世尊。若有人王。於此經典心生捨離不樂聽聞。其心不欲恭敬供養尊重讃歎。若四部衆有受持讀誦

勸を俟つ。

「大德世尊よ、かゝるわれら四大王は多百千の藥叉一切と倶に、協同してかの善友眷屬者、善友得者、無上殊勝大味與者なる人王に對して、この正法甘露味を以て滿足せしめ、滿足せしめて、かの人王の守護をなすべし。衞護、攝受、保護、寂靜安穩をなすべし。かの王族と市城と國土の守護をなすべし。衞護、攝受、保護、寂靜安穩をなすべし。而してその國土をして一切の危難、因厄、不幸より解脫せしむべし。

【註】梵文「解脫せしむべし」の次に三の語あれども意義明かならず。省くべし。

「大德世尊よ、ある人王あらむ。その【83】人王の國土に於てこの帝王經は行はれむ。大德世尊よ、かの人王のこの金光明最勝帝王經の受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を恭敬せず、尊重せず、奉事せず、供養せざ

講說之者。亦復不能恭敬供養尊重讚歎。我等四王及餘眷屬無量鬼神。卽便不得聞此正法。背甘露味失大法利。無有勢力及以威德。減損天衆增長惡趣。世尊。我等四王及無量鬼神捨其國土。不但我等。亦有無量守護國土諸舊善神皆悉捨去。我等諸王及諸鬼神既捨離已。其國當有種種災異。一切人民失其善心。唯有繫縛瞋恚鬪諍。互相破壞多諸疾疫。彗星現怪流星崩落。五星諸宿違失常度。兩日並現日月薄蝕。白黑惡虹數數出現。大地震動發大音聲。暴風惡雨無日不有。穀米勇貴饑饉凍餓。多有他方

らむ時、われら四大王の多百千俱胝の藥叉はかの聽法を以て、かの甘露法味を以て滿足せしめられず、尊敬せられず、この天身は大威力を以て增長せしめられず。又我等の精進と勢力は生ぜざるべし。威力と吉祥と幸福とは我等の身に於て增長せしめられず。大德世尊よ、かゝる我等四大王及び全眷屬は多俱胝尼由他百千の藥叉と俱に、その國土の守護をなさゞるべし。大德世尊よ、我等が國土を看過する時、一切國土の住者なる天衆はその國土を看過せむ。大德世尊よ、又諸の女神もその國土を看過せむ。[84] 國土に於て處々に種種多樣なる國土の破壞あるべし。而して恐るべき王の擾亂あるべし。一切國土に居する諸有情は鬪爭を生ずべし。謀叛と離叛と爭論と遭難と、種種多樣なる妖星疾疫は國土に出現すべし。諸方より來集せる星火の墜落は出現すべし。星宿は互に障礙すべし。第二の日輪と多くの月は出生すべし。月の蝕變あるべし。又日の蝕變(あるべし)。常に虛空中に懸れる日月は視野に至らざるべし。星火の墜落に似たる色ある光輪は虛空の中

怨賊侵掠其國。人民多受苦惱。其他無有可愛樂處。世尊。我等四王及諸無量百千鬼神。並守國土諸舊善神。遠離去時生如是等無量惡事。

世尊。若有人王。欲得自護及王國土多受安樂。欲令國土一切衆生悉皆成就具足快樂。欲得摧伏一切外敵。欲得擁護一切國土。欲以正法正治國土。欲得除滅衆生怖畏。

世尊。是人王等。應當必

に常恒に出現すべし。大地の震動はあるべし。地中の泉流は散亂しつゝ涸渇すべし。惡風は吹くべし。暴雨は來るべし。饑饉の災厄は一切國土にあるべし。怨敵はその國土に侵入すべし。多くの厄難はあるべし。[85] 大德世尊よ、かゝる我等四大王及び全眷屬は多百千の藥叉及び國土に住する諸の天龍とその國土を看過する時、その國土に於て是の如き種類のこの種種百(種)の苦厄、千(種)の苦厄はあるべし。

「大德世尊よ、ある人王あらむ。自己に對して大なる守護をなさんと欲してあらむ。又久しく種種の王樂を享受せんと欲してあらむ。一切の樂を賦與せられ、久しからずして王位に就かんと欲してあらむ。又一切國土に住せる諸有情に對し樂を得しめんと欲してあらむ。一切怨敵に勝たんと欲してあらむ。一切の樂によりて國土を衞護せんと欲してあらむ。正法を以て王業をなさんと欲してあらむ。又自の國土を一切の怖畏、苦厄、危難より解脫せしめんと欲してあらむ。

「大德世尊よ、かの人王によりてこの金光明最勝帝王經は聽かるべき

定聽是經典。及恭敬供養讀誦受持是經典者。我等四王及無量鬼神。以是法食善根因緣。得服甘露無上法味。增長身力心進勇銳增益諸天。何以故。以是人王至心聽受是經典故。如諸梵天說出欲論。釋提桓因種種善論。五通之人神仙之論。

世尊。梵天釋提桓因五神通人。雖有百千億那由他無量勝論。是金光明於中最勝。所以者何。如來說是金光明經。爲衆生故。爲令一切閻浮提內諸人王

なり。而して聽き已りてかれらその受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は恭敬せられ、尊重せられ、奉事せられ[86]供養せられてあるべきなり。我等四大王は眷屬と倶に、その聽法の善根積集によりて、その甘露の法味によりて滿足せしめらるべきなり。又われらのこの天身は大威力によりて增益せしめらるべきなり。其の故は如何。大德世尊よ、かの人王によりて確かにこの金光明最勝帝王經は聽かるべければなり。

「大德世尊よ、乃至梵天王によりて世間出世間の種種なる論書は示されたり。又乃至天帝釋によりて種種なる論書は示されたり。又乃至各種五通仙によりて世間出世間の論書は示されたり。大德世尊よ、かれら百千の梵天王よりも、多倶胝尼由他百千の釋羅よりも、一切の百千倶胝尼由他の五通仙よりも、如來は更に上妙なる、更に殊勝なるこの金光明最勝帝王經を有情のために廣く宣說せり。

「かくてこの一切閻浮洲なる人王の王業は[87]なさしめらるべし。又

等以正法治。爲與一切衆生安樂。爲欲愛護一切衆生。欲令衆生無諸苦惱。無有他方怨賊棘刺。所有諸惡背而不向。欲令國土無有憂惱。以正法教無有諍訟。是故人王各於國土。應然法炬熾然正法增益天衆。我等四王及無量鬼神。閻浮提內諸天善神。以是因緣得服甘露法味充足。得大威德進力具足。閻浮提內安隱豐樂。人民熾盛安樂其處。復於來世無量百千不可思議那由他劫。常受微妙第一快樂。復得値遇無量諸佛種諸善根。然後證成阿耨多羅三藐三菩提。得如是等無量功德。悉是如來正遍知說。如來

かくて一切有情は安樂を得べし。又かくて一切國土の壓迫に困しむものは無敵の狀態となるべし。かくて怨敵は克服せられ、退散すべし。又かくて彼等國土は不幸を離るべし。又かくて一切國土の正法は不幸を離れ壓伏せられざるべし。又かくてかれら人王によりて各自の國土に於て大法炬は燃され、輝かさるべし。又かくて諸天及び諸天子によりて一切の天宮は輝かさるべし。又かくてわれら四大王、全眷屬、多百千の藥叉、及び一切閻浮洲に居する諸天衆は滿足せしめられ、悅豫ならしめらるべし。又かくてわれらの身に於て大なる精進と勢力と體力は生ずべし。又かくてわれらの身に於て威力と吉祥と幸福とは益々加はるべし。又かくて一切閻浮洲は豐饒にして樂しむべく、多くの人々に充されてあるべし。又かくて一切閻浮洲に居する諸有情は安樂なるべし。種種の樂を得べし。又かくて有情は[88]多倶胝尼由他百千劫の間、不可思議、最勝の幸福を享受すべし。かれらは諸佛世尊と倶に一處に會すべし。未來の世に於て無上なる正等覺を證得すべし。

過於百千億那由他諸梵天等。以大悲力故。亦過無量百千億那由他釋提桓因。以苦行力故。是故如來爲諸衆生。演說如是金光明經。

若閻浮提一切衆生及諸人王。世間出世間所作國事。

その一切は今世尊如來應供正等覺者によりて、大悲力加持を以て、倶胝

【註】「かくて」yathā は一句の結尾として「やうなる」、「の如き」と譯するも亦得たり。それは「その一切」の「その」に係るものとす。

尼由他百千の釋羅よりも遙かに超過せる無上なる如來智に於て、又種

【註】 divyātirekatareṇa の divya は意義明かならず。今假に dūra「遙かに」を以て擬するも其の當れるや否やを保せず。寧ろ省くを可とせむか。

々多樣なる倶胝尼由他百千の一切五通仙を超過せる正等覺者によりて、又倶胝尼由他百千の梵天王を超過せる苦行加持によりて、如來應供正等覺者によりて、この金光明最勝帝王經は一切有情の利のためにこ

【註】 この語重複す。寧ろ省くべきなり。又原文 ṣu は恐らく衍文、京都本にはこれを缺けり。省くべし。-tapo 'dhi- は合成語なれば文字の間隔を去るべし。

の閻浮洲に於て廣く宣說せられたり。

「かの人王によりて一切閻浮洲に存する、世間出世間の王の作務、王論王の作業は明了にせられたり。かれら有情はそれによりて安樂なる

所造世論皆因此經。欲令衆生得安樂故。釋迦如來示現是經廣宣流布。世尊以是因緣故。是諸人王。應當必定聽受供養恭敬尊重讃歎是經。

爾時佛復告四天王。汝等四王及餘眷屬。無量百千那由他鬼神。是諸人王。若能至心聽是經典供養恭敬尊重讃歎。汝等四王。正應擁護滅其衰患而與安樂。若有人能廣宣流布如是妙典。於人天中大作佛事。能大利益無量衆生。如是之人。汝等四王。必

べし。世尊如來應供正等覺者によりてかれら一切は世尊如來應供正等覺者によりてこの金光明最勝帝王經中に說示せられ、解明せられ、廣

【註】「かれら一切は」を主語とするには原文の修正を要す。-nāyaṃ を nāsmin に、-taṃ を總て -tāni に改むべし。

說せられたり。大德世尊よ、この因、この緣によりてかの[83]人王は確かにこの金光明最勝帝王經を恭敬して聽聞し、恭敬して奉事し、恭敬して供養すべし。」

是の如く語りし時、世尊は四大王に告げて言へり。「されば四大王は眷屬と倶に、たしかにこれらの金光明最勝なる帝王經の聽聞者、供養者に對し守護のために大なる勤勞をなすべきなり。又大王よ、帝王經受持者なるかれら、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷はかの佛國に現じ、人天阿修

【註】-kṣetramārāatpradarśante にては意義通ぜず。試みに kṣetre 'trôpadarśante と讀めり。何ほ考ふべし。

羅の世界に對して佛事を作すべし。かれらはこの金光明最勝帝王經

當擁護莫令他緣而得擾亂。令心恬靜受於快樂。續復當得廣宣是經。

爾時四天王。卽從座起偏袒右肩。右膝著地長跪合掌。於世尊前以偈讚曰。

佛月淸淨　滿足莊嚴
佛日暉曜　放千光明
如來面目　最上明淨
齒白無垢　如蓮華根
功德無量　猶如大海

を廣く宣說すべし。確かに汝等四大王によりてかれら帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に對して守護はなさるべし。衞護、救護、笞杖の除去、兵戈の除去、寂靜安穩はなさるべし。かくて又帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は[90]この金光明最勝帝王經を有情に對して廣く宣說するやうに、守護せられ、逼迫なく、不幸憂患なく、心安樂なるべきなり。」

時に多聞大王、持國大王、增長大王、廣目大王は座より起ち、一肩に衣服を覆ひ、右膝輪を地に着けて世尊の方に合掌を傾け、相面してその時上妙の偈を以て世尊を讚じて言へり。

【註】「覆ひ」の次に uttarāsaṅgaṃ kṛtvā の語あれども重複す。衍文として省くべし。

(一) 勝者の身は離垢なる月輪の如く、勝者の光は千光ある日輪の如し。勝者の眼は離垢なる蓮華の如く、勝者の齒は離垢なる雪白の蓮華の如し。

【註】「雪白」tuṣāra は推定なり。原文は mṛṇāla とあり。この下十九偈爛敗甚しく、若

智淵無邊　法水具足
百千三昧　無有缺減
足下平滿　千輻相現
足指網縵　猶如鵝王
光明晃耀　如寶山王
微妙清淨　如練眞金
所有福德　不可思議
佛功德山　我今敬禮
佛眞法身　猶如虛空
應物現形　如水中月
無有障礙　如焰如化
是故我今　稽首佛月

爾時世尊。以偈答曰

此金光明　諸經之王
甚深最勝　爲無有上
十力世尊　之所宣說
汝等四王　應當勤護
以是因緣　是深妙典
能與衆生　無量快樂
爲諸衆生　安樂利益

千の推定譯讀をなせる部分あり。

(二) 勝者の功德は海の如く、勝者の海には多くの寶藏あり。智慧の水充滿し、百千の禪定を具足せり。

(三) 勝者の足には輪の畫あり。輪は普ねく千輻を具有す。[9] 手足には縵網あり。足網は鵞王の如し。

(四) 山王なる勝者は金山の如く、妙色無垢の黃金なり。一切の功德迷盧の如し。覺者山王の勝者をわれは敬禮す。

(五) 如來の月印は虛空に等しく、月の如く、水月の如し。幻と陽焰の如し。離垢の勝者をわれは敬禮す。

(六) 十力者の金光明最勝帝王經は最上なり。汝等護世者によりて衞護せらるべきなり。

(七) この帝王經は甚深なり。一切有情に安樂を與ふるものにして、永く一切有情の利樂のために、この閻浮洲に於て流布すべし。

(八) 三千大千世界に於て、惡趣の苦を捨て、有情は捺落迦の苦を鎭靜せ

故久流布　於閻浮提
能滅三十　大千世界
所有惡趣　無量諸苦
閻浮提內　諸人王等
心生慈愍　正法治世
若能流布　此妙經典
則令其土　安隱豐熟
所有衆生　悉受快樂
若有人王　欲愛己身
及其國土　欲令豐盛
應當至心　淨潔洗浴
往法會所　聽受是經
是經能作　所有善事
摧伏一切　內外怨賊
復能除滅　無量怖畏
是諸經王　能與一切
無量衆生　安隱快樂
譬如寶樹　在人家中
悉能出生　一切珍寶
是妙經典　亦復如是

しむ。

【註】この一偈爛敗甚し。校訂本の ye ca を yena に、hi を ca に sattvā を hitvā に śamayitvā を śameti sattvā に改め最後の hi を省く。

（九）[92]この閻浮洲なる一切の大王は歡喜を生じ、正法を以て國土を守護せよかし。かくて又この閻浮洲は幸福なれかし。

【註】mahataḥ は mahantaḥ と訂正。

（一〇）閻浮洲に於て一切は豐饒にして有情は安樂なり。人王の國土に於て、愛身安樂なる愛着、及び王位、

（一一）自在なる愛着のあることなき彼によりて、經王は聞かるべきなり。この帝王經は强敵を滅盡する者にして、怨敵を退散せしめ、最極の怖畏厄難を除去する、最極清淨を作すものなり。

【註】sarve を sarvo に karam を karaḥ に最後の ja を jiḥ に訂正。

（一二）一切功德を生ずる美妙なる寶樹の善家に在るが如く[93]、この帝王經の王の功德等に對する亦是の如く見らるべきなり。

悉能出生　諸王功德
如清冷水　能除渴乏
是妙經典　亦復如是
能除諸王　功德渴乏
譬如珍寶　異物箧器
悉在于手　隨意所用
是金光明　亦復如是
隨意能與　諸王法寶
是金光明　微妙經典
常爲諸天　恭敬供養
亦爲護世　四大天王
威神勢力　之所護持
十方諸佛　常念是經
若有演說　稱讚善哉
亦有百千　無量鬼神
從十方來　擁護是人
若有得聞　是妙經典
心生歡喜　踊躍無量
閻浮提內　無量大衆
皆悉歡喜　集聽是經

【註】 sugrhah を sugrhe と訂正。

（一三） 清冷なる雪の水が熱時に渇の除去を得るが如く、是の如くこの帝王經は諸王の功德安樂を與ふるものなり。

【註】 ugna を trsna と訂正。

（一四） 寶篋が手掌の面にありて一切の寶を藏する如く、この金光明最勝帝王經の諸王の功德に對する亦是の如し。

（一五） この帝王經は天衆に供養せられ、天帝によりて敬禮せられ、四大神通ある護世者によりて守護せらる。

（一六） この帝王經は十方に立てる諸佛によりて常に念せらる。 この經を説く時、正覺者は善哉を唱ふ。

（一七） 百千の藥叉は十方に於て國土を守護し、[94]心歡喜し、踊躍してこの經を聞く。

（一八） 閻浮洲に居する不可思議の天衆、かれら一切の天衆は歡喜してこの經を聞けかし。

聽是經故　具諸威德
增益天衆　精氣身力

爾時四天王聞是偈已。白佛言。世尊。我從昔來未曾得聞如是微妙寂滅之法。我聞是已心生悲喜涕淚交流。擧身戰動肢節怡解。復得無量不可思議具足妙樂。以天曼陀羅華摩訶曼陀羅華。供養奉散於如來上。作如是等供養佛已。復白佛言。世尊。我等四王。各各自有五百鬼神。常當隨逐是說法者而爲守護。

(一九)その聽法によりて威力精進力を得べし。かくて大威光を以て天身を增長すべし。

時に四大王は世尊の前にこれらの偈を聞きて希有なるを得、未曾有なるを得、歡喜を得たり。その法力によりて、その時、啼泣せるが如く、涙を雨らせり。又彼等は遍身に、身支愉悅して、不可思議なる喜樂悅意を具足し、復世尊の上に天の曼陀羅華を散せり。散じ且つ散じて、座より起ち、一肩に上着衣を被り、右膝輪を地に着け、世尊の方に合掌を傾け、世尊に白して言へり。[95]「大德世尊よ、我等四大王、五百の眷屬と倶なる一々の大王は、法師比丘に對して、かの法師の尊敬と守護のために常に隨侍してあるべきなり」と。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、四大王品第七。

【註】sammānaih を samānaih に訂正。

金光明經大辯天神品第七

爾時大辯天白佛言。世尊。是說法者。我當益其樂說辯才。令其所說莊嚴次第善得大智。若是經中有失文字句義違錯。我能令是說法比丘次第還得。能與總持令不忘失。若有衆生於百千佛所種諸善根。是說法者爲是等故。於閻浮提廣宣流布是妙經典令不斷絕。復令無量無邊衆生得聞是經。當令是等悉得猛利不可思議大智慧聚不可稱量福德之報。善解無量種種方便。善能辯暢一切諸論。善知世間種種技

辯才天女品第八[96]

時に辯才天女は一肩に衣服を覆ひ、右膝輪を地に着け、世尊の方に合掌を傾け、世尊に白して言へり。「大德世尊よ、我れ辯才大天女も、亦かの法師比丘の言說莊嚴のために辯才を集注せしむべし。又陀羅尼を說くべし。最上善解なる相を生せしめむ。又法師比丘の智慧の光を大にすべし。何等かの文句がこの金光明最勝帝王經より失はれ、忘れられてあらん時、われはそれらの一切善解文句をかの法師比丘に集注せしむべし。又念の不失のために陀羅尼を說くべし。かくて又この金光明最勝帝王經は千佛の許に善根を植ゑたる有情のために、閻浮洲に於て永く流布すべし。而して決して速かに滅せざるべし。而して多くの[97]有情はこの金光明最勝帝王經を聽きて不可思議にして捷利なる慧を得べし。又不可思議なる智聚を得べし。壽命損滅せられず。

術。能出生死得不退轉。必定疾得阿耨多羅三藐三菩提。

又生の攝受と不可量の福聚を得べし。一切の經書に熟達し、種種なる工巧に通曉すべし。

「卽ち我れかの法師比丘と及び彼等聽法の有情のために、行ずべき洗浴法を說くべし。一切の星宿、生死の逼迫、鬪諍、濁亂、騷擾、暴動、紛亂、惡夢、毘奈耶迦の逼迫、一切の壓鎭、起尸鬼は鎭靜すべし。

【註】 viṣodaka を如何に讀むべきか。知らず。毘奈耶迦 vināyaka は後段(九二頁一一行)よりの推定のみ。

(一) 賢者の沐浴せしむべき藥草と咒とあり。跋者(菖蒲)、瞿盧折娜(牛黃)、塞畢力迦(苜蓿香)、尸利灑(合昏樹)、闍莫迦(芎藭)、苫弭(猗杞根)、因陀羅喝悉多(白及)、莫迦婆伽(麝香)、ヴヤーマカ惡揭嚕(沈香)、咄者(桂皮)、

【註】 sphṛkā は spṛkkā に訂正。

(二) ニーヴエーシユタカ、索瞿者(丁子)、シフナカ、窶具攞(安息香)【98】多揭羅(零凌香)、【98】鉢怛羅(藿香)、世黍也(艾納)、栴檀娜(栴檀)、末那𡀔羅(雄黃)、

【註】 索瞿者は sagoṭṭha の訛、ṣagoṭṭha 又は sagocca ならむ。sarjarasa には寧ろ唐譯「薩折

羅娑（＝婆？）」白膠を當つべきか。

（三）サモーチヤカ、トルシユカ、茶矩麼（鬱金）、目窣哆（香附子）、薩利殺跛（芥子）、

【註】支那譯「茶」とあるは「恭」の寫誤なるべし。

捺剌陀（葦香）、チヤヴヤ、蘇泣迷羅（細豆蔻）、嗢尸羅（茅根香）、那伽雞薩羅（龍花鬚）、

（四）これらの等分を布沙星（の日）に合せ搗くべし。これらの咒、眞言句を以て一百遍咒すべし。曰く、

『スクリテー。カラジヤー・タブハーゲー。ハンサランデー。インドラジヤーラマリラカ。ウパサデー。アヴターシケー。クトラ。クカラヴイマラマテイ。シーラマテイ。サンドヒブドハマテイ。シシリ。サトヤストヒテー。スヷーハー。』

【註】-sthita を -sthite に訂正。

（五）牛糞壇を造り、諸華を散じ、黄金の器、白銀の器に蜜を盛るべし。

（六）鎧ひたるかれらの人々を其處に四方に立たしめ、美はしく莊嚴し

甕を持てる少女を四方に立たしむ。

(七) 安息香を焚き、常に五種の伎樂をなさしむ。 [99] 傘蓋幢幡を以てかの天女は莊嚴せらる。

(八) 緣邊に鏡を置き、箭と鎗を結合せしめ、かくて結界をなし、後に事業を始むべし。 この眞言句次第を以て結界を始むべし。 そは是の如くなるべし。『アネー。 ナヤネー。 ヒリ。 ヒリ。 ギリ。 クヒレー。 スヴーハー。』尊の背後より灌沐せしめ、この眞言の諷誦を以て、沐浴寂靜をなすべし。 曰く、『スガテー。 ヴイカテー。 ヴイガターヴテイ。 スヴーハー。』

(九) 四方に住せる星宿をして壽を守護せしめよ。 又は星宿の生に對する壓迫、積聚業の怖畏、體液の動亂より生ずる甚しき怖畏は鎭靜せよかし。

【註】 dhātu は doṣa に同じ、 pitta, kapha, śleṣman なり。 この三以て身體を組織すとは印度醫方明の說く所なり。

『サメー。ヴイシヤメー。スヷーハー。』『スガテー。スヷーハー。』『サーガラ。サンブフーターヤ。スヷーハー。』『スカンドハ。マールターヤ。スヷーハー。』『ニーラカントハーヤ。スヷーハー。』『アパラージタ、ヴイールヤーヤ。スヷーハー。』『ヒマヴットサンブフーターヤ。スヷーハー。』『アニミシヤチヤクラーヤ。スヷーハー。』『梵尊に歸命す。辯才天女に歸命す。眞言句をして成就せしめよ。かの梵に歸命せしめよ。スヷーハー。』

「この灌沐の業によりて我はかの法師比丘のために又かれら【100】聽法者書寫者のために、かしこに親しく、虛空仙、藥叉、天衆と俱に、又かしこに村邑、都城、聚落住處に於て、一切貪愛の鎭靜をなすべし。一切の覆障鬪爭、惡事、星宿の生に對する壓迫、惡夢、毘奈耶迦の壓迫、一切の壓鎭、起尸鬼を鎭むべし。かれら帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の生命の攝受はあるべし。輪廻の滅度はあるべし。又無上なる正等覺より不退轉なるべし。」

時に世尊は辯才大天女に善哉を唱へたり。「善きかな、善きかな、辯才大天女よ、群女の利のため、群生の樂のため、現在する汝によりてこの眞言と藥事の雜集は說かれたり。」而してかの辯才大天女は世尊の兩足を頂禮して一面に坐せり。

時に法師授記者なる憍陳如大婆羅門はかの辯才(天女)に讃頌を陳べて曰く、

(一〇) 大苦行者なる辯才大天女は供養せらるべきなり。【101】一切世間に於て知られ、與願者にして、大功德あり。

(一一) 嶺頭に依止し、愛せられ、吉祥草の衣を著け、淨衣を纏ひ、一足を以て立てり。

(一二) 彼等一切諸天は集まりて、舌に對向せるこの經語、清淨の語を有情に對して語れかし。

【註】「舌に對向せる」jihvābhimukham の意義明かならず。何等かの寫誤ならむも、未だ勘へず。 西藏譯「舌を發音に置く」又は「舌を發音せしめよ」。

卽ち是の如くなるべし。『スレー。ヴイレー。アラジヤヷテイ。ヒ。グレー。ピンガレー。ピンガレー。ヷテイムクヘー。マリーチ。スマテイ。デイシヤマテイ。アグラム。アグリータラ。ヴイタレー。チヤ。ヷデイヴイチヤリー。マデイニパーナエー。ローカジユエーシユトハケー。プリヤシッドヒヴラテー。ブヒーマムクヒシヤチヷリー。アプラテイハテー。アプラテイハタブッドヒ。ナムチ。ナムチ。大天女よ。攝受せよ。歸命す。

一切有情に對し、無礙なる慧あれ。論書、世間書、(經)藏、歌詠等に於て、わが智をして成就せしめよ。

曰く、大光あるものよ。ヒリ、ヒリ。ミリ、ミリ。辯才尊天の威力によりて、我をして遊行せしめよ。我れと一切有情の幻をして遊行せしめよ。【102】カダーラケー。ユヷテイ。ヒリ。ミリ。我は讃す。大天女よ。佛の諦理、法の諦理、僧の諦理、帝(釋)の諦理、婆樓那の諦理によりて、世間に於て諦理を語るものなる彼等のその諦理の語によりて我は讃す。

大天女よ。ヒリ、ヒリ。ミリ。我が眞言の幻は一切有情に對して遊行せよかし。辯才尊に歸命す。眞言句は成就せよかし。娑婆訶。

時に法師授記なる憍陳如大婆羅門はこれらの偈頌を以て辯才大天女を讃じて曰へり。

(一三) 一切の鬼神衆をして聞かしめよ。われ最上、最勝の容色ある天女を讃嘆す。彼女は天、乾闥婆、天帝王を含める世界に於て、婦女の中に最上、最勝の天女なり。

(一四) 莊嚴せられたるその身は種種多様にして。サラスヷティーと名けらるゝ廣き眼を有するものなり。福徳輝き、智慧功徳を以て充滿し、種々多様、最勝にして美はしゝ。

(一五) われは殊勝最勝の語功徳を以て彼を讃ず。【103】成就を作すもの、最上最勝者、讃せられたる有情、功徳の藏、離垢最勝なるもの、蓮華輝くもの。

(一六) 美はしき眼あるもの、最勝の眼あるもの、清淨の依止、清淨の發露

不可思議の功德を以て莊嚴せられたるもの、月の如きもの、離垢光あるもの、

（一七）智慧藏、完全なる念あるもの、最勝師子、諸人を運載するもの、寶摩尼もて臂を飾れるもの、滿月の如き觀あるもの、

（一八）微妙の語あるもの、柔軟なる聲あるもの、深智を具せるもの、最上行業を成就する善有情性、天と阿修羅に禮拜せられ、供養せられたるもの、一切の天と阿修羅衆住處に於て禮拜せられたるもの、生類の群によりて常に供養せられたるものにまで歸命す。娑婆訶。

【註】sadā を次の語と結合すべし。

（一九）【104】おゝわれ天女を敬禮す。彼をしてわれに功德の瀑流を與へしめよ。一切の有情の一切の業果に殊勝成就を與へしめよ。又常にわれ及び一切有情を怨敵の中に守護せしめよ。

【註】sarve sattvā を sarvā-sattvāna に siddhiṃ を siddhi に訂正。

（二〇）善精進者をして一劫の間、これら總結の文字の圓滿の言語を起

金光明經功德天品第八

爾時功德天白佛言。世尊。是說法者。我當隨其所須之物。衣服飲食臥具醫藥及餘資產。供給是人無所乏少。令心安住晝夜歡樂。正念思惟是經章句分別深義。若有衆生於百千佛所種諸善根。是說法者爲是等故。於閻浮提廣宣流布是妙經典令不斷絕。是諸衆生聽是經已。於未來世無量百千那由他劫。常在

立して誦せしめよ。彼は一切の欲願に於て錢穀を得、幸福なる殊勝なる悉地を得べしと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、辯才天女品第八。

吉祥大天女品第九【105】

時に吉祥大天女は世尊を禮して云へり。「大德世尊よ、女神吉祥大天女なるわれも亦かの法師比丘に對して勸勵をなすべし。卽ち衣服、飮食、臥具、病に用ふる藥、家具を以て、又其他の資具を以て、彼の法師が資具を具足してあるべきやうに(なすべし)。完具を得しむべし。心平安なるべし。心安樂にして晝夜に敬禮せしむべし。かくて又金光明最勝帝王經中種種なる文句を敬禮せしむべし。審察せしむべし。それによりてこの金光明最勝帝王經はかれら千佛の許に善根を植ゑたる有

【註】avaikalpatām を avaikalyatām に訂正。下同じ。

天上人中受樂。値遇諸佛。速成阿耨多羅三藐三菩提。三惡道苦悉畢無餘。

我已於過去寶華功德海琉璃金山照明如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御大夫天人師佛世尊所種諸善根。是故我今隨所念方。隨所視方。隨所至方。能令無量百千衆生受諸快樂。若衣服飮食資生之具。金銀七寶眞珠琉璃珊瑚琥珀璧玉珂貝。悉

情のために、永く閻浮洲に於て流布すべし。又速かに隱沒せざるべし。有情ありて、金光明最勝帝王經を聞かむ。多俱胝尼由他百千劫の間不可思議なる天人の樂あるべし。又饑饉は息滅すべし。豊饒は出現すべし。又有情は【106】人間の安樂に止住して幸福なるべし。如來と俱に會すべし。又未來の世、無上なる正等覺を證すべし。一切地獄、傍生、夜摩界の苦は全く斷滅すべし。

【註】 anekāni の ni を誤植せり。

「紅花功德海琉璃金山妙色金光吉祥と名くる如來應供正等覺者あり。かしこに吉祥大天女なる我によりて善根は植ゑられたり。それによりて今彼が有情に對して遊行する彼々の方に、彼が有情を觀見する彼々の方に、彼が往詣する彼々の方に、それらの方に多俱胝尼由他百千の有情は安樂に止住して幸福なるべし。完具を得べし。食物、飮料、財富、穀米、貨幣、黄金、珠寶、眞珠、琉璃、螺貝、寶石、珊瑚、金銀等、其他の資具を以て、有情は吉祥大天女の威神によりて一切の資具に富むべし。又かの如來

無所乏。若有人能稱金光明微妙經典。爲我供養諸佛世尊、三稱我名燒香供養。供養佛已別以香華種種美味、供施於我灑散諸方。當知是人卽能聚集資財寶物。

以是因緣增長地味。地神諸天悉皆歡喜。所種穀米芽莖枝葉果實滋茂。樹神歡喜出生無量種種諸物。我時慈念諸衆生故。多與資生所須之物。

の供養は作さるべきなり。香、華、燒香燈明は供へらるべし。三たび吉祥天女の名號は唱へらるべし。又かれに香、華、[107]燒香、燈明は供へらるべし。食味は供へらるべし。かの大なる財物の聚は增長すべし。」

【註】此の下若干の爛敗あるもの〻如し。rasa-vihārā nikṣeptavyāni は rasāhārāś ca nikṣeptavyāḥ とすべし。次下の 108 頁二行參照すべし。

偈に言へり。

(一) 地味は地上に增長すべし。又諸神は常に喜ばされてあるべし。

【註】 dharaṇī raso は合成語とすべし。dharaṇyā は dharaṇyāṃ と讀むべし。

樹木の諸神は善美の狀態に果實穀米を生長せしむべし。

【註】 この偈諸寫本を再考して若干の修正をなせり。梵文を左の如く訂正するを要す。

vivardhate bhūmi-raso dharaṇyāṃ praharṣitā bhonti ca devatāsada, phalā ca vr̥hi-druma-vr̥kṣa-devatā rohenti sasyāni sucitrabhāvā.

金光明最勝帝王經の名號は唱へらるべし。吉祥大天女はかれら有情を覆護すべし。又彼等の大吉祥を作すべし。

世尊。於此北方。毘沙門天王有城名曰阿尼曼陀。其城有園名功德華光。於是園中有最勝園。名曰金幢七寶極妙。此卽是我常止住處。若有欲得財寶增長。是人當於自所住處。應淨掃灑洗浴其身。著鮮白衣妙香塗身。爲我至心三稱彼佛寶華琉璃世尊名號。禮拜供養燒香散華。亦當三稱金光明經至誠發願。別以香華種種美味。供施於我散灑諸方。爾時當說如是章句　波利富樓那遮利　三曼陀達舍尼羅佉　摩訶毘呵羅伽帝　三曼陀毘陀那伽帝　摩訶迦梨波帝　波婆禰　薩婆哆帖　三曼陀　脩鉢梨富隸

アラカーヴァティーの王城に、福華光明園林に於て、金幢と名けられたる七寶光明林に、吉祥大天女は住せり。誰にもあれ人ありて穀聚を增長せんと欲せむ。彼は自の屋宅を淨むべし。白淨の衣を纏ひ、芳香ある衣を着すべし。南無世尊寶華功德海琉璃金山妙色吉祥如來應供正等覺者と三たび名號は唱へ【108】られむ。吉祥大天女の供養は彼の手によりてなさるべし。華香、燒香は供へらるべし。種々の食味は供へらるべし。

【註】rasa-vihārāś ca は rasāhārāś ca と讀む。

而してかの金光明最勝帝王經の威神によりて、その時吉祥大天女は彼の家を覆護すべし。又かの大穀聚は增長すべし。故に吉祥大天女を屈請せんと欲するものによりて、これらの明咒は念せらるべきなり。曰く、「過去未來現在の一切諸佛に歸命す。一切諸佛菩薩に歸命す。慈氏を始めとせる諸菩薩に歸命す。彼等に歸敬をなし已りて我れこれらの明咒を行ず。このわが明咒をして成就せしめよ。咒に曰く、滿足最上者よ、普遍行者よ、得大事業よ、有情義利平等性滿足者よ、

阿夜那達摩帝　摩訶毘鼓畢帝　摩訶彌勒簸僧祇帝醯帝　三博祇悕帝　三曼陀阿吔　阿莬婆羅尼是灌頂章句　必定吉祥眞實不虛。等行衆生及中善根。應當受持讀誦通利。七日七夜受持八戒。朝暮淨心。香華供養十方諸佛。常爲己身及諸衆生。廻向具足阿耨多羅三藐三菩提。作是誓願。令我所求皆得吉祥。自於所居房舍屋宅淨潔掃除。若自住處若阿蘭若處以香泥塗地燒微妙香敷好座。次種種華香布散其地以待於我。我於爾時如一念頃。入其室宅卽坐其座。從此日夜令此所居若村邑若僧坊若露地

アーヤーナ。ドハルミター。マハーテージョーパマ。ヒテー。仙攝受者よ、本誓守護者よ。

【註】陀羅尼は本來譯すべき性質のものにあらず。今比較的意義明了なる部分のみを譯す。疑義ある部分に及ばず。

これ頂上灌頂法性眞言なり。一月句、不毀謗眞言句なり。倶持を以て植ゑられたる善根を以て【109】普覆護持しつゝ、七年八支具足戒に住

【註】sa sapta-varṣā aṣṭâṅgôpetā sapañcisina とあるはパリ本にて sapta-varṣâṣṭâṅgôpetôpavāsa-vāsinā と訂正す。

せるものによりて、早旦、晡後、自己と一切有情の一切知智滿足のために、一切諸佛世尊に華香燒香の供養をなし、それによりて一切の願求は成就せよかし。速かにその家をして繁榮ならしめよ。彼は身を潔め、空閑處に住し、牛糞を以て壇を作り。香華燒香は供へらるべし。清淨の座は施設せらるべし。華は散らさるべし。かくてその瞬間に吉祥大

【註】puṣpâvakīrṇaṃ tu gamitavyam と訂正。

無所乏少。若錢若金銀若珍寶若牛羊若穀米。一切所須即得具足悉受快樂。若能以已所作善根最勝之分廻與我者。我當終身不遠其人。於所住處至心護念。隨其所求令得成就。

應當至心禮如是等諸佛世尊。其名曰寶勝如來。無垢熾寶光明王相如來。金焰光明如來。金百光明照藏如來。金山寶蓋如來。金華焰光相如來。大炬如來。寶相如來。亦應敬禮。

天女は入りてそこに立つべし。これによりてその家、村邑、都城、聚落、空閑處の住處に於て決して如何なる缺乏も作さゞるべし。貨幣、黄金、寶物、財富、穀米等の一切の資具富饒を以て、一切安樂止住によりて幸福なるべし。善根は保持すべし。かくて吉祥大天女の一切愛敬威神願求

【注】 kuśalamūlaś ca は kuśalamūlam ca とすべきか。

は與へらるべし。一生の間、かしこに立つべし。損減せざるべし。又彼等に對して一切の願求を滿足せしむべしと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、吉祥大天女品第九。

一切諸佛菩薩名號總持品第十【一〇】

唵、世尊寶髻如來に歸命す。金寶藏傘蓋積如來に歸命す。金華焰光幢如來に歸命す。大燈如來に歸命す。妙幢と名くる菩薩あり。金光明最勝と名くる菩薩あり。金香と名くる菩薩あり。常啼と名くる菩

信相菩薩。金光明菩薩。金藏菩薩。常悲菩薩。法上菩薩亦應敬禮。東方阿閦如來。南方寶相如來。西方無量壽佛。北方微妙聲佛。

金光明經堅牢地神品第九

爾時地神堅牢白佛言。世尊。是金光明微妙經典。若現在世若未來世。在在處處。若城邑聚落。若山澤空處。若王宮宅。世尊。隨是經典所流布處。是地分中敷師子座。令說法者坐其座上。廣演宣說是妙經典。我當在中常作宿衞。

薩あり。法上と名くる菩薩あり。東方に阿閦と名くる如來あり。南方に寶幢と名くる如來あり。西方に無量壽と名くる如來あり。北方に鼓音聲と名くる如來あり。金光明最勝帝王經中に、これら菩薩の名を受持し宣說する彼等菩薩は常に生念なるべしと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、一切諸佛菩薩名號總持品第十。

堅牢地神品第十一【三】

時に堅牢地神は世尊に白して言へり。「大德世尊よ、この金光明最勝帝王經は現在及び未來の世に於て、若くは村邑若くは都城、若くは聚落、若くは村落に於て、若くは曠野、若くは山窟、若くは王宮に到るべし。世尊よ、この金光明最勝帝王經の廣く說かるべき所、何處にもあれ、或る地方に於て、かの端身なる法師比丘に對し、法座の施設はあるべきなり。その座のある所、法師は座に着き、この金光明最勝帝王經を廣く宣說す

隱蔽其身於法座下頂戴其足我聞法已。得服甘露無上法味增益身力而此大地深十六萬八千由旬。從金剛際至海地上。悉得衆味增長具足。豐壤肥濃過於今日。以是之故。閻浮提內藥草樹木。根莖枝葉華果滋茂。美色香味皆悉具足。衆生食已增長壽命色力辯安。六情諸根具足進利。威德顏貌端嚴殊特。成就如是種種等已。所作事業多得成辦。有大勢力精勤勇猛。

べし。大德世尊よ、かしこに、我れ堅牢地神は、かれらの地方に來るべし。かしこに我は法座に行き、隱形身と最勝身を以てかの法師比丘の足面を頂戴すべし。又我はこの聽法の法甘露味を以て自身を滿足し、尊敬

【註】　原語 pratisaṃpharisyāmi には「牽く」、「止む」の意あるも「頂戴」の如き意義なし。只涼唐譯にて準ふのみ。下之に準ず。

し、供養すべし。【12】又自身を滿足し、尊敬し、歡喜せしめ、自らこの地聚六萬八千由旬をこの聽法の法甘露味を以て、乃至金剛所成の地面に至るまで、地味を以て增益し、尊敬し、充滿せしむべし。又上方この海を繞らせる地面に至るまで、地輪を愛すべき地味によりて美妙ならしむべし。この大地をして一層精氣あらしむべし。この閻浮洲に於て、種種の草、叢林、藥草林をして一層精氣強く生長せしむべし。又種種多樣の一切の園林樹木穀類をして一層精氣あらしむべし。一層香氣あらしめ、一層愛すべく、美味に、見るべく、最勝ならしむべし。又彼等有情はその種種の飲食を受用して、壽力色根を增長すべし。威力色形を具足し、

是故世尊。閻浮提內安隱豐樂人民熾盛。一切衆生多受快樂。應心適意隨其所樂。是諸衆生得是威德大勢力已。能供養是金光明經。及恭敬供養持是經者四部之衆。我於爾時當往其所爲諸衆生受快樂故。請說法者廣令宣布如是妙典何以故。世尊。是金光明若廣說時。我及眷屬所得功德倍過於常。增長身力心進勇銳。世尊。我服甘露無上味已。閻浮提地縱廣七千由旬豐壤倍常。世尊。如是大地衆生所依。悉能增長一切所須

種種の地上にある多種百千の事業をなすべし。起立すべし。遍滿すべし。力を以てなさるべき事業を作すべし。[113]

「大德世尊よ、この因によりて一切閻浮洲は寂靜なるべし。豐饒にして、增大し、繁榮して、樂しむべく、多くの人民充滿してあるべし。又一切閻浮洲に於て有情は幸福なるべし。種種多樣なる樂を享くべし。彼等有情は威力色形を具足してあるべし。かの金光明最勝帝王經のために、法座に着きたる彼等帝王經受持者なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、の前に往詣すべし。往詣して彼等淨信あるものは一切有情の利のため、益のため、樂のために、かれら法師等を勸請すべし。かの金光明最勝帝王經を說きつゝある間、われ眷屬と倶なる堅牢地神は一層精氣を具してあるべし。大德世尊よ、かくて我等の身に於て大力、精力、勢力は生じてあるべし。威力、吉祥、幸福は我等の身に入るべし。大德世尊よ、又我れ堅牢地神のこの法甘露味によりて滿足し、大[114]勢力精進力速疾

【註】 adhyeṣayeyuḥ にて句を切り、asya 以下を次の文に從屬せしむべし。

之物。增長一切所須物已。令諸衆生隨意所用受於快樂。種種飲食衣服臥具。宮殿屋宅樹木林苑。河池井泉。如是等物依因於地悉皆具足。

是故世尊。是諸衆生爲知我恩應作是念。我當必定聽受是經供養恭敬尊重讚歎。作是念已。卽從住處若城邑聚落舍宅空地。往法會所聽受是經。既聽受已還其所止各應相慶作如

を得る時、この閻浮洲なる七千由旬の大地は大地味を以て增長すべし。又大地は精力を具有してあるべし。大德世尊よ、これら大地に依止せる一切有情は增長廣博なるに至るべし。又大となるべし。又大となりて、地住の一切有情は種種の享樂を受用すべし。又幸福を受用すべし。彼等一切種種なる食物、飲料、受用物、衣服、臥具、住居、宮殿、園苑、河、池、泉、湖、江等これら是の如き等の地上の種種の樂具は地上に出現し、地上にあるを享受すべし。大德世尊よ、かくて一切有情によりて我等に對する感恩はなさるべし。決定してこの金光明最勝帝王經は聽かるべく、恭敬、尊重、奉事、供養せらるべし。

「大德世尊よ、その時又一切有情は種種の家族より、種種の屋宅より、彼等法師へ往詣のために出づべし。[115]往詣してこの金光明最勝帝王經を聽くべし。聽きて復彼等有情は各自種種の家族、屋宅、村邑、聚落に入り、自らの屋宅に行きて相互に語るべし。我等によりて今日甚深の聽法は聽かれたり。我等によりて今日不可思議なる福德聚は攝取せ

是言。我等今者聞此甚深無上妙法。已爲攝取不可思議功德之聚。値遇無量無邊諸佛。三惡道報已得解脫。於未來世常生天上人中受樂。是諸衆生各於住處。若爲他人演說是經。若說一喩一品一緣。若復稱歎一佛一菩薩一四句偈乃至一句。及稱是經首題名字。

世尊。隨是衆生所住之處。其地具足豐壤肥濃過於餘地。凡是因地所生之物。悉得增長滋茂廣大。令諸衆生受於快樂。多饒財寶好行惠施。心常堅固深信三寶。

られたり。この聽法によりて、地獄は解脫せられてあるべし。今日我等によりて傍生夜摩界、餓鬼趣は解脫せられてあるべし。この聽法によりて未來の世、多百千の生に於て人天の生は攝取せられてあるべし。かくて又彼等有情の中、種種の家に在るものは、かくしてこの金光明最勝帝王經の中より、乃至一喩を說くべし。若くは乃至一品、若くは一前行、乃至四句の偈にても、乃至金光明最勝帝王經中より一句にても他の有情をして聞かしむべし。乃至金光明最勝帝王經の名號にても他の有情をして聞かしむべし。

「大德世尊よ、彼等種種の有情のある種種の地の方處に於て、是の如きの種種の【116】經因緣を相互に說き、又聞かしむべし。又說話の連關をなすべし。大德世尊よ、一切彼等地の方處は一層精力を具有してあるべく、一層滑潤なるべく、到る處、地の方處に於て、一切有情の種種なる地味、一切の資具は一層多量に生產し、增加し、廣大となるべし。一切彼等有情は大富、大快樂、好んで惠施を行ずべし。三寶に於て淨信なるべし。」

爾時佛告地神堅牢。若有衆生。乃至聞是金光明經一句之義。人中命終隨意往生三十三天。地神。若有衆生。爲欲供養是經典故莊嚴屋宅。乃至張懸一幡一蓋及以一衣。欲界六天已有自然七寶宮殿。是人命終卽往生彼。地神。於諸七寶宮殿之中。各各自然有七天女。共相娛樂日夜常受不可思議微妙快樂。

爾時地神白佛言。世尊。以是因緣。說法比丘坐法座時。我常晝夜衛護不離。隱蔽其形在法座下頂戴其

かくの如く言はれし時、世尊は堅牢地神に告げて言へり。「地神よ、誰にもあれ、この金光明最勝帝王經の中より、乃至一句をだにも聽かん所の彼等一切は、この人間世界より死して三十三天處の各各の天處に生ずべし。地神よ、誰にもあれ、有情はこの金光明最勝帝王經のために彼等の住處に乃至一傘蓋、若くは一繒衣を莊嚴せむ。而して天處は莊嚴せられむ。彼等七欲界の天【一七】處に於て、一切の莊嚴を莊嚴せる七寶所成の天の宮殿はあるべし。かれら有情はこの人間世界より死してかの七寶所成の天の宮殿に生ずべし。地神よ、彼等は一々の七寶所成の天宮に於て七度生るべし。不可思議の天の幸福を享受すべし。」

【注】七は恐らくは六なるべし。

【注】sapta-varā anupapatsyate は sapta-vārān upapatsyate と訂正。

かくの如く言はれたる時、堅牢地神は世尊に白して言へり。「大德世尊よ、されば われ堅牢地神はかの法師比丘の法座に着ける時、かの地方に於て住すべし。隱形身を以て、最勝身を以て、かの法師比丘の兩足を

足。世尊。若有衆生於百千佛所種諸善根。是說法者爲是等故。於閻浮提廣宣流布是妙經典令不斷絕。是諸衆生聽是經已。未來之世無量百千那由他劫。於天上人中常受快樂。値遇諸佛疾成阿耨多羅三藐三菩提。三惡道苦悉斷無餘。

金光明經卷第二

金光明經卷第三

北涼三藏法師曇無讖譯

金光明經散脂鬼神品第十

爾時散脂鬼神大將。及二十八部諸鬼神等。卽從座起。偏袒右肩右膝著地。白佛言。世尊。是金光明

頂戴すべし。かくてこの金光明最勝帝王經は彼等千佛の許に善根を植ゑたる有情のために、永く閻浮洲に流布すべし。又速かに隱沒せざるべし。又有情はこの金光明最勝帝王經を聽くべし。未來世に於て、多倶胝百千劫の間、不可思議なる人天の幸福を受くべし。【118】如來と倶に會すべし。未來の世に於て無上なる正等覺を證得すべし。一切地獄、傍生、夜摩の世界の苦は斷滅してあるべし」と。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、堅牢地神品第十一。

散惹耶大藥叉軍主品第十二【119】

時に散惹耶と名くる大藥叉軍主は二十八大藥叉軍主と倶に座より起ち、一肩に上着衣を被り、右膝輪を地に着け、世尊の方に合掌を傾け、世尊に白して言へり。「大德世尊よ、この金光明最勝帝王經は現在及び未來世に於て、何處にもあれ、村邑、都城、聚落村落、人民住處に於て、曠野、山窟

微妙經典。若現在世及未來世。在在處處若城邑聚落。若山澤空處若王宮宅。隨是經典所流布處。我當與此二十八部大鬼神等。往至彼所隱蔽其形。隨逐擁護是說法者。消滅諸惡令得安隱。及聽法衆若男若女童男童女。於是經中乃至得聞一如來名一菩薩名及此經典首題名字。受持讀誦。我當隨侍宿衛擁護悉滅其惡令得安隱。及國邑城郭。若王宮殿。舍宅空處。皆亦如是。

世尊。何因緣故。我名散

王宮、宅宇に於て流布すべし。大德世尊よ、其の處に於て、我れ散惹耶と名くる大藥叉軍主は二十八大藥叉軍主と倶に、かの村邑、都城、聚落、村落、人民住處に於て、曠野、山窟、王宮に於て往詣すべし。隱形身を以てかの法師比丘の守護をなすべし。衞護、攝受、保護、笞杖の撤去、兵戈の撤去、寂靜安穩をなすべし。又かれら[120]聽法の婦女、男子、童男、童女、誰にてもあれこの金光明最勝帝王經中より、乃至一の四句の偈にても聽かれむ。乃至一句にても、金光明最勝帝王經中より一菩薩の名號にても、若くは一如來の名號にても、聽かれ、攝受せられてあらむ。又この金光明最勝帝王經の名號は聞かれ攝受せられてあらむに、我は彼等一切の守護をなすべし。衞護、攝受、保護、笞杖の撤去、兵戈の撤去、寂靜安穩をなすべし。又彼等家族、彼等宅宇、彼等都城、彼等村邑、彼等聚落、彼等曠野、彼等王宮に對して守護をなすべし。衞護、攝受、保護、笞杖の撤去、兵戈の撤去、寂靜安穩をなすべし。

「そは何の因緣によるや。一切諸法は證知せられたり。又一切諸法

脂鬼神大將。唯然世尊。自當證知。世尊。我知一切法一切緣法。了一切法。知法分齊。如法安住一切法。如性於一切法含受一切法。世尊。我現見不可思議智光。不可思議智炬。不可思議智行。不可思議智聚。不可思議智境。世尊。我於諸法正解正觀。得正分別。正解於緣。正能覺了。世尊。以是義故名散脂大將。

世尊。我散脂大將。令說法者莊嚴言辭辯不斷絕。衆味精氣從毛孔入。充益身力心進勇銳。成就不可思議智慧入正憶念。如是等事悉令具足心無疲厭。身受諸樂心得歡喜。以是

のある限り、又一切諸法のある如く、又一切諸法なるものが建立せらるゝ、その一切諸法は知悉せられたり。一切諸法は證知せられたり。又一切諸法は正しく知られたり。大德世尊よ、我は一切諸法について現證なり。大德世尊よ【121】我が智光は不可思議なり。智炬は不可思議なり。智行は不可思議なり。智蘊は不可思議なり。大德世尊よ、一切諸法に於てわが智境界は不可思議なり。大德世尊よ、我れによりて一切諸法は正知せられ、正見せられ、正了せられ、正觀せられ、正證せられたるが故に。大德世尊よ、この因緣によりて我れ散耆耶大藥叉軍主にとりて正了知なる名號は生せり。

「大德世尊よ、我れ法師比丘の語言莊嚴のために辯才を集注せしむべし。彼れの毛孔に於て精氣を置くべし。又彼れの身に於て大勢力精進を生せしむべし。彼れの智光を不可思議ならしむべし。又彼れの念を覺めしむべし。又彼に大忍耐を賦與すべし。かくて又彼の法師はその身疲倦なかるべし。根身安樂なるべし。又歡喜を生ずべし。

意故。能爲衆生廣說是經。若有衆生。於百千佛所種諸善根。說法之人。爲是衆生於閻浮提內。廣宣流布是妙經典令不斷絕。無量衆生聞是經已。當得不可思議智聚。攝取不可思議功德之聚。於未來世無量百千劫。人天之中常受快樂。於未來世值遇諸佛。疾得證成阿耨多羅三藐三菩提。一切衆苦。三惡趣分永滅無餘。

南無寶華功德海琉璃金山光照如來應供正遍知。南無無量百千億那由他莊嚴其身釋迦如來應供正遍知。熾然如是微妙法炬。南無第一威德成就衆事大功德天。南無不可思量智

それによりてこの金光明最勝帝王經はかれら千佛の許に善根を植ゑたる有情のために、永く閻浮洲に【122】流布すべし。速かに隱沒せざるべし。又有情はこの金光明最勝帝王經を聽くべし。又不可思議なる智蘊を得べし。又智慧を具足してあるべし。又無量の福聚を攝受すべし。未來世に於て多倶胝尼由他百千劫の間、不可思議なる人天の樂を得べし。又如來と倶會すべし。未來の世に於て無上なる正等覺を證すべし。又一切地獄、傍生、夜摩の世界の苦は斷滅してあるべし」と。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、散慧耶大藥叉軍主品第十二。

かの世尊寶華功德琉璃金山妙色金光明吉祥如來應供正等覺者に歸命す。かの法炬の熾燃せる、多倶胝尼由他百千の功德を以て身を莊嚴せる、【123】釋迦牟尼如來に歸命す。かの無量の福聚財穀吉祥を具足せる、吉祥大天女に歸命す。無量功德智を出生する辯才天女に歸命す。

慧功德成就大辯天。

金光明經正論品第十一

爾時佛告地神堅牢。過去有王名力尊相其王有子名曰信相。不久當受灌頂之位統領國土。爾時父王告其大子信相。世有正論。善治國土。我於昔時曾爲大子。不久亦當紹父王位。爾時父王持是正論。亦爲我說。我以是論於二萬歲善治國土。未曾一念以非法行。於自眷屬情無愛著。何等名爲治世正論。地神。爾時力尊相王爲信相大子。說是偈言。

我今當說　諸王正論
爲利衆生　斷諸疑惑

帝王本誓王論品第十三【124】

其の時牛幢王は王位に定められたる王の子なる、久しからずして灌頂せらるべき妙幢に告げて言へり。「王子よ、天帝本誓と名くる王論あり。われ曾て王位に定められ、久しからずして灌頂せらるべき時、父王力帝幢の前に於てこれを得たり。この天帝本誓王論によりて、われ二萬歲の間王業をなせり。われ乃至一念一刹那も曾て何等非法に任せしを知らず。何をか天帝本誓王論と云ふ。」

善女神よ、時に牛幢王はその時王子妙幢に對し、これらの偈を以て天帝本誓と名くる王論を廣說せり。

(一) われ一切有情の利をなすべき、一切の疑惑を斷ずる、一切の惡行を

一切人王　諸天天王
應當歡喜　合掌諦聽
諸王和合　集金剛山
護世四鎭　起問梵王
大師梵尊　天中自在
能除疑惑　當爲我斷
云何是人　得名爲天
云何人王　復名天子
生在人中　處王宮殿
正法治世　而名爲天
護世四王　問是事已
時梵尊師　卽說偈言
汝今雖以　此義問我
我要當爲　一切衆生
敷揚宣暢　第一勝論
因集業故　生於人中
王領國土　故稱人王
處在胎中　諸天守護
或先守護　然後入胎
雖在人中　生爲人王

滅ぼすべき王論を說くべし。

(二)【125】王者よ、汝等一切各各歡喜の心を起し、合掌して一切天帝なる本誓を聽け。

(三)かしこに金剛種山王に於て、天帝等の集會を以て梵王は起立せる護世者等によりて尋問せられたり。

(四)汝梵王はわれらの尊重神なり。汝は諸天中の自在者なり。疑惑を斷ずるものなる汝は我等の疑惑を斷せよ。

(五)如何にこの人間世界に王と生れたる彼は人たる王にして神(デーヴ)と云はるゝや。

(六)如何に天と人に於て、王業を作すべきや。是の如く梵王は護世者によりて尋問せられたり。

(七)此に尊重神なる梵王はかれら護世者に告げて言へり。此に今われれ護世者によりて尋問せられし最勝の論を一切有情のためにわれは說くべし。

以天護故　復稱天子
三十三天　各以己德
分與是人　故稱天子
神力所加　故得自在
遠離惡法　遮令不起
安住善法　修令增廣
能令衆生　多生天上
半名人王　亦名執樂
羅刹魁膾　能遮諸惡
亦名父母　教誨修善
示現果報　諸天所護
善惡諸業　現在未來
現受果報　諸天所護
若有惡事　縱而不問
不治其罪　不以正教
捨遠善法　增長惡趣
故使國中　多諸姦鬪
三十三天　各生瞋恨
由其國王　縱惡不治
壞國正法　姦詐熾盛

(八) われ人間住處に相應して諸人の生を語るべし。その因緣によりて國土に於て諸王あり。

(九) 天帝王の加護に依つて母胎に入る。過去に諸天によりて加護せられ、後に胎に於て生ず。

(一〇) [26] 兎もあれ人間世界に生れて王となれる彼は天より生じたるが故に天子と稱せらる。

(一一) 三十三(天)の天帝王によりて王の分限は賦與せられたり。汝(王)子は同侶諸天に中の化現せる人自在者なり。

(一二) 非法の消滅をなすべく、惡行の遮止をなす。諸有情を天界へ送るために善行に立たしむべし。

(一三) 人、天、乾闥婆羅刹娑若くは旃陀羅も惡行の遮止をなすものは人主なり。

(一四) 父若くは母は善に於て業をなすものゝ中に王なり。天王よ、汝は異熟果を受くるものなり。加護せられたり。

他方怨敵　競來侵掠
自家所有　錢財珍寶
諸惡盜賊　共來劫奪
如法治世　不行是事
若行是者　其國殄滅
譬如狂象　踏蓮花池
暴風卒起　屢降惡雨
惡星數出　日月無光
五穀果實　咸不滋茂
由王捨正　使國饑饉
天於宮殿　悉懷愁惱
由王縱虛　不修善事
是諸天王　各相謂言
是王行惡　與惡爲伴
以造惡故　速得天瞋
以天瞋故　不久國敗
非法兵伏　姦詐鬪訟
疾疫惡病　集其國土
諸天卽便　捨離是王
令其國敗　生大愁惱

（一五）善惡業の現法者なり。天王よ、汝は異熟果を受くるものなり。加護せられたり。

（一六）若し王國土の中に存在する惡行を看過して、惡人に對して種種の治罰を作さゞらば、惡行の看過に於て非法は極めて增長す。

（一七）國土の中に諂僞と鬪爭とは益多く、[127]天帝王は三十三天住處に於て忿怒す。

（一八）若し王國土の中に存在する惡行を看過せば、國土は恐るべき、極めて恐るべき諂僞を以て擊たる。

（一九）怨敵の侵略に當りその國土に於て資具、軍力、集積せられたる財富は滅亡す。

【註】vināśyati を vināśyanti に ca tad rāṣṭraṃ を tadā rāṣṭre に訂正。

（二〇）種種の諂僞は相互に侵奪し、その結果として彼は爲さるべき王業を爲さざるべし。象の蓮池に於けるが如く、自の國土を蹂躪す。

（二一）惡風吹き、暴雨灑ぎ、星宿と日月と常態を失す。

兄弟姉妹　眷屬妻子
孤迸流離　身亦滅亡
流星數墮　二日並現
他方惡賊　侵掠其土
人民飢餓　多諸疾疫
所重大臣　捨離薨亡
象馬車乘　一念喪滅
諸家財産　國土所有
互相劫奪　刀兵而死
五星諸宿　違失常度
諸惡疾疫　流漏其國
諸受寵祿　所任大臣
及諸群僚　專行非法
如是行惡　偏受恩遇
修善法者　日日衰滅
於行惡者　而生恭敬
見修善者　心不顧錄
故使世間　三異並起
星宿失度　降暴風雨
破壞甘露　無上正法

(二二) 穀物、華、果、種正しく熟せず。王の看過する所、其處に饑饉あり、又諸天は天宮にありて喜ばず。

(二三) 王看過して惡行國土に於て行はるゝ時彼等一切の諸天は互に謂ふべし。[128]

(二四) この王は非法なり。非法の黨衆に親近す、久しからずしてこの王は諸天を怒らしめむ。

【註】 devatāṃ を devatāḥ と訂正。

(二五) 諸天忿怒の故に彼の國土は滅亡せむ。兵戈と非法と其の國土にあるべし。

(二六) 諂僞と、鬪爭と疾疫との生起あり。天帝は忿怒し、諸天は看過すべし。

(二七) その國土は蹂躙せられ、彼の王は憂苦を得べし。兄弟と子と所愛の別離を得べし。

(二八) 愛妻との別離、又は女子(との別離)は得られ、炬火の墜落あるべし。

他方怨敵　競來侵掠
自家所有　錢財珍寶
諸惡盗賊　共來劫奪
如法治世　不行是事
若行是者　共國殄滅
譬如狂象　踏蹈花池
暴風卒起　屢降惡雨
惡星數出　日月無光
五穀果實　咸不滋茂
由王捨正　使國饑饉
天於宮殿　悉懷愁惱
由王暴虐　不修善事
是諸天王　各相謂言
是王行惡　與惡爲伴
以造惡故　速得天瞋
以天瞋故　不久國敗
非法兵仗　姦詐鬪訟
疾疫惡病　集其國土
諸天卽便　捨離是王
令其國敗　生大愁惱

（一五）善惡業の現法者なり。天王よ、汝は異熟果を受くるものなり。加護せられたり。

（一六）若し王國土の中に存在する惡行を看過して、惡人に對して種種の治罰を作さゞらば、惡行の看過に於て非法は極めて增長す。

（一七）國土の中に諂僞と鬪爭とは益多く、[127] 天帝王は三十三天住處に於て忿怒す。

（一八）若し王國土の中に存在する惡行を看過せば、國土は恐るべき、極めて恐るべき諂僞を以て擊たる。

（一九）怨敵の侵略に當りその國土に於て資具、軍力、集積せられたる財富は滅亡す。

【註】 vinaśyati を vinaśyanti に ca tad rāṣṭraṃ を tada rāṣṭre に訂正。

（二〇）種種の諂僞は相互に侵奪し、その結果として彼は爲さるべき王業を爲さざるべし。象の蓮池に於けるが如く、自の國土を蹂躪す。

（二一）惡風吹き、暴雨灑ぎ、星宿と日月と常態を失す。

兄弟姊妹　眷屬妻子
孤迸流離　身亦滅亡
流星數墮　二日並現
他方惡賊　侵掠其土
人民飢餓　多諸疾疫
所重大臣　捨離薨亡
象馬車乘　一念喪滅
諸家財產　國土所有
互相劫奪　刀兵而死
五星諸宿　違失常度
諸惡疾疫　流溢其國
諸受寵祿　所任大臣
及諸群僚　專行非法
如是行惡　偏受恩遇
修善法者　日日衰滅
於行惡者　而生恭敬
見修善者　心不顧錄
故使世間　三異並起
星宿失度　降暴風雨
破壞甘露　無上正法

(二二) 穀物、華、果、種正しく熟せず。王の看過する所、其處に饑饉あり、又諸天は天宮にありて喜ばず。

(二三) 王看過して惡行國土に於て行はるゝ時彼等一切の諸天は互に謂ふべし。[128]

(二四) この王は非法なり。非法の黨衆に親近す、久しからずしてこの王は諸天を怒らしめむ。

【註】 devatāṃ を devatāḥ と訂正。

(二五) 諸天忿怒の故に彼の國土は滅亡せむ。兵戈と非法と其の國土にあるべし。

(二六) 諂僞と鬪爭と疾疫との生起あり。天帝は忿怒し、諸天は看過すべし。

(二七) その國土は蹂躪せられ、彼の王は憂苦を得べし。兄弟と子と所愛の別離を得べし。

(二八) 愛妻との別離、又は女子(との別離)は得られ、炬火の墜落あるべし。

衆生等類　及以地肥
恭敬弊惡　毀諸善人
故天降雹　飢餓疫病
穀米果實　滋味衰滅
多病衆生　充滿其國
甘美盛果　日日損減
苦澁惡味　隨時增長
本所遊戲　可愛之處
悉皆枯悴　無可樂者
衆生所食　精妙上味
漸々損減　食無肥膩
顏貌醜陋　氣力衰微
凡所食噉　不知厭足
力精勇猛　悉滅無有
嬾惰懈怠　充滿其國
多有病苦　逼切其身
惡星變動　羅刹亂行
若有人王　行於非法
增長惡伴　損人天道
於三有中　多受苦惱

又二日並び出でむ。

（二九）又怨敵の怖畏あり。饑饉は甚しく增すべし。愛臣は死し、非愛の語は叫ぶ。

（三〇）所愛の子、愛信頼ある妻子背き、互に家族の享樂と財物を侵奪す。

【註】gtam ṅan を日を除き合成語とす。

（三一）處々に互に武器を以て相擊ち、又國土に於て諍論、鬪爭、諂僞あるべし。

（三二）【29】妖星は國土に入り恐るべき疾疫あり。其の間に非法をなすもの尊敬せらる。

（三三）宰相と群臣とは亦彼に對して非法をなし、其の間に非法の人々に供養あるべし。

【註】pariṣadyāś を pāriṣadyāś と訂正。

（三四）常に正法の人々に罰あり。非法の人々に尊敬あり。正法のものに罰あり。星宿と水と風の三は怒る。

起如是等　無量惡事
皆由人王　愛著眷屬
縱之造惡　捨而不治
若爲諸天　所護生者
如是人王　終不爲是
有行善者　得生天中
行不善者　墮在三塗
三十三天　皆生焦熱
由王縱惡　捨而不治
違逆諸天　及父母勅
不能正治　則非孝子
起諸姦惡　壞國土者
不應縱捨　當正治罪
是故諸天　護持是王
以滅惡法　修習善故
現世正治　得增王位
應各爲說　善不善業
能示因果　故得爲王
諸天護持　隣王佐助
爲自爲他　修正治國

(三五) 非法の人重用せられ、正法の味力と有情の精力と地味と、三相は消滅す。

(三六) 非正の人々は尊敬せられ、正しき人々は輕視せらる。三(災)あるべし。其處に甚しき饑饉あり。其の間に果穀の精力あることなし。

(三七) 國土に於て多くの有情は疾疫に罹り、國土に於て甘美にして大なる果實は變じて苦澁となるべし。

(三八) 曾て樂しくありし遊戯歡笑の樂と【130】樂しむべき會合は百の憂患をもて混亂すべし。

(三九) 穀類果實の甘美なる味は失はれ、又身根諸體液は意に適はざるべし。

(四〇) 諸の有情は色衰へ、勢力減退し、力弱くなるべし。彼等は多くの食物を攝りて充足に到り難く、

(四一) 其の間に力、勢、精進を得ず。國土に於て有情は精力衰ふべし。

(四二) 有情は疾病に侵され、種種の病患に苦しめらるべし。妖星惡宿

有壞國者　應當正敎
爲命及國　修行正法
不應行惡　惡不應縱
所有餘事　不能壞國
惡因多姦　然後傾敗
若起多姦　壞於國土
譬如大象　壞蓮華池
怨恨諸天　故天生惱
起諸惡事　彌滿其國
是故應隨　正法治世
以善化國　不順非法
寧捨身命　不愛眷屬
於親非親　心常平等
視親非親　和合爲一
正行名稱　流布三界
正法治國　人多行善
常以善心　仰瞻國王
能令天衆　具足充滿
是故正治　名爲人王
一切諸天　爲護人王

種種の羅刹の出現あるべし。

(四三) 非法の王は非法の朋黨に與みす。三界に於て一切の三界輪は滅ぶ。是の如き多くの過失は國土の中に存す。

(四四) 若し王朋黨に與みしてその義務により王の諸天によりて加護せられたる惡行を看過せば、惡行を看過しつゝ彼はかの王業を作さす。

(四五) 善行によりて一切諸天の住處に生じ、又惡行によりて彼等は餓鬼傍生地獄に行く。【131】惡行をなすが故に三十三天の住處に於て彼等は熱惱す。

(四六) 若し王國中にある惡行を看過せば父祖たる諸天王に對して罪を得む。王業が作されざるはこれ子(たる道)にあらず。

【註】 諸寫本みな sādhyanādhika に作る。意義明かならず。今 s'parādhika とするものは推定なり。脚註に言及せず。加ふべし bhavane も推定なれどこれは取消す。各本 bhavate バリ本には bhaveta に作る。後者寧ろ可なり。これも脚註に加ふべし。

(四七) 甚しき諂僞によりても義務は滅びざるが故にその故に王は人

猶如父母　擁護其子
故令日月　五星諸宿
隨其分齊　不失常度
風雨隨時　無諸災禍
令國豐實　安樂熾盛
增益人民　諸天之衆
以是因緣　諸人王等
寧捨身命　不應爲惡
不應捨離　正法珍寶
由正法寶　世人受樂
常當親近　修正法者
聚集功德　莊嚴其身
於自眷屬　常知止足
當遠惡人　修治正法
安止衆生　於諸善法
敎勅防護　令離不善
是故國土　安隱豐樂
是王亦得　威德具足
隨諸人民　所行惡法
應當調伏　如法敎詔

住處に於て諸天王によりて加護せらる。

(四八) 惡行の鎭滅のために、善行を行ずる王は有情の中に現法者異熟生者なり。

(四九) 善惡業に就て異類各別なる作者は異熟果を示すために王と名けらる。天衆天王によりて加護せられ、隨喜せられたり。

(五〇) 自他のために又國土の正法のために、王國に於て諂僞の人々の調御のために、

(五一) 國土の正法のために生命と王位とを棄つべし。非法を知りつゝ尋問せずして看過する勿れ。

(五二) かの國中他に是の如き恐るべき滅亡あること無し。【32】そは諂僞と諂僞の災禍の治罰を看過して、

(五三) その國土に於て益々恐るべき諂僞あり。大池が象によつて(なさるゝ)如くその王國は蹂躙せらる。

(五四) 天帝は忿怒し、神々の住處は蹂躙せられ、國土の一切所有のもの

是王當得　好名善譽
善能攝護　安樂衆生

は荒亂すべし。

（五五）故に過惡をなすものに對し、過失に隨つて調御はあるべし。正法を以て國土を護るべし。非法を行はしむる勿れ。

（五六）生命を棄てゝも過惡に墮する勿れ。親族他人、及び一切の國人に於て、王は一邊なるべし。兩邊に墮する勿れ。

【註】ekâpekṣo は eka-pakṣo と訂正。

（五七）正法の王は稱譽を以て三界を充滿せしむ。又三十三天に於て天王は歡喜せむ。

（五八）是の如く閻浮洲に於てわれらの子なる正法の王は正法を以て國土を支配し、人を善行に住せしむ。

（五九）【133】王は此に善行によりて諸人を送り、諸天と天子によりて天の住處は充滿す。

（六〇）我等の王は歡喜して正法を以て國土を支配し、諸天帝は悅豫してかれら諸王を守護す。

(六一) 星宿は正しく動き、日月亦然り。 風は時を以て吹き、是の如く時を以て雨ふる。

(六二) 國土並に天の住處に豊饒あり。 天の住處は天と天子を以て充滿す。

(六三) 故に人主は愛する自己の生命を棄てゝ法寶を轉ずべし。 それによりて世間は安穩なるべし。

(六四) 功德を以て莊嚴せる彼は正法の奉仕をなすべし。 常に過惡を遠離せる彼は常に歡喜して奉仕す。

(六五) 正法によりて王國を守護し、正法に於て支配すべし。 諸有情を善行に立たしめ、惡行を遮止せしむ。

(六六) [134] 王國に於て豊饒あり。 王は威勢を具すべし。 宜に隨つて過惡のものに對して調御をなすべし。 王は聲譽を具して樂しく民人を守護すべしと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、天帝本誓と名くる王論品第十三。

善生品第十四 [135]

金光明經善集品第十二

爾時如來復爲地神、說往
昔因緣。而作偈言
我昔曾爲　轉輪聖王
捨四大地　及以大海
又於是時　以四天下
滿中珍寶　奉上諸佛
凡所布施　皆捨所重
不見可愛　而不捨者
於過去世　無數劫中
求正法故　常捨身命
又過去世　不可議劫
有佛世尊　名曰寶勝
其佛世尊　般涅槃後
時有聖王　名曰善集
於四天下　而得自在
治正之勢　盡大海際
其王有城　名水音尊

(一) 我れ轉輪王たりし時、海を含める大地は棄捨せられたり。寶を充滿せる四洲は過去の諸佛に施されたり。

(二) 其處に愛好する、意悅なるもの、曾てわが捨てざりしものはあることなし。多劫の間、かの法身を求めんがために愛する生命は捨てられたり。

(三) 過去不可思議劫に於て、寶髻なる善逝の國土に於て、かの善逝滅度の後善生と名くる王ありき。

(四) 彼は四洲に於て自在なる轉輪王なりき。海を邊際とせる大地は支配せられたり。勝者帝王音なる王城に於て、その時(かの)王最尊者は眠りたり。

(五) 夢の中に佛の功德を聞きて、[136] 寶集なる法師の、日輪の中に立て

於其城中　止住治化
夜睡夢中　聞佛功德
及見比丘　名曰寶冥
善能宣暢　如來正法
所謂金光　微妙經典
明如日中　悉能遍照
是轉輪王　夢是事已
卽尋覺寤　心喜遍身
卽出宮殿　至僧坊所
供養恭敬　諸大聖衆
問諸大德　是大衆中
頗有比丘　名曰寶冥
成就一切　諸功德不
爾時寶冥　在一窟中
安坐不動　思惟正念
讀誦如是　金光明經
時有比丘　卽將是王
至其所止　到寶冥所
時此寶冥　故在窟中
形貌殊特　威德熾盛

るが如く輝きつゝ、此の經王を宣說せるを見たり。

（六）王は夢より覺め、遍身喜悅を以て覆はれ、王家を出でゝ最上聲聞衆に往詣せり。

（七）勝者聲聞衆に供養をなし、寶集なる法師を問へり。何處にか此の聖衆中に於て、功德を具せる比丘、寶集なるものありや。

（八）その時、寶集比丘は他の窟の中に於て坐せり。種種寶なるこの經王を學びつゝ樂しく坐せり、

（九）その時、かの比丘は王に寶集法師を示せり。【137】彼は他の窟の中に光明妙相を以て輝きつゝ坐せり。

【註】唐譯に「時有苾芻引導王」とあり。梵文「かの比丘」とありて其の意義前後通じ難し。

（一〇）其處にこの寶集法師は甚深なる勝者の境界を持せり。常に金光明最勝帝王經寶を宣說せり。

（一一）善生王は寶集の足に禮して言へり。われに滿月輪なる金光明

卽示王言　是寶中者
卽是所問　寶冥比丘
能持甚深　諸佛所行
名金光明　諸經之王
時善集王　卽尊禮敬
寶冥比丘　作如是言
面如滿月　威德熾然
惟願爲我　敷演宣說
是金光明　諸經之王
時寶冥尊　卽受王請
許爲宣說　是金光明
三千大千　世界諸天
知當說法　悉生歡喜
於淨微妙　鮮絜之處
種々珍寶　厠塡其地
上妙香水　持用灑之
散諸好華　遍滿其處
王於是時　自敷法座
懸繒幡蓋　寶飾交絡
種々微妙　特殊末香

最勝帝王經を示したまへ。

(一二) 彼の善生王に對してかの寶集は許容せり。一切三千大千世界に於て一切諸天は歡喜せり。

(一三) その時、かの人王は最勝殊勝、最上の寶香水を灑ぎたる地の方處に於て、地に花を散じて其處に座を設け、

【註】 ratnâdake は ratne vare と讀むべし。

(一四) 【38】 王によりて、傘蓋、幢幡、多千の犍椎を以てその座は莊嚴せられたり。種種最上の花、栴檀を以て王はその座の上に散布せり。

(一五) 天、龍、阿脩羅、緊那羅、藥叉、藥叉王、摩睺羅伽は天の曼陀羅華の雨をかの座に雨ふらせり。

(一六) 來集せる不可思議尼由他(百千)の諸の最上欲天は寶集(の處)に往詣して沙羅の花を雨ふらしき。

(一七) 彼寶集法師も亦身を淨め、淨衣を纏ひ、其の座に往詣し合掌して禮拜せり。

悉以奉散　大法高座
一切諸天　龍及鬼神
摩睺羅伽　緊那羅等
卽雨天上　曼陀羅華
遍散法座　滿其處所
不可思議　百千萬億
那由他等　無量諸天
一時俱來　集說法所
是時寶冥　尋從宿出
諸天卽時　以娑羅華
供養奉散　寶冥比丘
是時寶冥　淨洗身體
著淨妙衣　至法座所
合掌敬禮　是法高座
一切天王　及諸天人
雨曼陀羅　大曼陀羅
摩訶曼殊　衆妙寶華
無量百千　種々妓樂
於虛空中　不鼓自鳴
寶冥比丘　能說法者

(一八)【139】諸の天主と天衆と天女とは曼陀羅華を雨ふらし、虛空に處して不可思議なる百千の樂器を奏せり。

(一九)彼の寶集なる法師比丘は、其の處に昇りて坐し、十方に於て不可思議千倶胝の諸佛を念じ、

(二〇)彼は一切有情に對し常に哀愍を生じ、悲心を起し、其の時、かの善生王に對ひこの經を說けり。

(二一)彼の王は合掌し、身口を以て隨喜し、その眼は正法の力もて雨淚し、その身は戰慄したり。

(二二)【140】其の時善生王はこの經典の供養のために、如意寶王を執りて、有情利樂のために願を發せり。

(二三)此に閻浮洲に於て今七寶を具せる嚴具は雨ふれ。誰にまれ此に閻浮洲に於てあらゆる有情は安樂大富ならむ。

(二四)其の時四洲に於て七寶と臂飾、最上の耳飾飲食と衣服とは雨ふれり。

尋上高座　結跏趺坐
卽念十方　不可思議
無量千億　諸佛世尊
於諸衆生　興大悲心
及善集王　所得王領
盡一日月　所照之處
時說法者　卽尋爲王
敷揚宣說　是妙經典
是時大王　爲聞法故
於比丘前　合掌而立
聞於正法　讚言善哉
其心悲悼　涕淚交流
尋復踊悅　心意熙怡
爲欲供養　此經典故
爾時卽提　如意珠王
爲諸衆生　發大誓願
願於今日　此閻浮提
悉雨無量　種々珍異
瑰琦七寶　及妙瓔珞
以是因緣　悉令無量

(二五) 善生王は閻浮洲に於てかの寶雨を見て、寶髻(佛)の遺教の中に寶の充滿せる四洲を與へたり。

(二六) 【41】われ釋迦牟尼如來は善生といへる王なりき。その王なる我によりてその時、寶の充てる四洲なる地は棄捨せられたり。

(二七) その時、この經を善生王に對して說ける寶集法師比丘はかの阿閦如來なりき。

(二八) 此の經典がその時曾てわれによりて聞かれ、唯一言隨喜せられたるそのわが善業によりて、聞法隨喜によりて、

(二九) 常に金色百福相なる、愛見なる、眼に樂しき、人によりて愛樂せらるゝ、千俱胝の天によりて喜ばるゝ、身を得べし。

(三〇) 九十九千俱胝劫の間、轉輪王たり。【42】多百千俱胝劫の間、我は三界の王位を享受せり。

(三一) 不可思議劫の間、或は釋羅、或は寂靜の意ある梵王となれり。我によりて無量(十)力(尊)は喜ばされり。其の量は竟に知られず。

一切衆生　皆受快樂
卽於爾時　尋雨七寶
及諸寶飾　天冠耳璫
種々瓔珞　甘饌寶座
悉皆充滿　遍四天下
時王善集　卽持如是
滿四天下　無量七寶
於寶勝佛　遺法之中
以用布施　供養三寶
爾時爲王　說法比丘
於今現在　阿閦佛是
時善集王　聽受法者
今則我身　釋迦文是
我於爾時　捨此大地
滿四天下　珍寶布施
得聞如是　金光明經
聞是經已　一稱善哉
以此善根　業因緣故
身得金色　百福莊嚴
常爲無量　百千萬億

【註】 balāprameyā を bala-aprameya に訂正。韻律のためなり。

（三二）我によりて經典が聞かれ、隨喜せられたる多くの福聚は無量なり。意趣に隨つて我は菩提を得たり。又正法身はわれによりて得られたりと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、善生品第十四。

衆生等類　之所樂見
既得見已　無有厭足
過去九十　九億千劫
常得作於　轉輪聖王
亦於無量　百千劫中
常得王領　諸小國土
不可思議　劫中常作
釋提桓因　及浄梵王
復得値遇　十力世尊
其數無量　不可稱計
所得功德　無量無邊
皆由聞經　及稱善哉
如我所願　成就菩提
正法之身　我今已得

金光明經鬼神品第十三

佛告功德天。若有善男子善女人。欲以不可思議妙供養具供養過去未來現在

藥叉護持品第十五【143】

時に世尊は吉祥大天女に告げて言へり。「吉祥大天女よ、信ある善男

諸佛世尊。及欲得知三世諸佛甚深行處。是人應當必定至心。隨有是經流布之處。若城邑村落舍宅空處、正念不亂。至心聽是微妙經典。

爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

若欲供養　一切諸佛
欲知三世　諸佛行處
應當往彼　城邑聚落
有是經處　至心聽受
是妙經典　不可思議
功德大海　無量無邊
能令一切　衆生解脫
度無量苦　諸有大海
是經甚深　初中後善

子、若くは善女子ありて、過去未來現在の諸佛世尊に種種の資具を以て不可思議廣大廣博なる供養をなさんと欲せむ。過去未來現在に安立せる諸佛世尊の甚深なる佛境界を了知せんと欲せむ。彼によりて決定して、其處に、地方、僧房、空閑處に於て、この金光明最勝帝王經は廣く開說せられむ。其の處に彼によりてこの金光明最勝帝王經は不散亂の心を以て、不遠離の耳を以て聽かるべきなり。」

時に世尊は尙多くの量を以てこの義を示しつゝ、偈を說いて云く、

【14】

(一) 一切の諸佛に對し、不可思議なる供養をなし、甚深なる佛境界を知らんと欲するものは、

【註】 prajanitum を prajānitum と訂正。

(二) この金光明最勝經を示すべき一切の方處、僧房、屋宅に往詣すべし。

(三) この經は不可思議にして、無邊の功德海なり。一切有情を多苦の海より解脫せしむ。

不可得說　譬喩爲比
假使恒沙　大地微塵
大海諸水　一切諸山
如是等物　不得爲喩
若入是經　卽入法性
如深法性　安住其中
卽於是典　金光明中
而得見我　釋迦牟尼
不可思議　阿僧祇劫
生天人中　常受快樂
以能信解　聽是經故
如是無量　不可思議
功德福聚　悉已得之
隨所至處　若百由旬
滿中盛火　應從中過
若至聚落　阿蘭若處
到法會所　至心聽受
聽是經故　惡夢蠱道
五星諸宿　變異災禍
一切惡事　消滅無餘

(四) 我は(この)帝王經の初中後を見る。極めて甚深なる經典に於て譬喩は知られず。

(五) 恒河の塵を以て、大地に於て、大海に於て、虛空に就て、何等比量はなし得られず。

(六) 甚深なる法身の塔が建てらるゝ所、法界に入りて其の時知らるべし。

(七) その塔中に微妙の音聲を以てこの經典を宣說せる勝者釋迦牟尼を見るべし。

(八) 【145】無數不可思議倶胝劫にも人天の樂は享受せらる。

(九) 人ありて其處に經を聽かむ時、彼は是の如き福聚を我れ得たりと知らむ。

(一〇) 一たびもこの經典を聞き得るものは極めて甚だしく痛苦を堪へ、火の滿ちたる坑坎を百由旬進み行くべし。

(一一) 住處屋宅に入るや否や、罪過と一切惡夢の相を離るべし。

於說法處　蓮華座上
說是經典　書寫讀誦
是說法者　若下法座
爾時大衆　猶見坐處
故有說者　或佛世尊
或見佛像　菩薩色像
普賢菩薩　文殊師利
彌勒大士　及諸形像
見如是等　種々事已
尋復滅盡　如前無異
成就如是　諸功德已
而爲諸佛　之所讃歎
威德相貌　無量無邊
有大名稱　能却怨家
他方盜賊　能令退散
勇捍多力　能破强敵
惡夢惱心　無量惡業
如是惡事　皆悉寂滅
若入軍陣　常能勝他
名聞流布　遍閻浮提

（一二）星宿の壓迫恐るべき壓鎮の障礙は、入るや否や、一切他に向ふべし。

（一三）龍王等によりて夢中に示されたる如き、是の如き蓮花の如き座を其の處に作るべし。

（一四）その座に着きてこの經典を開說すべし。書寫し、說話し、逮得すべし。

（一五）その座より下り、他の方處に行くべし。又其處にその座に行きたる神變を現ずべし。

【註】prati を prāti と訂正。

（一六）【146】或る時は法師の形せるものが見らるべし。或る時は佛の形、或る時は菩薩の形、

（一七）或る處には普賢の形、又は文殊の形、或る處には彌勒の形がその座の上に見らるべし。

（一八）或る處には光明のみ、或る處には天の示現、瞬時に現じてまた滅

亦能摧伏　一切怨敵
遠離諸惡　修習諸善
入陣得勝　心常歡喜
大梵天王　三十三天
護世四王　金剛密迹
鬼神諸王　散脂大將
禪那英鬼　及緊那羅
阿耨達龍　娑渴羅王
阿脩羅王　迦樓羅王
大辯天神　及功德天
如是上首　諸天神等
常當供養　是聽法者
生不思議　法塔之想
衆生見者　恭敬歡喜
諸天王等　亦各思惟
而相謂言　令是衆生
無量威德　皆悉成就
若能來至　是法會所
如是之人　成上善根
若有聽是　甚深經典

す。

（一九）一切の處に成就あり。佛の教は讃せられ、穀類吉祥を具し、戰鬪に於て勝利を齎らす。

（二〇）彼はこの閻浮洲一切を名譽を以て充たさむ。彼の一切の敵はすべて打ち克たれてあるべし。

（二一）常に敵は殺戮せられ、一切の過惡は遠離せられ、常に戰鬪に勝利あり、彼は吉祥を以て隨喜せむ。

（二二）梵王、三十三天主、及び護世者、金剛手、藥叉主、散惹耶、人中の牛主、

（二三）無熱龍王、娑伽羅龍王、[147]緊那羅主、天主、及び迦樓羅主、これらを上首として一切の諸天は、

（二四）彼等は常に不可思議の法塔を供養す。有情は見て歡喜し、恭敬すべし。

（二五）是の如く彼等一切最勝なる天主も亦思惟すべし。一切諸天も互に言ふべし。

故嚴出往　法會之處
心生不可　思議正信
供養恭敬　無上法塔
如是大悲　利益衆生
即是無量　深法寶器
能入甚深　無上法性
由以淨心　聽是經典
如是之人　悉已供養
過去無量　百千諸佛
以是善根　無量因緣
應當聽受　是金光明
如是衆生　當爲無量
諸天神王　之所愛護
大辯功德　護世四王
無量鬼神　及諸力士
晝夜精進　擁護四方
令無災禍　永離諸苦
釋提桓因　及日月天
閻摩羅王　風水諸神
違駄天神　及毘紐天

（二六）見よこれら一切勢力吉祥福德は集められたり。彼等の人々は此に植ゑられたる善根によりて來集せり。

（二七）この甚深なる經典を聽かんがために來集せるものは、不可思議の淨信を以て法塔を恭敬すべし。

（二八）世間に於てこれ大悲者なり。これ有情利樂者なり。これ甚深法の中に正法の食器なり。

（二九）入法界によりてこれに入り、この經典を聽き、他をして聽かしむる

（三〇）彼らによりてかれら過去百千の諸佛は供養せられたり。【48】これらの善根によりて彼等はこの經典を聽く。

（三一）彼等一切の天帝王、辯才天、吉祥天、毘沙門、四大王、

（三二）神通大力ある百千の藥叉によりて、晝夜休息なき(彼等)はその守

【註】「藥叉によりて」と具格なるより見るに、「守護をなすべし」といふ語法と契合せず。恐らく梵文に脫落あるべし。唐譯はこの間に二頌あり。

大辯天神　及自在天
火神等神　大力勇猛
常護世間　晝夜不離
大力鬼王　那羅延等
摩醯首羅　二十八部
諸鬼神等　散脂爲首
百千鬼神　神足大力
擁護是等　令不怖畏
金剛密迹　大鬼神王
及其眷屬　五百徒黨
一切皆是　大菩薩等
亦悉擁護　聽是經者
摩尼跋陀　大鬼神王
富那跋陀　及金毘羅
阿羅婆帝　賓頭盧伽
黃頭大神　一一諸神
各有五百　眷屬鬼神
亦常擁護　聽是經者
質多斯那　阿脩羅王
及乾闥婆　那羅羅闍

護をなすべし。

(三三) 大力ある藥叉衆と倶に、那羅延、大自在並びに散惹耶を上首とせる他の二十八部衆は、

(三四) 神通大力ある百千の藥叉と倶に、一切の怖畏の中に彼等の守護をなすべし。

(三五) 金剛手なる藥叉主は、五百の藥叉、一切の菩薩と倶に、彼等の守護をなすべし。

(三六) 珠賢藥叉、並に滿賢(藥叉)金毘羅、阿吒薄迦、大力ある賓伽羅、

(三七) 一々の藥叉主は、五百の藥叉主に圍遶せられこの經を聽ける彼等の守護をなすべし。

(三八) [149] 採軍乾闥婆、勝者王、勝者牛王、珠頸、青頸、雨王、

(三九) 大食、大黑、金髮、半之迦(パンチカ)、羊足、大婆伽、

(四〇) 小渠、大守護、獼猴王、婆利、針毛、日友、寶髮、

(四一) 大渠、諾拘羅、栴檀欲中勝、那伽耶奈、雪山主、沙多山、

祁那娑婆　摩尼乾陀
及尼揵陀　主雨大神
大飲食神　摩訶伽吒
金色髮神　半祁鬼神
及半支羅　車鉢羅婆
有大威德　婆那利神
曇摩跋羅　摩竭婆羅
針髮鬼神　翳利蜜多
勤那翅奢　摩訶婆那
及軍陀遮　劍摩舍帝
復有大神　奢羅蜜帝
醯摩跋陀　薩多琦梨
多醯波醯　阿伽跋羅
支羅摩伽　央掘摩羅
如是等神　皆有無量
神足大力　常勤擁護
聽受如是　微妙經者
阿耨達龍　娑伽羅王
目眞隣王　伊羅鉢王
難陀龍王　跋難陀王

(四二) 彼等神通を具せる、大力勇ある一切は、この經典を聽く彼等の守護をなすべし。

(四三) 阿耨達龍王、娑竭羅、目眞鄰陀、翳羅波多、難陀、鄔波難陀兩(龍王)、

(四四) 神通大力ある百千の龍と倶に、一切怖畏より彼等の守護をなすべし。

(四五) 婆利、羅睺、那卒旨、珉摩質多羅、苫跋羅、【150】歡喜、大肩等、並に他の阿修羅王、

(四六) 神通大力ある百千の阿修羅と倶に、怖畏に墮することより彼等の守護をすべし。

(四七) 衆生の母なる訶梨帝は、五百の子と倶に、睡寤にある彼等の守護をなすべし。

【註】 Sapta-mātṛ-sthitāni ca は恐らくは Supta-jāgara-thāna ca とあるべきなり。 涼譯「若睡若寤」、唐譯「於彼人睡覺」とあり。

(四八) 旃荼、旃荼利迦、藥叉女旃稚迦、齒、出齒、奪一切衆生精氣、

有如是等　百千龍王
以大神力　常來擁護
聽是經者　晝夜不離
波利羅睺　阿脩羅王
毘摩質多　及以筏脂
睒摩利子　波訶梨子
佉羅騫陀　及以攤陀
是等皆是　阿脩羅王
有大神力　常來擁護
聽是經者　晝夜不離
訶利帝南　鬼子母等
及五百神　常來擁護
聽是經者　若睡若寤
旃陀旃陀　利大鬼神
女等鳩羅　鳩羅檀提
噉人精氣　如是等神
皆有大力　常勤擁護
十方世界　受持經者
大辯天等　無量天女
功德天等　各與眷屬

(四九) 神通あり、大力勇猛なるこれら一切に普ねく四方に彼等の守護をなすべし。
(五〇) 辯才天を上首とせる不思議なる諸の女神、吉祥天を上首とせる一切諸の女神、
(五一) 地神、果穀神、園林、樹、廟に住せる(神)、河神、
(五二) 彼等一切衆は歡喜の心を以て、この經典を愛する彼等の守護をなすべし。
(五三) 彼等有情は壽と色と力を得、吉祥、福德、威力、幸福を以て常に莊嚴すべし。
(五四) 【151】又かれら星宿の壓迫は一切鎭靜すべし。彼等一切の不吉なる惡夢は消滅すべし。
(五五) 甚深にして大力ある地神は金光明最勝帝王經の味を以て滿足し、
(五六) 六百八十萬由旬の間、地味によりて乃至、金剛の地面は增長すべ

地神堅牢　種植園林
果實大神　如是諸神
心生歡喜　悉來擁護
愛樂親近　是經典者
於諸衆生　增命色力
功德威貌　莊嚴倍常
五星諸宿　變異災怪
皆悉能滅　無有遺餘
夜臥惡夢　寤則憂悴
如是惡事　皆悉滅盡
地神大力　勢分甚深
是經力故　能變其味
如是大地　至金剛際
厚十六萬　八千由旬
其中氣味　無不遍有
悉令涌出　潤益衆生
是經力故　能令地味
悉出地上　厚百由旬
亦令諸天　大得精氣
充益身力　歡喜快樂

し。

(五七) この經を聞く力によりて、地面は滿百由旬、前方に退き上方に肥沃となるべし。

(五八) 十方に安立せる一切の神祇は金光明最勝帝王經の味を以て滿足し、

(五九) 精力を具し、最上となり、吉祥精進力を具し、安樂を以て歡喜し、種種の味を得べし。

(六〇) この經典の說かるゝ時この閻浮洲一切の處に果穀林神は歡喜すべし。

(六一) 穀物、蔬菜、種々の花、[152] 種種の果樹を普ねく生長せしめ、

(六二) 一切の果樹、園林を花咲かしめ、種種の香もて熏せしむ。

【註】 pramoditaには是の如き義なし。されど前後の關係より見るも、凉譯の「歡豫」唐譯の「芬馥」より見るも此の語は「熏ぜられたる」の義ならざるべからず、蓋しpramoditaの韻律的省約ならんか。

閻浮提內　所有諸神
心生歡喜　受樂無量
是經力故　諸天歡喜
百穀果實　皆悉滋茂
園苑叢林　其華開敷
香氣馝馚　充溢彌滿
百草樹木　生長端直
其體柔軟　無有斜戾
閻浮提內　所有龍女
其數無量　不可思議
心生歡喜　踊躍無量
在在處處　莊嚴華池
於其池中　生種種華
優鉢羅華　波頭摩華
拘物頭華　分陀利華
於自宮殿　除諸雲霧
令虛空中　無有塵翳
諸方清徹　淨潔明了
日王赫焰　放千光明
歡喜踊躍　照諸闇蔽

(六三) 種種の花、種種の果實を以て一切の草木を地面に生長せしむべし。

(六四) この一切閻浮洲に於て、不可思議なる龍女等は心歡喜して蓮池に行き、

(六五) 一切の蓮池に種種の紅蓮、黃蓮、靑蓮白蓮を生長せしむべし。

(六六) 其處に虛空は雲烟を離脫し、淸淨なり。塵翳を離脫して十方は明了なり。

【註】 dhūmi-'utar-jālinī-muktam に訂正。

(六七) 千光を具せる光網を以て照曜する日は甚深の光を以て歡喜して勵ますべし。

(六八) 閻浮檀金の宮殿の中に安立せる日帝の子はこの經典を以て滿足すべし。

(六九) 【133】歡喜せる日帝は閻浮洲に行き、無邊の光網を以て普ねく照

【註】 sūtrendriḥ は sūryendriḥ に訂正す。

閻浮檀金　以爲宮殿
止住其中　威德無量
日之天子　及以月天
聞是經故　精氣充實
是日天子　出閻浮提
心生歡喜　放於無量
光明明網　遍照諸方
即於出時　放大光網
開敷種種　諸池蓮華
閻浮提內　無量果實
隨時成熟　飽諸衆生
是時日月　所照殊勝
星宿正行　不失度數
風雨隨時　豐實熾盛
多饒財寶　無所乏少
是金光明　微妙經典
隨所流布　讀誦之處
其國土境　即得增益
如上所說　無量功德

曜すべし。

(七〇) 覺醒せしむる光網の激勵により、種種の蓮池を覆へる蓮花を開くべし。

(七一) この閻浮洲に於て、一切の處に、種種なる果穀藥草を正しく熟せしめ又かの地面を暖かならしむ。

【註】 taṃ を tāṃ に mahiṃ を mahīṃ に訂正。

(七二) 其の間に日月は殊妙に輝き、星宿、風雨は正しく運行す。

(七三) 一切閻浮洲は普ねく豐饒なるべく、この經のあるべき處、その國土は殊に然り。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、藥叉依止と名けらるる守護品第十五。

金光明經授記品第十四

爾時如來。將欲爲是信相菩薩及其二子銀相銀光。授阿耨多羅三藐三菩提記。是時卽有十千天子。威德熾王而爲上首。俱從忉利來至佛所。頂禮佛足却坐一面。爾時佛告信相菩薩。汝於來世。過無量無邊百千萬億不可稱計那由他劫。金照世界。當成阿耨多羅三藐三菩提。號金寶蓋山王如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊乃至是佛般涅槃。正法像

一萬天子授記品第十六【154】

是の如く語られし時、菩薩集會善家女神は世尊に白して言へり。「大德世尊よ、何の因、何の緣によりて如何なる善根を植ゑたる力によりて

【註】 kidṛśenô'pta-vīryeṇa と讀むべし。

作爲せられ、集成せられ最勝光焰威光王を上首とせるかれら一萬の天子は、今三十三天の天宮より聽法のために世尊の前に往詣し、これら三正士の菩薩授記を聞きて、覺に於て發心せるや。(卽ち世尊の授記したまふ)如くんば、この妙幢正士は未來世に於て、數を超過せる多無數俱胝百千劫を超過して、金照なる世界に於て、無上なる正等覺を證すべし。金寶藏傘蓋積と名くる如來應供正等覺者は世に於て出現すべし。明行足、善逝、世間解、無上士調御丈夫、天人師【155】佛、世尊なり。乃至かの世尊、金寶藏傘蓋積如來應供正等覺者の般涅槃の後、正法滅盡し、一切、一切

法皆滅盡已。長子銀相。當於是界次補佛處。世界爾時轉名淨幢。佛名閻浮檀金幢光照明如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調丈夫天人師佛世尊。乃至是佛般涅槃後。正法像法悉滅盡已。次子銀光。復於是後次補佛處。世界名字如本不異。佛號曰金光照如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。是十千天子。聞三大士得受記莂。復聞如是金光明經。聞已歡喜生殷重心。心無垢累如淨琉璃。清淨無礙猶如虛空。爾時如來知是十千天子善根成熟。即便與授菩提道記。汝等

處に教は滅盡せん時、かしこに銀幢と名くる童子あり。かの如來の處を補ひ、其處に離塵幢世界に於て、金閻浮幢金光と名くる如來應供正等覺者は世に於て出現すべし。乃至かの金閻浮幢金光如來應供正等覺者の般涅槃の後、一切、一切處に、教は滅盡せん時、かしこに銀光童子ありかの如來の處を補ひ、其處に離塵幢世界に於て、無上なる正等覺を證すべし。金百光明藏と名くる如來應供正等覺者は世に於て出現すべし明行足、善逝、世間解、無上士調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。彼等一切は今世尊によりて無上なる正等覺に於て授記せられたり。大德世尊よ、かれら最勝光焔威光王を上首とせる一萬の天子について、廣き菩薩行はあらざりき。【156】曾て六波羅蜜の中に修行せしことを聞かず。曾て兩眼、兩足、最上身支、愛妻、愛子、を棄捨せしを聞かず。曾て財富、金、穀、黄金珠玉、眞珠、金剛、琉璃、螺貝、寶石、珊瑚、金、銀、青玉の寶を棄捨せしを聞かず。曾て種種の食物、飲料、衣服、車乘、臥具、坐具、屋宅、宮殿、園苑、池沼を棄捨せしを聞かず。曾て種種象、牛、馬、奴婢を棄捨せしを聞かず。かれら他の多

天子。於當來世。過阿僧祇百千萬億那由他劫。於是世界。當成阿耨多羅三藐三菩提。同共一家一姓一名。號曰青目優鉢羅華香山如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。如是次第出現於世凡一萬佛。爾時道場菩提樹神。名等增益。白佛言。世尊。是十千天子。於忉利宮爲聽法故故來集此。云何如來便與授記。世尊。我未曾聞是諸天子修行具足六波羅蜜。亦未曾聞捨於手足頭目髓腦所愛妻子財寶穀帛金銀琉璃硨磲碼碯眞珠珊瑚珂貝璧玉。甘饌飲食衣服臥具。病瘦醫藥象馬車

【註】 tānyanekāni とあるを tāny anyāny anekāni と讀むべし。

倶胝尼由他百千の菩薩は、過去無數倶胝尼由他百千劫に於て、多無數倶胝尼由他百千の如來に對し、一切の資具を以て、多百千不可思議の供養を以て、供養をなすべし。一切の寶の施物を棄捨すべし。兩手兩足、兩眼、最上身支、愛妻、愛子の棄捨をなすべし。財富、金穀、黃金、珠玉、眞珠、琉璃、螺貝、寶石、珊瑚、金【157】銀の施物を棄捨し、食物、飲料、衣服、臥具、坐具屋宅、宮殿、園苑、樓臺、池沼、象、牛、馬、牝馬、奴婢の施物を棄捨し、曾て次第に六波羅蜜を成滿し、次第に六波羅蜜を成滿し已りて、多百千の快樂を享受し、乃至諸佛世尊より如來の名に於て授記を得べきなり。

乘。殿堂屋宅園林泉池奴婢僕使。如餘無量百千菩薩。以種種資生供養之具恭敬供養過去無量百千萬億那由他等諸佛世尊。如是菩薩於未來世。亦捨無量所重之物頭目髓腦所愛妻子財寶穀帛乃至僕使。次第修行。成就具足六波羅蜜。成就是已備修行動經無量無邊劫數。然後方得受菩提記。

世尊。是天子等何因何緣修行何等勝妙善根。從彼天來暫得聞法便得受記。惟願世尊。爲我解說斷我疑網。

「大德世尊よ、何の因、何の緣によりて、又如何なる善根を植ゑたる力によりて、かれら最勝光焰威光王を上首とせる一萬の天子は、此に聽法のために世尊の前に往詣し、かれらは今世尊によりて無上なる正等覺に於て授記せられしや。即ち(世尊の授記したまふ如くんば)、未來の世に於て、多無數俱胝尼由他百千劫を經て、其處に最上娑羅帝幢有世界に於て同一種姓、同一名號によりて次第に無上なる正等覺を證すべし。浄顔

爾時佛告樹神善女天。皆有因緣。有妙善根。以隨相修。何以故。以是天子於所住處捨五欲樂。故來聽是金光明經。既聞法已於是經中淨心殷重如說修行。復得聞此三大菩薩受於記莂。亦以過去本誓發心誓願因緣。是故我今皆與受記。於未來世。當成阿耨多羅三藐三菩提。

青蓮香積なる名を以て、十方に於て一萬の佛陀は世に出現すべし。明行足【158】善逝世間解、無上士調御丈夫、天人師、佛、世尊なり(とかく授記したまへり)。」

かく語られし時、世尊はかの菩薩集會善家女神に言へり。「善女神よ彼の因あり、彼の緣あり。彼の植ゑられたる善根あり。作爲の故に、集積の故に、かの最勝光焔威光王を上首とせる一萬の天子は、今三十三天の天宮より此に聽法のために往詣せり。彼等三正士のこの菩薩授記を聞き、聞くと同時に、善女神よ、この金光明最勝帝王經の前に、種種なる歡喜淨信を得たり。乃至離垢琉璃の如き清淨心を具足し、離垢廣博虛空の如き深淨信を具足し、又無量の福聚を攝取せり。乃至制底神よ、最

【註】「乃至制底神よ」の次より、「淸淨心を具足し」に至る若干句は重複に過ぎず。寧ろるべきもの。

勝光焔【159】威光王を上首とせる一萬の天子は聽くと同時に、この帝王經の前に、種種淨信を得たり。乃至離垢琉璃の如き淸淨心を具足し、乃

至授記地を得たり。
善女神よ、この聽法の善根積集によりて、本願力によりて、かれら最勝光焔威光王を上首とせる一萬の天子は今や無上なる正等覺に於て授記せられたり。亦善女神よ、何等か本願力なるや」と。
以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、一萬天子授記品第十六。

金光明經除病品第十五
佛告道場菩提樹神。善女天。諦聽。善持憶念。我當爲汝演說往昔誓願因緣過去無量不可思議阿僧祇劫。爾時有佛出現於世。名曰寶勝如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士

療病品第十七【60】

善家女神よ、往昔無數廣大不可思議無量(劫)の過去世に、時に其の時、寶髻と名くる如來、應供、正等覺者世に出現せり。明行足、善逝、世間解、無上士調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。又善家女神よ、時に彼の世尊、寶髻如來、應供正等覺者の般涅槃せし時、正法滅盡し、正法像似の轉現する時、天自在光と名くる王あり。正法に契ひ、法王にして、正法を以て國土を護り、非法を行せず。一切國土に住する有情にとりて父母の如し。

調御丈夫天人師佛世尊。善女天。爾時是佛般涅槃後正法滅已。於像法中有王。名曰天自在光王。修行正法如法治世。人民和順孝養父母。

是王國中有一長者名曰持水。善知醫方救諸病苦。方便巧知四大增損。善女天。爾時持水長者家中。後生一子名曰流水。體貌殊勝端正第一。形色微妙威德具足。受性聰敏善解諸論。種種技藝書疏算計無不通達。是時國內天降疫病。有無量百千諸衆生等。皆無免者。爲諸苦惱之所逼切。

善女天。爾時流水長者子

又善家女神よ、時にその時、天自在光王の國土に持醫と名くる長者ありき。【161】醫師にして、身體構成の原理に通曉し、八種の醫典を具足せり。又善家女神よ、時にその時、かの持醫長者に流水と名くる長者子生せり。美貌にして淨信あり、見るに堪へ、最上淨色ある蓮華を具足し、種種の論書に通じ、書法算法に明かに、一切の工巧に堪能なりき。又善家女神よ、時にその時、かの天自在光王の國土に多百千の有情種種の疾病に罹れり。種種なる病患に壓迫せられ、苦しき、鋭き、粗き、劇しき、不可意なる痛苦を受けたり。

【註】 原語 jatiṃdhara 涼唐譯の「持水」に當る。恐らく jalaṃdhara とありしならむ。

又善家女神よ、時にその時、かの流水長者は、かれら種種の疾病に罹り

見是無量百千衆生受諸苦惱故。爲是衆生生大悲心作是思惟。如是無量百千衆生受諸苦惱。我父長者雖善醫方能救諸苦方便巧知四大增損。年已衰邁老耄枯悴。皮緩面皺羸瘦顫掉。行來往反要因几杖。困頓疲乏不能至彼城邑聚落。而是無量百千衆生。復遇重病無能救者。我今當至大醫父所諮問治病醫方秘法諸莫知已。當至城邑聚落村舍。治諸衆生種種重病。悉令得脫無量諸苦。

時長者子思惟是已。卽至

種種なる病患に壓迫せられたる多百千の有情のために大悲心を生せり。これら多百千の有情は疾病に罹り、病患に壓迫せられ、今苦しき、鋭き、粗き、劇しき、不可意なる病苦を受けたり。【162】我が父なるかの持醫長者醫師は身體構成の原理に通曉し、八種の醫典を具足せるも、年老い衰へ、老邁にして、世路を越え、老齡に達し、老衰に到り、身うち顫へ、杖に倚りて在在處處、村邑、聚落、市城、王國部落を往詣す。これら種種の疾病に罹れる種種の病患に苦しめられたる多百千の有情を種種の病患より救はんがために、我れ今かの父持醫の許に往詣して療病の術を問尋す

【註】yaṃ nūnam aham は yannu nūnam aham の訛形なり。

【註】adhikauśalya は dhātu-kauśalya とすべきが如し。

べし。問尋せられたるその療病の術によりて、われは一切の村邑、聚落、市城、王國、部落に往詣すべし。往詣してかの疾病に罹り、病患に苦しめられたる多百千の有情を種種なる病患より救ふべし。

又善家女神よ、時にその時、流水長者子は、自己の父なる持醫長者の許

父所頭而著地。爲父作禮
叉手却住。以四大增損而
問於父。即說偈言。

云何當知　四大諸根
衰損代謝　而得諸病
云何當知　飲食時節
若食食已　身火不滅
云何當知　治風及熱
水過肺病　及以等分
何時動風　何時動熱
何時動水　以害衆生

時父長者　即以偈頌

に往けり。往きて自己の父なる持髻の兩足を頭を以て禮し、【163】合掌して一面に立てり。一面に立てる流水長者子は自己の父持髻長者にこれらの偈を以て療病の術を問へり。

(一) 如何なる時にこれら諸根は破壞せられ、體液は轉變し、諸の有身者に病患は生ずるや。

【註】 寫本みな lakṣante に作る。今 rujyante と推定。

(二) 又如何に時と非時に食を攝り、それによりて體内の火が身を損傷せず。安樂を得べきや。

【註】 kāle kāle「時時に」にても宜しけれども今 kāle 'kāle なる讀方に順ふ。

(三) 風と熱と痰と總集の具せる時、如何に療病はなされ、如何にして鎭靜に歸すべき。

(四) 如何なる時に風は怒り、如何なる時に熱は怒り、如何なる時に痰は怒り、それによりて人々は苦しめらるゝや。

時に持髻長者は流水長者子に對してこれらの偈を以て療病の術を

解說醫方　而答其子
三月是夏　三月是秋
三月是冬　三月是春
是十二月　三三而說
從如是數　一歲四時
若二二說　足滿六時
三三本攝　二二現時
隨是時節　消息飲食
是能益身　醫方所說
隨時歲中　諸根四大
代謝增損　令身得病
有善醫師　隨順四時
三月將養　調和六大
隨病飲食　及以湯藥
多風病者　夏則發動
其熱病者　秋則發動
等分病者　冬則發動
其肺病者　春則增劇
有風病者　夏則應服
肥膩鹹酢　及以熱食

知りて示せり。

(五)　三月間は雨季、三月間は秋期、又三月間は冬季、三月間は夏季と名けらる。

(六)　【164】是の如く實に月の次第あり。六季あり。一年十二箇月と知らる。飲食は是の如く消化す。かくて醫師は技巧と相傳を示すべきなり。

(七)　一年の節際に於て彼等諸根諸界は轉變す。諸根は轉變しつゝ、有身者に種種の病患あり。

(八)　其處に醫師にとりて、三月に四種(の季節)と、(一年の)節際に於て六季と六種の療病術、漸次に食物と藥草とは知らるべし。

(九)　雨季には風の增上が支配し、清明なる秋には熱の怒あり。かくて冬時には總集、夏季には痰の增上が支配す。

(一〇)　【165】雨季には滋潤、溫暖、鹹、酸の味、秋季には滋潤、寒、冷、冬時には寒、酸、滋潤、夏季には澁、溫暖、苦、

有熱病者　秋服冷甜
等分多服　甜酢肥膩
肺病春服　肥膩辛熱
飽食然後　則發肺病
於食消時　則發熱病
食消已後　則發風病
如是四大　隨三時發
風病羸損　補以酥膩
熱病下藥　服訶梨勒
等病應服　三種妙藥
所謂甜辛　及以酥膩
肺病應服　隨能吐藥
若風熱病　肺病等分
違時而發　應當任師
籌量隨病　飲食湯藥

善女天。爾時流水者長者子。問其父醫四大增損。因是得了一切醫方。時長者子知醫方已。遍至國內

（一一）食後には過多の痰怒り、消する時には過多の熱怒り、消して後には過多の熱怒り、消して後には過多の風怒る。　これ體液の三種の忿怒なり。

（一二）風の自性に對しては油膩の味を作れ。　熱の增長には下劑、總集には三德を具し、痰の變調時には變吐藥。

【註】此の一句は爛敗甚しく殆んど讀み得難し。　今推定して snigdhaṃ rasaṃ kury anilâtmakasya と讀む。　かくすれば西藏譯及び涼唐譯に契ふが如し。

（一三）風の過多なると、熱と總集と、痰の過多なるとは、節々に於て知らるべし。　時と、體液と、依止とに隨ひて、食物、飲料、藥草は示さるべしと。

【166】

時に流水長者子は、尋問せるこの是の如きの相により、療病術によりて、一切八支の醫方吠陀を知得せり。　善家女神よ、時にこの時流水長者子は天自在光王の國土に於て一切村邑、聚落、市城、王國部落に往詣して

城邑聚落。在在處處隨有衆生病苦者所。軟言慰喩作如是言。我是醫師我是醫師。善知方藥。今當爲汝療治救濟悉令除愈。善女天。爾時衆生聞長者子軟言慰喩許爲治病。心生歡喜踊躍無量。時有百千無量衆生。遇極重病。直聞是言。心歡喜故。種種所患卽得除差。平復如本氣力充實。善女天。復有無量百千衆生。病苦深重難除差者。卽共來至長者子所。時長者子。卽以妙藥授之令服。服已除差亦得平復。善女天。是長者子。於其國內治諸衆生所有病苦悉得除差

金光明經卷第三

種種の疾病に罹れる、種種の病患に苦しめられたる一切多百千の有情を慰諭せり。「恐るゝこと勿れ、我は醫師なり、我は醫師なりと、自己を宣せり。我れ汝等を種種の病患より解脫せしめむ」。善家女神よ、かの一切多倶胝尼由他百千の有情は、かの流水長者子の言へるこの此の如きの語を聞くと共に大歡喜を生じ、慰安を得、不可思議なる歡喜と喜悅を具足せり。時にその時、その喜によりて、種種の疾病に罹れる、種種の病患に苦しめられたるかれら多倶胝尼由他百千の有情は種種の病患より解脫せしめられ、[167]無病となり、病患を離れたり。かくて從前の如き勢力精進を具足せり。又善家女神よ、時にその時、種種の疾病に罹れる、種種の病患に苦しめられたる、かれら多倶胝尼由他百千の有情の中に、更に深く罹りしものありき、彼等一切は流水長者の方に往詣せり。

[註] krānta を krāntāḥ として段落とする。

往詣して、彼等種種の疾病に罹り、種種の病患に苦しめられたるものに對して彼は何等か(kiṃcit)種種の藥草を處理せり。かくてかれら王城

【註】 ya ca は yac ca とす。次の tat に係る。abhinirdiśanti は京都本に abhinirdiśati と單數に作れり。今これに順ふ。

に於て、一切彼等種種の疾病に罹り、種種の病患に苦しめられたる多倶胝尼由他百千の有情は流水長者子によりて種種の病患より解脱せしめられたりきと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、療病品第十七。

流水長者品第十八【168】

復善家女神よ、天自在光王の國土に於て、一切有情は流水長者子によりて、無病少惱にして從前の如き勢力ある身を具足せり。一切勢力の幸福を樂みき。彼等は遊戲せりき。經廻せりき。施物を與へたりき福を作しき。流水長者は大醫施と諸藥の療病者にして、決定現前の菩薩なるべきなり。一切八支醫術に通曉せりき。又かの流水長者子に

金光明經卷第四
北涼三藏法師曇無讖譯
金光明經流水長者子品第十六
佛告樹神。爾時流水長者子。於天自在光王國內。治一切衆生無量苦患已。

令其身體平復如本。受諸快樂。以病除故多設福業修行布施尊重恭敬是長者子。作如是言。善哉長者能大增長福德之事。能益衆生無量壽命。汝今眞是大醫之王。善治衆生無量重病。必是菩薩善解方藥善女天。時長者子。有妻名曰水空龍藏。而生二子一名水空。二名水藏。

時長者子將是二子。次第遊行城邑聚落。是後到一大空澤中。見諸虎狼狐犬鳥獸多食肉血。悉皆一向馳奔而去。時長者子作是念言。是諸禽獸何因緣故一向馳走。我當隨後逐而觀之。

水蓮藏と名づくる妻ありき。又善家女神よ、かの水蓮藏なる妻に二人の男子ありき。一を水空と云ひ一を水藏と云ふ。

時に又善家女神よ、流水長者子は、かの【19】二童子と共に、次第に村邑聚落、市城、王國、部落を經廻せり。時に善女神よ、他のある時その時に、流水長者子は、とある曠野森林に到れり。彼は見たり。其の間に肉食の狼、狐、鴉(等の)鳥類のその(一)方に走り、その曠野森林に於て曠野生なる池あり。それを見て彼は思へらく、何のためにこれら肉食の狼、狐、鴉等の鳥類はかの(一)方に走るや。彼は思へらく、今われかの肉食の狼、狐、鴉(等

時長者子遂便隨逐。見有一池其水枯涸。於其池中多有諸魚。時長者子見是魚已生大悲心。時有樹神示現半身。作如是言。善哉善哉。大善男子。此魚可愍汝可與水。是故號汝名爲流水。復有二緣名爲流水。一能流水。二能與水。汝今應當隨名定實。時長者子問樹神言。此魚頭數爲有幾所。樹神答言。其數具足滿十千。

善女天。爾時流水聞是數已。倍復增益生大悲心。善女天。時此空池爲日所曝唯少水在。是十千魚將

の)鳥類の走れるかの(一)方に往くべし。

時に又善家女神よ、流水長者は次第に經廻しつゝ、歩行しつゝ、かの曠野生なる池に到れり。其處に大池の中に一萬の魚は棲息せり。彼はかしこに多百の魚は水を【170】離れてあるを見たり。かくて彼は大悲心を生せり。其處に彼は半身を顯はせる女神を見たり。かの女神は流水長者子に告げて言へり「善きかな、善きかな善家男子よ、流水と名づけらるゝ汝は魚族に對して水を與へよ。二の因緣の故に流水と名づけらる。そは水を運ぶなり。されば自己の名稱の相應をなせ。」流水

【注】本文に二の因緣と云ふも單に udakaṃ vāhayati とあるのみ。涼唐譯の「流水」と「與水」の二義を擧げず。蓋し prayacchati ca の如き若干の脱文あるか。

の云く、「女神よ、幾何の魚ありや。」女神答へて云はく、「滿十千の魚あり。」

時に善家女神よ、流水長者子は尙一層最勝の悲心を生せり。時に又善家女神よ、かの時に、曠野生なる池には若干量の水殘存せりき。かの十千の魚族は死門に臨み、水に離れて輾轉せり。

大死門。四向宛轉。見是長者心生頼。隨是長者所至方面。隨逐瞻視目未曾捨。

是時長者馳趣四方。推求索水了不能得。便四顧望見有大樹尋取枝葉。還到池上與作陰涼。

作陰涼已復更推求是池中水本從何來。即出四向周遍求覓莫知水處。復更疾走遠至餘處。見一大河名曰水生。爾時復有諸餘惡人。爲捕此魚故。於上流懸險之處。決棄其水不令下過。然其決處懸險難補。

時に善家女神よ、流水長者子は四方に走れり。流水長者子の經廻せる【17】方處に於て十千の魚は流水に慈悲を求めたり。

【註】preksyante は pregyante と訂正すべし。

時に善家女神よ、流水長者子は四方に走れり。水を求めつゝ而も其處に水を得ず。四方を見たり。彼は遠からずして大樹の叢生せるを見、その樹を攀ぢて樹枝を剪りてかの池の方に往けり。往きてかの一萬の魚に對し、樹枝を以て涼しき蔭を造れり。

時に善家女神よ、流水長者子はかの池に對し、水の來現を覓めたり。何處よりか水の來現あるべき。四方に走りて而も水は得られず。彼は速疾にかの水流に隨ひ行けり。又善家女神よ、かの曠野生なる池に水來現と名づくる大河あり。それよりかの水の來現はあるなり。その時しもかの河はとある惡人によりて、かれら一萬の魚族(を得る)ためにそは河なりと見られざる場處なる大懸崖に於て落されたり。かく

許當修治經九十日。百千人功猶不能成。況我一身。

時長者子。速疾還反至大王所。頭面禮拜却住一面合掌向王說其因緣。作如是言。我爲大王國土人民治種種病。漸漸遊行至彼空澤。見有一池其水枯涸有十千魚爲日所曝。今日困厄將死不久。惟願大王借二十大象令得負水濟彼魚命。如我與諸病人壽命爾時大王卽勅大臣。速疾供給。爾時大臣奉王告勅語是長者。善哉大士。汝今自可至象廐中隨意選取

てかれら魚族に對してもはや何等水の來現はあらざるなり。彼はこれを見て思惟せり。この河は一千の人によりても、もとの如く水を通じ能はじ。何に況んや一人の我によりて通じ得んや。彼は路を轉せり。

時に善家女神よ、流水長者子は速疾に進みて、かの天自在光王の方に往けり。往きて天自在光王の兩足を頂禮して一面に坐せり。彼はこの事由を告げたり。「陛下の國土に於て一切有情の疾病は我によりて鎭められたり。かしこに其處に於て曠野生と名づけられたる池あり。かしこに一萬の魚族は水に離れ、日に焦されて住めり。陛下は我に二十頭の象を與へたまへ。かくて我は諸人に與へし如く彼等傍生族に命を與ふべし」と。天自在光王によりて宰相に對し命せられたり。[173]

【註】 dattam にて段落を附するを可とす。

「汝等大醫王に二十頭の象を與へよ」。宰相は言へり。「大士よ、象舍に往き、かくて二十頭の象を執受せよ。有情の利樂をなせ」。

利益衆生令得快樂。
是時流水及其二子。將二十大象。從治城人借索皮嚢。疾至彼河上流決處。盛水象負。馳疾弃還至空澤池。從象背上下其嚢水寫置池中。水遂彌滿還復如本。時長者子。於池四邊彷徉而行。是魚爾時亦復隨逐循岸而行。
時長者子。復作是念。是魚何緣隨我而行。是魚必爲飢火所惱。復欲從我求索飲食。我今當與。
善女天。爾時流水長者子

時に善家女神よ流水は自己の子なる水空、水藏と倶に、二十頭の象を執受し、象飼ひの前より百個の革嚢を執受して退けり。かしこに水來現と名づくる大河流れたり。其處に往きて、水を以てかの革嚢を充たし象背に水を載せて速疾にかの曠野生なる池の方へ往けり。往きてかの水を象背より下ろし、かの池の四方に水を充たし、四方を歩めり。流水の歩む所、其の方に一萬の魚は急ぎ行けり。

時に善家女神よ、流水は思へらく「何が【174】爲にこの一萬の魚族は我が在る方に急ぎ來るや。」かくて又思へらく「恐らくはこれらの魚族は飢火によりて苦しめられ、我が許に食物を求むるならむ。我は今食物を與へざるべからず」と。

【註】 yannūnam は yannu nūnam とあるべきなり。

時に善家女神よ、流水は自己の子水空に對して言へり。「善家男子よ

告其子言。汝取一象最大力者。速至家中啓父長者家中所有可食之物。乃至父母飮噉之分。及以妻子奴婢之分。一切聚集悉載象上急速來還。

爾時二子如父敎勅。乘最大象往至家中。白其祖父說如上事。

爾時二子。收取家中可食之物。載象背上疾還父所至空澤池。

時長者子見其子還。心生歡喜踊躍無量從子邊取飮食之物散著池中。與魚食已卽自思惟。我今已能與此魚食令其飽滿。未來之

最も力强き象に駕して己が家に往け。速疾に往きて祖父なる長者にかく言ふべし。此におゝ父よ、流水はかく語る。家に於て何にてもあれ、淸淨なる食あらば、父母、兄弟、姉妹、奴婢、僕使の分に至るまで、一切を一處に一團となし、水空の象背に載せて流水のために速疾に渡すべし。」

時に水空童子は象に駕し、速疾に走り行けり。自己の家の方に往けり。【175】往きてこの事由を前說の如く先づ祖父に告げたり。その一切

【註】 prakṛtaṃ を prakṛtiṃ と訂正。

は祖父によりて流水に渡されたり。

時に水空童子はその食物を象背に負はしめ、象に駕して曠野生なる池の方へ往けり。

時に流水は自己の子、水空の來れるを見て、歡喜し、滿足し、踊躍し、子の前より食物を執受し、切斷してかの池に投じたり。この食によりてかれら一萬の魚族は滿足せしめられたり。彼は復思へらく、われ聞く、往昔の時、森林處に比丘あり。大乘を保持しつゝかく言へり。死時、寶髻

世當施法食。復更思惟。曾聞過去空閑之處有一比丘讀誦大乘方等經典。其經中說。若有衆生臨命終時得聞寶勝如來名號卽生天上。我今當爲是十千魚解說甚深十二因緣、亦當稱說寶勝佛名。時閻浮提中有二種人。一者深信大乘方等。二者毀呰不生信樂時長者作是思惟。我今當入池水之中爲是諸魚說深妙法。思惟是已。卽便入水作如是言。南無過去寶勝如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。寶勝如來本往昔時。行菩薩道作是誓願。若有衆生。於十方界臨命終時聞我名者。

如來應供正等覺者の名號を聞かんものは善趣世界に生ずべしと。我

【註】 sugatau loke 又は saugatau loke と寫本にあり svarga loke なる推定は取消す。

れ彼の魚族に對して甚深なる【176】緣起法を示すべし。寶髻如來應供正等覺者の名號を聞かしむべし。其の時、かの閻浮洲に於て有情の二種の見ありき。あるものは大乘を信じ、あるものは毀呰せり。

時に復流水長者子は、この時兩足を膝に至るまでかの池に入れてかくの如く激勵の語を說けり。寶髻如來應供正等覺者に歸命す。往昔菩薩の行を行せし時、かくの如く誓願はありき。十方に於て誰にてもあれ死時にわが名號を聞かんものは、死して三十三天の會處に生ずべし。

當令是輩。即命終已。尋得上生三十三天。爾時流水復爲是魚。解說如是甚深妙法。所謂無明緣行。行緣識。識緣名色名色緣六入。六入緣觸。觸緣受。受緣愛。愛緣取取緣有。有緣生。生緣老死憂悲苦惱。善女天。爾時流水長者子及其二子。說是法已即共還家。

時に流水長者子はかれら傍生趣のものにこの法を示せり。曰く、これあるが故にこれ生ず。これ生せしが故にこれ生せり。曰く、無明の緣によりて行あり。行の緣によりて識あり。識の緣によりて名色あり。名色の緣によりて六處あり。[177]六處の緣によりて觸あり。觸の緣によりて受あり。受の緣によりて愛あり。愛の緣によりて取あり取の緣によりて有あり。有の緣によりて生あり。生の緣によりて老死憂悲苦惱の煩累あり。是の如くこの唯一大苦蘊の集あり。曰く、無明滅すれば行滅し、行滅すれば識滅し、識滅すれば名色滅し、名色滅すれば六處滅し、六處滅すれば觸滅し、觸滅すれば受滅し、受滅すれば愛滅し愛滅すれば取滅し、取滅すれば有滅し、有滅すれば生滅し、生滅すれば老死憂悲苦惱の煩累滅す。彼の唯一大苦蘊の滅あり。善家女神よ、その時かくの如く流水長者子は、かれら傍生趣のものに法話を語れり。水空水藏の二子と倶に復自の家に還れり。[178]

【註】 upāyāsā は upāyāso に訂正。

是長者子復於後時。賓客聚會醉酒而臥。爾時其地卒大震動。時十千魚同日命終。既命終已生忉利天既生天已作是思惟。我等以何善業因緣。得生於此忉利天中。復相謂言。我等先於閻浮提內。墮畜生中受於魚身。流水長者子與我等水及以飲食。復爲我等解說甚深十二因緣。並稱寶勝如來名號。以是因緣令我等輩得生此天。是故我等今當往至長者子所報恩供養。

爾時十千天子。從忉利天下閻浮提。至流水長者子大醫王家。時長者子在樓

かくて他の時、流水長者子は大祭會に列し、大祭會の酒に醉ひて牀に臥したり。時にその時大瑞相は出現せり。其の夜の過ぎし時、かれら

【註】 rātryāṃ atyayena を rātryā atyayena に訂正。

一萬の魚族は死して三十三天の會處に生せり。生せしや否や、かれらに是の如き思慮分別は生せり。「我等は誰の善業の因によりて三十三天に生せしや」。彼等は思へらく「我等はかの閻浮洲に於て一萬の魚族となれり。かゝる我等傍生趣のものは流水長者子によりて多くの水最上の食物を以て滿足せしめられたり。又甚深の緣起法は我等に示されたり。我等は寶髻如來應供正等覺者の名號を聞かしめられたりその善法の因緣によりて我等は天中に生じたり。我等今流水長者子

【註】 yannūnaṃ は yannu nūnaṃ とあるべきなり。

の許に往詣せむ。往詣してかれに供養をなすべきなり。」

時にかれら一萬の天子は三十三天に於て【179】隱沒して流水長者の家に立てり。その時かの流水長者は臥床に臥したり。かれら天子に

屋上露臥眠睡。是十千天子。以十千眞珠天妙瓔珞置其頭邊。復以十千置其足邊。復以十千置右脇邊。復以十千置左脇邊。雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華。積至于膝。作種種天樂出妙音聲。閻浮提中。有睡眠者皆悉覺。

是十千天子。於上空中飛騰遊行。於天自在光王國內。處處皆雨天妙蓮華。是諸天子復至本處空澤池所復雨天華。便從此沒還忉利宮。隨意自在受天五欲時閻浮提過是夜已。

天自在光王。問諸大臣。昨夜何緣。示現如是淨妙瑞相有大光明。大臣答言

よりて一萬の眞珠の瓔珞は頭邊に置かれたり。一萬の眞珠の瓔珞は足邊に置かれたり。一萬の眞珠の瓔珞は右脇に置かれたり。一萬の眞珠の瓔珞は左脇に置かれたり。家の中には膝に至るまで曼陀羅の華雨は雨ふれり。又天鼓は擊たれたり。これによりて一切閻浮洲は覺醒せしめられたり。その時流水長者は覺醒せり。

時にかれら一萬の天子は虛空を進めり。かれら天子は天自在光王の國土に於て、處處に曼陀羅の華雨を雨ふらしつゝ、かの曠野生なる池の方に往詣し、その池に於てかれらは曼陀羅の華を雨ふらしつゝ、かくて復隱沒して天處に【180】歸り去れり。かしこに五種の欲樂を樂しめり。遊戲せり。徘徊せり。大吉祥善妙の樂を享受せり。又閻浮洲に於て夜は輝かされたり。

時に天自在光王は諸大臣等に問へり。「今しも夜に於てこれらの瑞

【註】adya rātrau を西藏譯には mdaṅ-sum とせり。「昨夜」の意なり。

大王當知。忉利諸天於流水長者子家。雨四十千眞珠瓔珞及不可計曼陀羅華。王卽告臣。卿可往至彼長者家善言誘喩喚令使來。大臣受勅卽至其家。宣王敎令喚是長者。是時長者尋至王所。王問長者何緣示現如是瑞相。長者子言。我必定知是十千魚其命已終。時大王言。今可遣人審實是事。

相出現するは底事ぞや。」彼等は言へり。「王は當に知りたまふ(かの)流水長者子の四萬の眞珠瓔珞と雨ふりたる天の曼陀羅の華雨は出現せり。「王は言へり。「卿等は流水長者子を愛語を以て招くべし。」時にかれら諸大臣等は流水長者の家に往き、往きて流水長者に言へり。「天自在光王は卿を召す」。時に流水長者は大臣と倶に天自在光王の許に往き、往きて一面に坐せり。王は問へり。「流水よ、今しも夜に於て【182】かくの如き清淨なる瑞相の出現するはこれ底事と知らるべきや。」時に流水長者は天自在光王に言へり。「王よ、我れ決定して一萬の魚族の死せるを知る。」王の言く、「如何にして知るや。」流水言ふ「王よ、水空をして行かしめ、かの大池を驗せしめよ。かれら一萬の魚族は生くるや又は

【註】gaṇaka-mahā-mātya は西藏譯 mkar-mkhar に準ずれば占星大臣とすべきが如し。今姑らく涼唐譯に隨ふ。

【註】本文 praviśatu「入らしめよ」とあり。意義通ぜず。寧ろ pravicinotu と讀み、かく譯する方、唐譯の「驗虛實」に契ふ。

爾時流水。尋遣其子至彼池所。看是諸魚死活定實。爾時其子聞是語已。向於彼池既至池已。見其池中多有摩訶曼陀羅華。積聚成積。其中諸魚悉皆命終。見已卽還白其父言。彼諸魚等悉已命終。爾時流水知是事。已復至王所作如是言。是十千魚皆命終。王聞是已心生歡喜。

爾時世尊。告道場菩提樹神。善女天。欲知爾時流水長者子。今我身是。長子水空。今羅睺羅是。次

死せりや。」王は言へり。「かくあるべし。」

時に流水長者子は水空童子に言へり。「善家男子よ、曠野生なる池に行きて見よ。彼等一萬の魚は生くるや、又は死せりや。」時に水空童子は速疾にかの曠野生なる池の方に行き、行きて見たり。一萬の魚族は死し、又曼陀羅の大華雨を見、復還りて父に言へり。「彼等は死せり」と。時に流水長者子は水空童子よりこの語を聞きて天自在光王の【183】許に往き、この事由を告げたり。「王の知りたまふ、かれら一萬の魚族はすべて死して三十三天處に生せり。かれら天子等の威神によりて今しも夜に於てかくの如きの淸淨なる瑞相は出現せり。我が家に於て四萬の天の眞珠瓔珞と曼陀羅の華雨は雨ふれり。」時に王は歡喜し滿足し踊躍の心を生せり。

時に世尊は復菩薩集會なる善家女神に言へり。「善家女神よ、汝等は時にその時又天自在光と名づくる他の王ありしと思はむ。是の如く見るべからず。其の故は如何。執杖釋迦はその時天自在光王と名づ

子水藏。今阿難是。時十千魚者。今十千天子是。是故我今爲其投阿耨多羅三藐三菩提記。爾時樹神現半身者。今汝身是。

くる王なりしなり。又善家女神よ、時にその時持髻と名くる他の長者ありしと思はむ。是の如く見るべからず。其の故は如何。淨飯王はその時持髻と名づくる長者なりしなり。[183]又善家女神よ、汝は時にその時他の流水長者子ありしと思はむ。是の如く見るべからず。其の故は如何。われは時にその時、流水長者子なりしなり。又善家女神よ、汝は時にその時、他の流水の妻水蓮藏ありしと思はむ。是の如く見るべからず。其の故は如何。瞿波釋女は時にその時流水の妻水蓮藏なりしなり。睺羅跋陀羅は時にその時水空と名づくる子なりしなり。阿難陀は時にその時水藏と名づくる子なりしなり。又善家女神よ、汝は他に一萬の魚族ありしと思はむ。是の如く見るべからず。其の故は如何。彼等この最勝光焔威光王を上首とせる一萬の天子は、時にその時、一萬の魚族なりしなり。かれらはわれによりて水を以て食物を以て滿足せしめられ、甚深緣起の法は示されたり。[184]寶髻如來應供正等覺者の名號は聞かしめられたり。その善法の因によりて此に我が

前に來り、今無上正等覺に於て授記せられたり。極めて歡喜淨信欣悅あるによりて法の啓示を尊重するによりて、一切授記なる名號を得たり。又善家女神よ、汝は時にその時他の樹神ありしと思はむ。是の如く見るべからず。其の故は如何。善家女神よ、時にその時汝は樹神なりしなり。善家女神よ、この次第によりて是の如く知るべし。われによりて生死に輪廻せる多くの有情は覺に於て調熟せしめられたり。かれら總ては無上正等覺に於て授記地を得べきなりと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、流水魚族引導品第十八。

牝虎品第十九【185】

復善家女神よ、菩薩は他を利せんがために自身を捨つべし。其の因由如何。天に於て地に於て廣博、離垢、種種百種の功德あり、無礙智見の力を以て勇進し、百千の比丘に圍遶せられ、五種の眼を得、半遮羅の國土

金光明經捨身品第十七
爾時道場菩提樹神復白佛言。世尊。我聞世尊過去修行菩薩道時。具受無量

百千苦行。捐捨身命肉血骨髓。惟願世尊。少說往昔苦行因緣。爲利衆生受諸快樂。

に於て、國土遊行を行じつゝ、とある一の森林に到れり。其處に彼は青き、柔軟なる、紺青の草原の種種の花もて飾られたる地面を見たり。世尊は見て具壽阿難陀に告げて言へり。「阿難陀よ、此の地面は美はし。

【註】この原語各寫本共にみなbharaṇo 'yamに作る。校訂本のruciroとせるは固より推定のみ。今西藏譯のmdzes-paより考ふるにbhadro 'yamと推定するを至當とせんか。訛形bhaddoより終にbharaṇoの如き無意義なる語に轉ぜしならむ。

此に於て我等の法話の場處は設けらるべし。今や如來の座を設けよ」。

【註】asmiṃś câsmika-sthāna-niṣṭhāとあるは意義をなさず。asmiṃś câsmākaṃ kathā-sthānaṃと讀みて譯を作る。これ西藏譯に準據するものなり。

かくてかの世尊の命によりて座は設けられたり。設け已りて彼は世尊に白せり。「世尊よ、座は設けられたり。人中の最長者、最勝者よ、坐し

【註】「世尊よ」以下「死を離れたるものよ」までは恐らく偈頌の形なりしならむ。頌調爛敗到底原形に還元し難し。

たまへ。人々の利のために賚賜を與ふる、最勝なる、解脫せしむるもの

爾時世尊卽現神足。神足力故令此大地六種震動。於大講堂衆會之中。有七寶塔從地涌出。衆寶羅網彌覆其上。爾時大衆見是事已生希有心。爾時世尊卽從座起禮拜是塔。恭敬圍繞還就本座。爾時道場

よ。最勝不死の説話を説きたまへ。世尊よ、死を離れたるものよ。」時に世尊は其の座に着き比丘等に【186】告げて言へり。「比丘等よ、汝等は作甚難作者なる菩薩等の骨身を見んと欲するや。」

かくの如く語られし時、比丘等は世尊に白して言へり。

(一)諸仙の最勝者よ、時ぞ到れる。有情利樂の本質なる、無二離染者、無量功德依止者の骨身を我等の見得るやう、希くはそれを開きたまへ。

【註】これも各寫本共に偈と見做さざるが如し。頌調の爛敗は前註の如し。アールヤ調なるに似たり。

時に世尊は千輻輪を畫ける足面を以て、大なる新しき柔軟なる蓮花の如き手を以て、地の面を打ちたまへり。打ちたまへる瞬間に、地は六

【註】vyāhṛta は vyāhata と讀むべし。藏譯 bsnun-pa。

種に震動せり。摩尼黄金白銀變作の塔はそれより踊出せり。時に世

【註】manikena karajāta は mani-kanaka-rajata と讀むべし。パリー本然り。

尊は具壽阿難陀に告げて言へり。「阿難陀よ、この塔を開け。」時に尊者

菩提樹神白佛言。世尊。如來世雄出現於世。常爲一切之所恭敬。於諸衆生最勝最尊。何因緣故禮拜是塔。佛言。善女天。我本修行菩薩道時。我身舍利安止是塔。因由是身令我早成阿耨多羅三藐三菩提。爾時佛告尊者阿難。汝可開塔取中舍利示此大衆。是舍利者。乃是無量六波羅蜜功德所熏。爾時阿難。聞佛教勅即往塔所禮拜供養開其塔戶。見其塔中有七寶函。以手開函見其舍利色妙紅白。而白佛言。世尊。是中舍利其色紅白。佛告阿難汝可持來。

此是大士眞身舍利。爾時

阿難陀は世尊に聽從して塔を開けり。彼は其處に黃金を延べ、眞珠を以て覆はれたる黃金所成の篋を見たり。見て彼は世尊に白して言へり。「世尊よ、此に黃金所成の篋は保たる。」世尊は語れり。「これは七(重)なり。一切その篋を【187】開くべし。」彼はそれを開けり。彼は其處に雪(白)の蓮花の如き骨身を見たり。見て世尊に白して言へり。「世尊よ、骨身は見らる。」世尊は言へり。「阿難陀よ、大士の骨身を持ち來れ。」

時に具壽阿難陀は世尊佛陀に廻附せり。世尊は骨身を執り、衆の前

阿難卽擧寶函。還至佛所持以上佛。爾時佛告一切大衆。汝等今可禮是舍利此舍利者是戒定慧之所熏修甚難可得最上福田。爾時大衆聞是語已。心懷歡喜卽從座起。合掌敬禮大士舍利。

爾時世尊。欲爲大衆斷疑網故。說是舍利往昔因緣阿難。過去之世有王名曰摩訶羅陀。修行善法善治國土無有怨敵。時有三子端正微妙。形色殊特。威德第一。第一太子名曰摩訶波那羅。次子名曰摩訶

に置きて語れり。「これらの骨身は偉大最上の功德を生ずる、普ねく調御、禪定、忍辱を行ずる、堅固、忍耐、名譽を成就せる。且つ常恒に覺に於て慧を具せる、堅固忍耐者、不動慧者、常施離染者のものなり。」かくて世尊

【註】「これら」以下「ものなり」まで原形は恐らく偈頌なりしならむ。今還元し能はず。

は比丘等に告げて言へり。「比丘等よ、汝等は敬禮すべし。戒德に熏せられたる菩薩の骨身は最も遭ひ難く、見難く、福田の如し。」かくて彼等比丘等は合掌し、心恭敬して彼の骨身を頂禮せりき。

時に具壽阿難陀は合掌して世尊に白して言へり。「世尊は過去未來現在の一切世界に超出し、一切有情【183】の敬禮する所なり。何が故に如來はかくの如くこれらの骨身を敬禮したまふや。」時に世尊は具壽阿難陀に告げて言へり。「阿難陀よ、これらの骨身は禮拜せらるべきなり。其の故は如何。阿難陀よ、これら骨身によりて我は是の如く速かに無上なる正等覺を證得せり。阿難陀よ、往昔、過去世に多くの財穀車

提婆。小子名曰摩訶薩埵是三王子。於諸園林遊戲觀看。次第漸到一大竹林憩駕止息。第一王子作如是言。我於今日心甚怖懼。於是林中將無衰損第二王子復作是言。我於今日不自惜身。但離所愛心憂愁耳。第三王子復作是言我於今日獨無怖懼亦無愁惱。山中空寂神仙所讃。是處閑靜能令行人安隱受樂。

乘軍團を有せる、無礙勇邁者なる、大車と名づくる王ありき。かれに天子に比すべき三人の王子ありき。大響、大天、大有情これなり。時に王は遊觀のために園林に出行せり。又かれら王子はかの園林の景趣を樂み、又花を貪りて、此處に彼處に遊行しつゝ十二の大森林に入れり。

【註】 dvâdaśa を vaṃśa と讀めば「大竹林」にして涼唐譯に契ふ。

彼等進みし時、王子の從者等は王子に捨てられて互に進み行けり。彼

【註】 râja-kumârôtsṛṣṭâ の一句を前節に屬せしむ。

等(王子)は人なき大園林に於て、かの十二の森林に入れり、時に大響は二人の弟に言へり。「恐怖はわが心中に入れり。汝等は來れ。我等をし

【註】 âgacchata は âgacchataṃ に訂正。

て猛獸に自身を滅ぼさしむる勿れ」。大天は言へり。「我れに恐怖なし。されど愛人の別離の故に我れに二心は轉ず。」大有情は言へり。〔19〕

【註】 pravartate を pravartete と訂正。

(二) 聖者の讃嘆せる勝林に於てわが恐怖は此にあること無し。又憂

時諸王子說是語已。轉復前行見有一虎。適產七日而有七子。圍繞周匝飢餓窮悴。身體羸瘦命將欲絕第一王子。見是虎已。作如是言。怪哉此虎產來七日。七子圍繞不得求食。若爲飢逼必還噉子。第三王子言。此虎經常所食何物。第一王子言。
此虎唯食新熱肉血。

第三王子言。君等誰能與此虎食。第二王子言。此虎飢餓身體羸瘦。窮困頓乏餘命無幾。不容餘處爲其求食。設餘求者命必不

悲無し。最勝廣博の大義なる得あり。このわが心は華咲けり。

時にかれら王子は十二の森林の谿谷を經廻しつゝ、一牝虎の仔を產みて七日なるが、五仔に圍遶せられ、飢渴のために牽かれて極めて身衰へたるを見たり。見て大響は言へり。「あゝ哀れなるかな、この苦行女は仔を產みて六日若くは七日なるべし。今や食物を得ずして自己の仔を食ふべし。然らずんば飢のために死すべし。」大有情は言へり。「彼の苦行女の食は何ぞや。」大響は言へり。

(二) 肉と煖血の味に近くあるべきもの、これ此の世界に虎、多羅豹、熊、師子等の食物なりと知らる。

大天は言へり。「此にこの苦行女は身體飢渴のために衰へ、【190】餘命幾くも無く極めて力衰へたり。他の場處に於て食物を索むること能はず。誰人か彼の命を護るために自身を捨施するものぞ。」大響は言

【註】 alaṃ pāṇâ-'vaśeṣā を alpa-prāṇâ-'vaśeṣā と讀むべし。

濟誰能爲此不惜身命。第一王子言。一切難捨不過己身。第二王子言。我等今者以貪惜故。於此身命不能放捨。知慧薄少故於是事而生驚怖。若諸大士欲利益他。生大悲心爲衆生者。捨此身命不足爲難。

時諸王子心大愁憂。久住視之目未曾捨。作是觀已尋便離去。爾時第三王子。

へり。「あゝ自身の捨施は甚だ難し。」大有情は言へり。

(四) 身體に執著せる我等の如きにとりてはこの方便は難し。されど他の利を事とせる正士にとりては難きにあらず。

又言へり。

(五) かれら有情は大悲憐愍に入りて天上に又此に到るべし。他の生命と身體に於て心歡喜せるものは、自己の身を此に百倍となし不變となすべし。

【註】この一頌意義明かならず。校訂本を左の如く訂正。

krpā-karuṇam avatārya, sattvā divi cêha labhante;
sva-dehaṃ śataśa iha karonti nirvikalaṃ;
pramudita-mānasāḥ para-jīvita-śarīre.

これ寫本の形態を及ぶ限り保存し、且つ韻律を整理せる結果なり。尙ほ後勘を俟つ。

時にかれら王子等は極めて感動して「この牝虎はや」と、長き間瞬かずこれを眺めて經廻せり。かくて大有情は思へり。「今こそこの身を捨

作是念言。我今捨身時已到矣。
何以故。我從昔來多棄是身都無所爲。亦常愛護處之屋宅。又復供給衣服飲食臥具醫藥象馬車乘。隨時將養令無所乏而不知恩反生怨害。然復不免無常敗壞。復次是身不堅無所利益。可惡如賊猶若行厠。我於今日。當使此身作無上業。於生死海中作大橋梁。復次若捨此身。卽捨無量癰疽瘭疾百千怖畏。是身唯有大小便利。是身不堅如水上沫。是身不淨多諸蟲戶。是身可惡筋纒血塗。皮骨髓腦共相連持。如是觀察甚可患厭。是故我今應當捨離。以求

つべき時なれ。

蓋し、【191】

(六) 長くもこの汚穢なる身體は大なる價を以て、臥床、衣服、食物によりて得られたり。百の方便を作せる法にして、破壞を終極とし、無常にして、自性怨害を懷き、常に報恩を致さず。

【註】 この一頌爛敗殆んど讀み難し。藏譯亦解し難し。後半の部分を左の如く修正す。尙ほ後勘を俟つ。ghnuḥ は ghnaḥ の誤植。

śata-naya-kṛta-dharmo bhedânto anityo,
sada-vigata-pratikārāś ca svābhāva-vighnaḥ.

(七) 彼について一切生命(の價値)は有ること無し。中間に存在するが故にか。れに結合し、かれにまで老死の海を超出する船の如くならむ。

又(言く)、

(八) 我は蛆蟲の如き、百生を荷負する、糞尿に充滿せる、不堅實なること泡沫の如き、百の蟲を有する、義務を作したる身を棄て、

寂滅無上涅槃。永離憂患無常變異。生死休息無諸塵累。無量禪定智慧功德。具足成就微妙法身。百福莊嚴諸佛所讚。證成如是無上法身。與諸衆生無量法樂。

是時王子勇猛堪任。作是大願。以上大悲熏修其心。慮其二兄心懷怖懼。或恐固遮爲作留難。卽便語言。兄等今者可與眷屬還其所止。

爾時王子摩訶薩埵。還至虎所脫身衣裳置竹枝上。作是誓言。我今爲利諸衆生故。證於最勝無上道故。大悲不動捨離捨故。爲求菩提智所讚故。欲度三有諸衆生故。欲滅生死

【註】 viṣṭa は viṣṭhā の誤植。

(九) 憂悲なき、不變なる、支持なき、無垢なる、禪定智慧等の功德に充ちた

【註】 nirpadhim の意義明かならず。今姑らくこの譯語を擬し、後勘を俟つ。

る、【192】百の功德に充ちたる、極清淨法身を得べし。

是の如く決心せる彼は最上悲愍上行の心を以て彼等二人の除去をなせり。「今や卿等二人は去るべし。我は自己の作すべきことのために十二の森林に入るべきなり。」

時にかの大有情はその林より出で丶牝虎の住處に往き、林中蔓草の上に上衣を懸け、誓願を作して曰く、

「かくの如き我は有情の利のために無上安隱の覺を證すべし。心傾動せざる我は大悲憐愍の故に他の捨て難しとする身を與ふべし。かくてわが覺は患無く、勝者子に尊敬せられ、熱惱なけむ。我は恐る

怖畏熱惱故。

是時王子作是誓已。卽自放身臥餓虎前。是時王子以大悲力故虎無能爲。王子復作如是念言。虎今羸瘦身無勢力。不能得我身血肉食。卽起求刀周遍求之了不能得。卽以乾竹刺頸出血。於高山上投身虎前。是時大地六種震動。日無精光如羅睺羅阿修羅王捉持障蔽。又雨雜華種種妙香。時虛空中有諸餘天。見是事已心生歡喜歎

べき諸有の海より三界の衆生を超度せしめむ。」

【註】 校訂本に散文とす。されどこれ偈なり。若干の修正を加へて左に出す。

eso haṃ jagato hitârthaṃ atulāṃ bodhiṃ vibudhye śivāṃ
kāruṇyāt pradadāmi niścala-matir dehaṃ parair dustyajam,
tan me bodhir anāmayā jinasutair abhyarcitā nirjvalā
trailokyaṃ bhava-sāgarāt pratibhayād uttārayeyam hy aham.

かくて其の時大有情は牝虎に面して身を投せり。その時牝虎は慈を有せる菩薩に對して何等爲す所なかりき。かくてかの菩薩は「こは力なくなれるなり」とて、起ちて刀刃を求めたり。(されど)悲心あるものは何處にも刀刃を得ざりき。

【註】 durbalā-varto'yam を durbalā-vartêyam と訂正。

彼は極めて力强き百歳の竹幹を執り、それを以て自己の喉に突き立て、牝虎の側に【193】投じたり。

【註】 sva-valam は sva galam に訂正。

菩薩の投せしや否や、この大地は水中に行路を失ひたる船の如くなりて六種に震動せり。日光は羅睺に蝕せられたるが如く輝かず、天の香粉を雜へた

未曾有。讃言。善哉善哉。大士。汝今眞是行大悲者。爲衆生故難捨能捨。於諸學人第一勇健。汝已爲得諸佛所讃常樂住處。不久當證無惱無熱清淨涅槃。是虎爾時見血流出汚王子身。卽便舐血噉食其肉唯留餘骨。

爾時第一王子見地大動。爲第二王子而說偈言

震動大地　及以大海
日無精光　如有覆蔽
於上虛空　雨諸華香
必是我弟　捨所愛身

第二王子復說偈言

る華雨は墜ちたり。時に驚嘆し、喪心せるとある天は菩薩を讃じて言へり。

(一〇) 汝の大悲が此に諸有情の中に弘まるが如く、汝が歡喜してその身を捨てたるが如く、汝は此に久しからずして安隱最勝なる老死の

【注】 janana を jarana に訂正。

事を離れたる、厄難なき、寂靜なる、清淨なる住處を得べし。

時にかの牝虎は血に塗れたる菩薩の身を見て、その時(それを)血肉なき骨のみを殘せるものとなせり。

時に大響はかの大地震動を知りて大天に言へり。

(一一) 海を含めるこの大地は十方に於て海うち震ひ、日は光なく、華雨は落ち、わが心は亂る。わが小弟は今や此れ自身を捨てたり。【194】

【注】 vasumati を次の語より分離すべし。

大天は言へり。

(一二) 彼の自己の子を食はんと焦燥せる、飢に逼れる、百の危難を具せ

彼虎産來　已經七日
七子圍繞　窮無飲食
氣力羸損　命不云遠
小弟大悲　知共窮悴
懼不堪忍　還食其子
恐定捨身　以救彼命

時二王子心大愁怖。涕泣悲歎容貌憔悴。復共相將還至虎所。見弟所著被服衣裳。皆悉在一竹枝之上骸骨髮爪布散狼藉。流血處々遍汚共地。見已悶絶不自勝持。投身骨上良久乃蘇。即起擧首號天而哭我弟幼稚才能過人。特爲父母之所愛念。奄忽捨身以飼餓虎。我今還宮。父母說問當云何答。我寧在此併命一處。不忍見是骸骨髮爪。何心捨離還見父母

る(牝虎)を見て、彼は大悲の語を宣べしが故に、此にわが心弱くなり疑を有す。

時に彼等二王子は甚しき憂愁に壓せられ、眼は涙に充ち、かの路を轉反して行き、牝虎の側に行けり。彼等二人は百(歳)の竹幹にかゝれる上衣と血の汚ある黑白の骨とを見たり。諸方に毛髮の散亂せるを見て

【註】 kṛṣṇa-vikṛṣṇāni は意義明かならず。恐らくは kirṇâkirṇāni「散亂せる」の寫誤ならむ。

彼等二人は地面に於て悶絶して仆れたり。久しくありて意識を回復し、起ち上り、臂を擧げ、悲哀の聲を出せり。

(一三) あゝ愛する同胞よ、かの老いたる子をもてる(父)王とかの母(后)は【195】尋ぬるならむ。蓮花の如き長き眼もてる汝等の第三(子)は何處にありや。

【註】 tathā janani を tathā jananī に訂正。

妻子眷屬朋友知識。

時二王子悲號懊惱漸捨而去。時小王子所將侍從。各散諸方互相謂言。今者我天爲何所在。爾時王妃於睡中夢。夢乳被割牙齒墮落。得三鴿鶵一爲鷹食爾時王妃。大地動時卽便驚寤。心生愁怖而說偈言

今日何故　大地大水
一切皆動　物不安所
日無精光　如有翳蔽
我心憂苦　目瞼瞤動
如我今者　所見瑞相
必有災異　不祥苦惱

於是王妃說是偈已。時有青衣在外已聞王子消息。

(一四) おゝ此の場處に於て我等の死は用意されたるならずや。生命あることなし。大有情なくして爭で我等は阿母阿父を見るべき。

時に二人の王子は種種悲歎して進み行けり。かしこに王子の從者は諸方を走りつゝ王子を求め互に相見て尋ねて言へり。「王子は何處ぞ。王子は何處ぞ。」と。又その時、夫人は臥床にありて愛子との別離を前徵する夢を見たり。卽ち兩乳房斬られ、齒落ち、三鴿の仔捉へられかくて鷹に裂かれつゝ彼等は怖畏せり。時に夫人は地の震動より心怖れて突如として目覺め、心偏へに憂慮せり。

(一五) この(五)大の依處なる海の衣着けし(大地)は如何ぞ大に震ふや。

[196] 鎗をもてる日は光なく、又わが乳房は甚しくうち慄ふ。彼等は我れに心痛をなす。又身體兩眼うち顫へ、自の乳房は切られたり。かの林窟に遊觀のために行きしわが子等の平安はあれかし。

[註] kuca bhūbhujaṃ vayati vā は kuca bhṛśaṃ vepati tha vā と訂正すべし。脚註 bhujaṃ は bhṛśaṃ の誤植。

心驚惶怖尋卽入內。啓白王妃作如是言。向者在外聞諸徒從推覓王子不知所在。王妃聞已生大憂惱。涕泣滿目至大王所。我於向者傳聞外人。失我最小所愛之子。大王聞已而復悶絕。悲哽苦惱拭淚而言如何今日失我心中所愛重者。

時にかく憂慮しつゝある夫人に對し、心怖れたる侍女は入りて白せり。「夫人よ、王子の從者たちは王子を求めたり。そは亡せぬと聞かれたり。」その時夫人は子の死せるを聞き、心動轉し、その面と眼は涙に亂れ、王の所に行きて言へり。「王よわが愛子は亡せぬと聞かれたり。」王も亦心動轉し、甚しく憂慮を生せり。「あゝ哀しきかな、われは愛子に別れたるか。」されど王は夫人を慰めて言へり。「夫人よ、子のために憂ひざれ。我等は王子の捜索を始めむ。」かしこに王子の捜索に急ぐ人衆

【註】kumârânveṣaṇô'palabhantaḥ を kumârânveṣaṇam ârabhante と訂正。

が事に從ふや否や、その時久しからずして王は遠くより二王子の來るを見たり。見て王は言へり。「かれら二人の王子は得られたり。」されど總てにはあらず。あゝ如何にせん。子との別離はや。」

(一六) 彼はあらず。我は得ず。かくて人の喜なし。[197]子に別れて甚しき憂苦あり。子を有するものには最上の幸福あり。子の生命なき時彼等は死せむ。

時に夫人は甚しく悲しみ、急所を搏たれし牝象の如く、悲哀の聲を擧げて言へり。

（一七）從者と倶なる三子が花咲き亂るゝ林に入りしとせば、何處にかの心に等しき無等の第三子はあるや。最少の麗はしき我子は歸らず

【註】 yadi は西藏譯の de-ltar に照すに yatu (=yatas) なるが如し。yasya bhrtya は yaḥ sa-bhrtya と訂正。 又 samo samas は samo 'samas と讀む。

【註】 脚註の推定讀方を採る。 原文の意義明かならず。

彼等二人の來れる時、憂慮せる王は二人の王子に尋ねて言へり。「最小の子は何處ぞや」と。 その時二人は憂悲してその眼涙に充たされ、顎唇齒顏面憔悴して一言をも言はず。 夫人は言へり。

（一八）速かに語れ、正念は喪失し、身は極めて苦しむ。 わが第三子は何處にかある。 この胸は裂け、又失神す。【198】

時にかの二人は王子はかの事緣の始終を廣く告げたり。 聞くと倶に王と夫人と從者等は失神せり。 蘇するを得て悲の聲を擧げて泣き

つゝ彼の方へ行けり。　時に王と夫人は血肉に塗れたるかの骨と、風につれて諸方に散亂せる毛髪を見て、樹の切り仆されたるが如く地上に倒れたり。　その時王臣はこの狀態を見、水と摩羅耶の栴檀泥を以て久しく王と夫人の身を看護せり。　時に久しくして意識を回復して王は起ち上り悲歎して泣けり。

（一九）あゝ哀しきかな、愛すべき意悅にして見るに堪へたる王子は何の故に早くも死に趣きしや。　死神よ、何故に前に我れに來らざる。さらばこの苦は我が上にあらざるべし。

【註】この頌の後半意義明かならず。義淨譯、西藏譯によりて推定して此の譯を作る。原形恐らくは次の如きものなりしならむ。

mṛtyo kva prāg eva na c'gato me,
yathā na me bhesyati duḥkham etat.

夫人は失神より蘇して髪を亂し、兩臂もて胸を打ち、陸上に跳れる魚の如く地面に輾轉しつゝ、仔を失へる水牛、【仔を失へる牝象】の如く、悲

歎して泣けり。【199】

【註】 水牛と牝象を重ねたるは怪むべし。孰れかは後人の加筆ならむ。

(二〇) あゝ愛するものよ、愛し子よ、何故に汝は死せしぞ。餘骨は地面に於て散亂せり。如何なる敵によりて眼美はしく月の如き我が子は今日地上に殺されしぞ。あゝ如何に今日此に樂しむべき眼をもてる身なる最上の子の地上に横はれるを見ることよ。

【註】 この頌より以下二二頌に至る三頌は爛敗甚しく、殆んど讀み得難し。又その韻律も知り得難し。此に假に譯文を擧ぐるも、決定的のものに非ず。後日の考勘に俟つ。pedmo は原寫本 dharmo に作る。義淨譯によるに ayaṃ dharmo と合してこれは asthyavaśeṣo の如き語なりしならむ。

【註】 na yāti bhagnaṃ は寫本に nayanâbhirāmaṃ となす。これを採るべし。脚註には誤植あり。

(二一) (この)苦難に遭ひてこの我が心苦し破壞せざらんには鐵なることと明けし。あゝ夢の結果なるこれは惡なり。そは夢中に今日この

兩乳房は何等かの刀刃を以て斷たれ、齒は引き拔かれ、かくて速かに我が愛子は失はれたり。

(二二) 恰も此に我が(夢に)得られたる三鴿子の中に彼は鷹によりて捉へ去られし如く三子によりて圍まれし我のかの一(子)は今日死神に殺されたり。

時に王と夫人とは種種悲歎して泣き、[200]彼等の裝飾を解き、衆人と共に子の骨身供養をなし、その地方に於て黃金所成の塔中にその骨身を安置せり。

時に復阿難陀よ、汝は時にその時、他の大有情ありしと思はむ。是の如く見るべからず。其の故は如何。我は時にその時かの大有情なる王子にてありしなり。阿難陀よ、その時われ貪瞋癡を捨てざりしも、哀愍によりて世間は地獄等の苦より攝受せられたり。如何に況んや今一切の過を離れたる無上正等覺者なるに於てをや。是の如く一々の有情のために、一劫波を準備し、地獄に生じ、生死より解脫せしめむ。蓋

爾時世尊欲重宣此義。而
說偈言。
我於往昔　無量劫中
捨所重身　以求菩提
若爲國王　及作王子
常捨難捨　以求菩提
我念宿命　有大國王
其王名曰　摩訶羅陀
是王有子　能大布施
其子名曰　摩訶薩埵
復有二兄　長者名曰
大波那羅　次名大天
三人同遊　至一空山
見新產虎　餓窮無食
時勝大士　生大悲心
我今當捨　所重之身
此虎或爲　飢餓所逼

し是の如く有情堅固者によりて世間は攝受せられ、多くの種種なる難事は(行せられたり)と。

時に世尊はその時偈を說いて言へり。

(二三) 多劫の間、われこの最上覺を求めつゝ捨身をなせり。汝が王にてあり、王子にてある如く、是の如く我によりて身は捨てられたり。[201]

(二四) 我は記す。過去生に於て大車と名くる王ありき。彼に王子あり。大施の性あり。その名を大有情と云ひ、最上者なり。

(二五) 時に彼に二人の兄あり。名を大天、大響と云ふ。叢林に行き、彼等三兄弟は飢餓に苦しめる牝虎を見たり。

(二六) 彼の最上有情に悲愍の心は生ぜり。我は今自身と肉を捨つべし。蓋し此に飢渴に苦しめる牝虎あり。これらの自生の子を食はんとせり。

【註】 yan nūnam とあるは yan-nū nūnam の訛形にしてパーリ語にては常の如し。但し純梵語には非ず。

儻能還食　自所生子
即上高山　自投虎前
爲令虎子　得全性命
是時大地　及諸大山
皆悉震動　驚諸蟲獸
虎狼師子　四散馳走
世間皆闇　無有光明
是時二兄　故在竹林
心懷憂惱　愁苦涕泣
漸漸推求　遂至虎所
見虎虎子　血汚其口
又見骸骨　髮毛爪齒
處處迸血　狼藉在地
時二王子　見是事已
心更悶絶　自躄於地
以灰塵土　自坌全身
忘失正念　生狂癡心
所將侍從　覩見是事
亦生悲慟　失聲號哭
互以冷水　共相噴灑

(二七) その時、彼大車の子なる大有情は飢に苦しめる牝虎を見、牝虎の子を救はんが爲に(身を)投じたり。[202]

(二八) 大悲者の(身を)投せし時、かの山と地はうち震ひ、種種の鳥群は恐怖し、その時獸の群は恐怖し、この世界は混亂せり。

(二九) 彼の二人の兄弟、大響と大天とは其處にその大林に於て大有情を見て、得ず。

(三〇) 甚しき悲の箭に貫かれし心もて想念なく森林に行けり。彼等は兄弟を推求し、涙の顏もて林中に行けり。

(三一) 二人の王子、大響と大天とはかくて力なき牝虎とその仔の横はれる所に行きて、

(三二) 血に塗みれたる身體[203]毛髮骨皮のみ地上に散亂し墜落せるを見て、何等かの量なる、その地上に落ちたるを見たり。

[註] 「何等」以下の句は原文恐らく爛敗のために變形せるが如し。還元し能はず。

(三三) 彼等二人の王子は悶絶して其處に地上に仆れたり。意識を喪

然後蘇息　而復得起
是時王子　當捨身時
正値後宮　妃后婇女
眷屬五百　共相娯樂
王妃是時　兩乳汁出
一切肢節　痛如針刺
心生愁惱　似喪愛子
於是王妃　疾至王所
其聲微細　悲泣而言
大王今當　諦聽諦聽
憂愁盛火　今來燒我
我今二乳　倶時汁出
身體苦切　如被針刺
我見如是　不祥瑞相
恐更不復　見所愛子
今以身命　奉上大王
願速遣人　求覓我子
夢三鴿鶵　在我懐抱
其最小者　可適我心
有鷹飛來　奪我而去

ひ、すべて蒼白となり、身體は塵に塗みれたり。根は正念を失ひ、心は正氣を離れたり。

(三四) 又彼等人々は悲聲號泣し憂に亂されて、兩臂を擧げ、泣きつゝ水を灑ぎたり。

(三五) (菩薩の)身を投じたる時しも、愛子に離れたる第一夫人は五百の婇女と共に王宮の中に在りて、その身安樂なるが、

(三六) かの兩乳房より乳出で、勢を以て流れ。[204] 彼女の一切身支は針もて刺されつゝ、

【註】「五百の」は各寫本に缺く。paśyati とあるもの其の寫誤なるべし。prasravatyā vegaiḥ は prasravaty āvegaiḥ とすべし。

(三七) 心は甚しき悲に搖れ動き、子に離れたる憂悲の箭に貫かれ、王の許に往き、心悲み極めて甚しき憂に熱せられ、悲聲號泣しつゝ、其の時大車王に語れり。

(三八) 「吾に聞け王よ、人帝よ、憂悲の火にて吾が身體は燒かる。兩乳房

夢是事已　即生憂愁
我今愁怖　恐命不濟
願速遣人　推求我子
是時王妃　說是語已
即時悶絕　而復躄地
王聞是語　復生憂惱
以不得見　所愛子故
共王大臣　及諸眷屬
悉皆聚集　在王左右
哀哭悲號　聲動天地
爾時城內　所有人民
聞是聲已　驚愕而出
各相謂言　今是王子
爲活來耶　爲已死亡
如是大士　常出軟語
爲衆所愛　今難可見
已有諸人　入林推求
不久自當　得定消息
諸人爾時　憧惶如是
而復悲號　哀動神祇

より乳は出で、久しからずして、

(三九) 身體針もて刺さるゝが如く苦しみ、又我が胸は裂く。かくの如き前徴の如く、もはや我れ愛子を見ず。

【註】 pīḍyanti は pīḍyati とすべし。sma tāni とあるは sphuṭati の寫誤なるべし。

(四〇) わが子等を求めよ、わが生命を與へよ、幸福をなせ。[205] 我は夢みたり。我に三の鴿子あり。その中にわが第三の鴿の子愛すべし。

【註】 yo'sya は yeṣāṃ なるべし。tṛtīyaṃ ahaṃ tṛtīyaṃ mama なるべし。

(四一) 其處に鷹は入り來れり。而して鷹によりて鴿は奪はれたり。かくて夢中にかくの如きわが悲はかしこに心中に入れり。

(四二) 極めて燃燒憂悲の思あり。久しからずしてわが死はあるべし。わが子等を求めよ。われに生命を與へよ。悲憐たれ」。

【註】 bhavansvakāruṇyaṃ は bhavasva kāruṇyaṃ と讀むべし。

(四三) かくの如く言ひて第一夫人は失神して其處に地上に仆れたり正念を離れ、心を爽ひ、想念なし。一切の後宮の群は悲聲號泣せり。

爾時大王　即從座起
以水灑妃　良久乃蘇
還得正念　微聲問王
我子今者　爲死活耶
爾時王妃　念其子故
倍復懊惱　心無暫捨
可惜我子　形色端正
如何一旦　捨我終亡
云何我身　不先薨沒
而見如是　諸苦煩事
善子妙色　猶淨蓮華
誰壞汝身　使令分離
將非是我　昔日怨讐
挾本業緣　而殺汝耶
我子面目　淨如滿月
不圖一旦　遇斯禍對
寧使我身　破碎如塵
不令我子　喪失身命
我所見夢　已爲得報
直我無情　能堪是苦

(四四) かの第一夫人の失神して、其處に地上に仆れしを見て、[206] 同時に、子に別れ憂悲せる、臣と倶なる王は、

【註】 次の二行は刪除す。そは四九偈の終より五〇偈に亙る部分の重複なれば也以下若干の錯簡あり。

(四八) [206 の 17 行] 水の流注を以て地上に仆れたる第一夫人に灑ぎたり。[207] 水を灑ぎし間、やをら正念を得、心悲める彼女は起ち上りて彼に尋ねたり。

【註】 prcchiraṃ = prcchi taṃ

(四九) 「吾子は死せりや。生きてありや。」大車王は第一夫人へ是の如く言へり。「諸方に於て、大臣從者等は王子等の捜索のために行けり。

(五〇) 汝は甚しく心を痛めざれ。賢女よ、憂慮を離れてあれ。」哀愍ある大車王はかく第一夫人を慰諭して、

【註】 bhavā = bhadre hināyāsa = hinā 'si

(五一―五二) 顏に涙し、憂悲號泣しつゝ、諸大臣に圍遶せられて、王宮よ

如我所夢　牙齒墮落
二乳一時　汁自流出
必定是我　失所愛子
夢三鴿鶵　鷹奪一去
爾時大王　卽告其妃
三子之中　必定失一
我今當遣　大臣使者
周遍東西　推求覺子
汝今且可　莫大憂愁
大王如是　慰喩妃已
卽便嚴駕　出其宮殿
心生愁惱　憂苦所切
雖在大衆　顔貌憔悴
卽出其城　覺所愛子
爾時亦有　無量諸人
哀號動地　尋從王後
是時大王　既出城已
四向顧望　求覺其子
煩惋心亂　靡知所在
最後遙見　有一信來

り出で行けり。心甚だ悲み、眼も見えわかず、王子の捜索のために多くの民衆と都城より出で行き、急ぎ行けり。出で行ける王を見て、背後より隨侍し、其の時、同時に、[206の5行へ戻る]

(四五) 一切市城にある人々は數多の武器を執りて立てり。かくて是の如く來り、顔に涙し、號泣せる彼等はかの大有情を途上に尋ねたり。

(四六)「如何に今大有情は生きてありや。又死せりや。我は今日如何に美はしき有情喜見の童子を見るべき」。久しからずして力を失ひたる。

【註】この四六偈は能問の人の誰なるかも文法上曖昧であり、且つ四九偈の一部分が再出せる錯簡と思はる。寧ろ削除を可とす。

[208]

(四七) 悲の顔もてる彼は進み行けり。其の場處に於て恐るべき、劇しき、無量の災厄の聲は(聞かれたり)。大車王は起ち上り號泣しつゝ、

【註】 sa を śoka より分離す。 nirdana=nirdaya saṃkaṭāni ghoṣaḥ=saṃkaṭa-nirghoṣaḥ この最

頭蒙塵土　血汚其衣
灰糞塗身　悲號而至
爾時大王　摩訶羅陀
見是使已　倍生懊惱
擧首號叫　仰天而哭
先所遣臣　尋復來至
旣至王所　作如是言
願王莫愁　諸子猶在
不久當至　令王得見
須臾之頃　復有臣來
見王愁苦　顏貌憔悴
身所著衣　垢膩塵汚
大王當知　一子已終
二子雖存　哀悴無賴
第三王子　見虎新產
飢窮七日　恐還食子
見是虎已　深生悲心
發大誓願　當度衆生
於未來世　證成菩提
卽上高處　投身虎前

後の「大車王云々」は寧ろ削除すべきもの。錯簡を知らざるものが加筆せしならむ。

（五三—五五）　かの大車王は愛子を見んが爲に、同時に鋭き目して諸方

【註】 sugaula は su'aula とすべし。

を見廻したり。かくて頭を剃り、その體血に塗れ、身に塵を蒙りたる一人の顏に涙し號泣しつつ來るを見、恐しき憂に亂され顏に涙し、號

【註】 rodamānam は rodamānā と讀む。

泣して立てる大車王の腹心なる一人の宰相は、臂を擧げて叫びつゝ其の時忙はしく來り、急ぎて言へり。「王よ、往きて彼等は大車王に白

【註】 sīghram ārād は sīghram avocat の誤植。

す。

（五六）　王よ、仁者は憂悲の心を懷く勿れ。かれら愛する童子なる王子は在すなり。久しからずして此に仁者の許に來り、仁者は童子なる最上王子を見たまふべし。」

（五七）　頃刻ありて、王の第二の大臣はかしこに到れり。【209】塵に塗れ

虎飢所逼　便起噉食
一切血肉　已爲都盡
唯有骸骨　狼藉在地
是時大王　聞臣語已
轉復悶絕　失念躄地
憂愁盛火　熾然其身
諸臣眷屬　亦復如是
以水灑王　良久乃蘇
復起擧首　號天而哭
復有臣來　而白王言
向於林中　見二王子
愁憂苦毒　悲號涕泣
迷悶失志　自投於地
臣卽求水　灑其身上
良久之頃　及還蘇息
望見四方　大火熾然
扶持暫起　尋復躄地
擧首悲哀　號天而哭
乍復讚歎　其弟功德
是時大王　以憐愛子

て、衣服は垢穢に覆はれたり。顏に涙して王に白して言へり。

（五八）「大王よ汝の二人の王子は憂愁の火に燒かれて在す。王よ、汝の最上王子なる一人大有情は見られず。無常によりて食まれたまへり。

【註】二七偈より、五七偈に至るまでは韻律全く混亂す。アールヤ調なるが如きも遺憾ながら還元し得ず。南條先生も「以下要細密之再校」と註記せられたり。五八偈よりはインドラヴァジュラ調なり。但し若干の修正を要す。putrau の次 hi を入れよ。tiṣṭhataḥ は tiṣṭhātu とすべし、nṛpa は揷語、削るか若くは偈の外部に置くべし。anityatayā anitāyatya とすべし。皆是れ韻律のための修正。寫本はすべてこれを守らず。

（五九）牝虎の仔を產みて日ならざるが、自己の仔を食はんとするを見たまひて、最上王子大有情はかれらに對し大悲愍力を生じたまひ、

【註】kāmām は kāmān と訂正。

（六〇）覺に於て廣大の願を發したまひ、『此に一切有情を覺らしむべし。かの甚深殊勝の覺を求めて未來世に我は(覺に)觸るべし。』

【註】praṇidhi = -dhi, bodhim = bodhi dhvani = dhvāni

其心迷悶　氣力惛然
憂惱涕泣　並復思惟
是最小者　我所愛重
無常大鬼　奄便呑食
其余二子　今雖存在
而爲憂火　之所焚燒
或能爲是　喪失命根
我宜速往　至彼林中
迎載諸子　急還宮殿
其母在後　憂苦逼切
心肝分裂　或能失命
苦見二子　慰喩其心
可使終保　餘年壽命
爾時大王　駕乘名象
與諸侍從　欲至彼林
即於中路　見其二子
號天扣地　稱弟名字
時王即前　抱持二子
悲號涕泣　隨路還宮
速令二子　覲見其母

(六一) 大有情は山の斷崖より投じたり。彼は飢に苦しめる牝虎の前に立てり。頃刻にして彼は身を肉なきものとせり。王子は骨を殘すのみとなされたり」。[210]

【註】 sattvo=-ttvu, giri=giri taṭatu=taṭātu 此の二語は結合せよ。vyāghryaḥ=-ghryu, bhūtayā;=bhūtayāḥ

(六二) かくの如く恐るべき語を聞きて、かの大車王は失神し、意識を失ひて地に仆れ、恐るべき憂悲の火に燒かれたり。

(六三) 大臣從者は悲に亂され、悲聲號泣し、彼に水を灑げり。總て臂を擧げて叫びつゝ立てり。第三の大臣は王に言へり。

【註】 韻律の修正をなせし結果この偈は次の如くすべし。

amātya-pārṣadya kṛpā-svara-rodamānā,
śokārta siñcanti ca te jalena,
sarve sthitā ūrdhva-bāhuś ca sa kandamānāḥ;
tṛtīyo amātyo nṛpaṁ abravīt.

(六四) 「今日我は二人の王子のかの大森林の中に、地上に仆れ心を失ひ

佛告樹神　汝今當知
爾時王子　摩訶薩埵
捨身飼虎　今我身是
爾時大王　摩訶羅陀
於今父王　輸頭檀是
爾時王妃　今摩耶是
第一王子　今彌勒是
第二王子　今調達是
爾時虎者　今瞿夷是
時虎七子　今五比丘
及舍利弗　目揵連是
爾時大王　摩訶羅陀
及其妃后　悲號涕泣
悉皆脫身　御服瓔珞
與諸大衆　往竹林中
收其舍利　即於此處
起七寶塔　是時王子
摩訶薩埵　臨捨命時
作是誓願　願我舍利
於未來世　過算數劫

失神せるを見たり。我等は水を灑ぎ、

【註】 dya の次 ca を入る。 samucchatau=sammucchatau

（六五） 正念を得てありしに、二人は、心燒かれて四方を見、頃刻にして立ち、地上に仆れ悲聲號泣せり。

【註】 labhya の次の te を除く。 kāruna=kārṇya

（六六） 彼等は絕えず臂を上げて兄弟の讃嘆を宣べつゝ立てり」。【二一】かの王は心に悲哀を懷き、子の別離より心を動亂せしめ、

（六七） 悲に貫かれ、かくて王は號泣せり。「わが一人の子、所愛の子、最少なるもの森の羅刹によりて食はれたり。

【註】 tra=trā kṣi=khi priya=priyā

（六八） 我がこれら他の二人の子をして憂悲の火によりて命を終るに至らしめざれ。我れ速かに彼處に至り、愛すべき見ある彼等二人の子を見るべきなり。

（六九） 快速の車乘によりて速かに王城に王舍の中に入るべし。かの

常爲衆生　而作佛事

生みの母をして希くば憂悲の火を以て心を破らざらしめよ。

【註】 sphaṭ'e tat=sphuteta

（七〇）二人の子を見て平安を得べし。生命の別離あらざれ」。王は亦大臣の衆と倶に、象に駕りて見分のために彼處に行けり。[212]

【註】 rudho=rūdho

（七一）二子の兄弟を呼びつゝ悲心悲聲號泣(し來れる)を見て、彼の王はその二人の王子を攝受し泣きつゝ都城に行き、急ぎに急ぎて自己の子を子を欲する夫人に示せり。

【註】 bhrātṛ-nāmâhvānau=bhrataraṃ juhvānau krandatau=kranditu mānā=mānau putrāṃ=putrān

（七二）われかの釋迦牟尼如來は曾て大車王の子なる最上大有情なりき。彼によりて牝虎は安穩になされたり。

【註】 sa=so

（七三）最上帝王なる淨飯は大車といへる王にてありき。又摩耶夫人はその夫人なりき。又彌勒は大響にてありき。[213]

說是經時。無量阿僧祇諸

（七四）勇猛童眞文殊師利は王子大天なりき。摩訶波闍波提は牝虎なりきこれら五比丘は牝虎の五子なりき。

【註】pañcaka=pañca 尙ほ此の下に各寫本みな dvayo suto bhaviṣyanti āsit なる一句を有す。この儘にては意義をなさゞれば、校訂本には省きたれど、これは dvayo suto kolyupa-tisya āsit「舍利弗と目連とは二兒なりき」と讀むべきもの。kolya と upatisya は序の如く目連と舍利弗のことなり。義淨譯の「一是目連、一是舍利弗」とあるにも相當す。

時に大王と大夫人とは種種悲歎して一切の裝飾を解き、大衆と俱に子の骨身供養をなし、その場處に於て、かの大有情のこれらの骨身は置かれたり。これ七寶所成の塔なり。其處に天と大有情とによりて牝虎のために自身は捨てられたり。而して是の如きの願は悲愍によりて作されたり。「われによりてこの身の捨施は未來世數量超過劫の間一切大有情の佛事をなすべし。」この敎說の無量の有情に對して說かれし時、天人の衆を含める人々心は無上正等覺に於て發起せられたり。

【註】この部分前出のものと重複せり。kṛtvā を次の語に結合すべし。

【註】kāya=kārya

天及人。發阿耨多羅三藐三菩提心。樹神。是名禮塔往昔因緣。爾時佛神力故。是七寶塔即沒不現。

金光明經讃佛品第十八

爾時無量百千萬億諸菩薩衆。從此世界至金寶蓋山王如來國土。到彼土已五體投地。爲佛作禮却住一面。合掌向佛異口同音。而讃歎曰。

如來之身　金色微妙
其明照耀　如金山王
身淨柔軟　如金蓮華
無量妙相　以自莊嚴
隨形之好　光飾其體
淨潔無比　如紫金山
圓足無垢　如淨滿月

これこの塔の出現の因なり縁なり。かの塔は佛の加被力によりて其處に隱沒せりと。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、牝虎品第十九。

一切如來讃嘆品第二十 [214]

時にかれら多百千の菩薩は金寶藏傘蓋積如來の許に往詣せり。往詣してかの金寶藏傘蓋積如來の兩足を頭を以て禮して一面に坐し、合掌してかの金寶藏傘蓋積如來を讃して言へり。

(一) 金色の勝者は離著の身あり。金色なる輝ける身あり。牟尼帝王は金色の山の如し。牟尼蓮華は金色なり。

(二) 妙相を以て相を飾れる身よ。種種隨好ある身よ。善く輝ける黄金の光ある、無垢にして美はしき山王、

(三) 梵自在者、妙聲梵音者、師子自在者、響く雲雷の音、[215] 蜂(王)の如きも

其音淸徹　妙如梵聲
師子吼聲　大雷震聲
六種淸淨　微妙音聲
迦陵頻伽　孔雀之聲
淸淨無垢　威德具足
百福相好　莊嚴其身
光明遠照　無有齊限
智慧寂滅　無諸愛習
世尊成就　無量功德
譬如大海　須彌寶山
爲諸衆生　生憐愍心
於未來世　能與快樂
如來所說　第一深義
能令衆生　寂滅安隱
能與衆生　無量快樂
能演無上　甘露妙法
能開無上　甘露法門
能入一切　無患宿宅
能令衆生　悉得解脫
度於三有　無量苦海

の、遮多の聲ある無垢自在者、孔雀、迦陵頻伽の聲に超勝せるもの、

(四) 無垢離垢威光あるもの、百福相莊嚴の勝者、離垢無垢海の如き勝者、蘇迷盧の一切功德を聚めたる勝者、

(五) 最勝なる有情利益哀愍者、最勝なる世間與樂者、最勝義利を示す勝者、般涅槃の樂を示すもの、

【註】 parama=paramu paramaṃ=paramu paramārthasya=paramu arthasya

(六) 不死の樂を與ふるもの、慈力精進方便を具するもの、多倶胝劫にも汝の大海に入り開說せんことは不可能なり。

【註】 この一頌に若干挿入語ありて韻律混亂せり。整理すれば凡そ次の如きものならむ。

na śakya saṃtartu guṇāna samudra sāgaraṃ, bahu kalpa-koṭibhi tava prakāśitum.

(七) これわれによりて要約して說かれしところ、功德海中の功德の一渧のみ。[216] かくて集められたる福聚によりて有情は無上覺を得よかし。

安住正道　無諸憂苦
如來世尊　功德智慧
大慈悲力　精進方便
如是無量　不可稱計
我等今者　不能說有
諸天世人　於無量劫
盡思度量　不能得知
如來所有　功德智慧
無量大海　一滴少分
我今略讚　如來功德
百千億分　不能宣一
若我功德　得聚集者
迴與衆生　證無上道

爾時信相菩薩。卽於此會從座而起。偏袒右肩右膝著地。合掌向佛而說讚言。

世尊百福　相好微妙
功德千數　莊嚴其身
色淨遠照　視之無厭

【注】　後半偈を左の如く訂正す。
yac co samūpicita puṇya-saṃcayaṃ,
tenā satvaḥ prapnyatu bodhim uttamām.

時に妙幢菩薩は座より起ち、一肩に上着衣を被り、右膝輪を地に着けて、世尊の方へ合掌を傾け、その時これらの偈を以て讚して言へり。

(八) 有情中の牟尼は百福千相吉祥妙功德を以て莊嚴せられ、殊勝色最上善美の觀ある、千日光を生ず。

【注】 sa tvam=sattvāna munīndra=munīndro śrī の次なる一點は誤植なり。削るべし。

(九) 多くの光焔亂轉し、種種の寶亂轉し、靑白分明に金色を間へ、琉璃、赤銅色、紅瞰色、水精色、

【注】 avakāñcana の意義明かならず。姑らく義淨譯に據る。 na=nu, ṣpha=phī

(一〇) 山帝王は無邊倶胝の美はしき光もて、金剛の如く輝く。帝王と倶なる熾烈の日を以て我に惠を與へよ。汝は有情の樂行によりて

如日千光　彌滿虛空
光明熾盛　無量無邊
猶如無數　珍寶大聚
其明五色　青紅赤白
琉璃頗梨　如融眞金
光明赫奕　通徹諸山
悉能遠照　無量佛土
能滅衆生　無量苦惱
又與衆生　上妙快樂
諸根清淨　微妙第一
衆生見者　無有厭足
髮紺柔軟　猶孔雀項
如諸蜂王　集在蓮華
清淨大悲　功德莊嚴
無量三昧　及以大慈
如是功德　悉以聚集
相好妙色　嚴飾其身
種々功德　助成菩提
如來悉能　調伏衆生
令心柔軟　受諸快樂

輝けり。[217]

(一一) 諸根清淨の色ありて美はしき觀あるものよ、熾然せる色、諸人愛見す。稀有の色、離塵にして、輝く。猶し蜂王の光亂轉するが如し。

(一二) 清淨なる悲愍功德を以て莊嚴せられ、平等慈力の福聚なり。種種圓滿の隨好を具し、三昧覺支功德を以て莊嚴せらる。

(一三) 汝によりて歡喜を生じ、樂を生じ、清淨となり、一切樂の本源に至るべし。種種深妙の功德を以て莊嚴せられ、汝は千倶胝の國土に於て輝けり。

(一四) 汝は光を以て日珠の如く輝けり。汝は虛空に於て輝く日輪の如し。迷盧の如く、一切の功德を具し、一切三界に於て瞻仰せらる。

(一五) 牛乳、螺貝、拘物頭、月の如く、雪、波頭摩、の白色光あり。[218] 汝の口中に妙なる鵝王の虛空に於ける如く齒の列は輝く。

(一六) 汝の美はしき月の顏、殊勝の顏、耳釧は右方に旋り、琉璃白色毫光もて、虛空の中に日の如く輝けり。

種々深妙　功德莊嚴
亦爲十方　諸佛所讚
其光遠照　遍於諸方
猶如日月　充滿虛空
功德成就　如須彌山
在々示現　於諸世界
齒白齊密　猶如珂雪
其德如日　處空明顯
眉間毫相　右旋宛轉
光明流出　如琉璃珠
其色微妙　如日處空

【註】varṇair maṇito=varṇā-'sito

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、一切如來讚嘆品第二十。

總結品第二十一【219】

【註】梵文寫本にはこの品名を缺く。されど西藏譯に徴するにこの品は nigamana と名付られしもの丶如し。即ち西藏譯にはこの品の結尾標題ありて、更に本經全部の結尾標題を置く。梵文は單に本經全部の結尾標題あるのみ、蓋し筆者の疎漏この品だけの結尾標題を脫落せしものなるべし。今校訂本には之を補へり。

爾時道場菩提樹神。復說讚曰

南無清淨　無上正覺
甚深妙法　隨順覺了
遠離一切　非法非道
獨拔而出　成佛正覺
知有非有　本性清淨
希有希有　如來功德
希有希有　如來大海
希有希有　如須彌山
希有希有　佛無邊行
希有希有　佛出於世
如優曇華　時一現耳
希有如來　無量大悲
釋迦牟尼　爲人中日
爲欲利益　諸衆生故
宣說如是　妙寶經典
善哉如來　諸根寂滅
而復遊入　善寂大城
無垢清淨　甚深三昧

時に菩薩集會善家女神は歡喜滿足して、その時これらの偈を以て世尊を讚嘆せり。

（一）歸命はあれ覺者に。善清淨の慧に、清淨法を具する、辯才慧に、正法福を具する慧に、有頂空者に、清淨慧に。

（二）あゝあゝ無邊の威光ある覺者、あゝあゝ迷盧に等しき、大海、あゝあゝ無邊の境界なる覺者、優曇華の如く値ひ難し。

（三）あゝあゝ如來は悲愍者なり。釋迦族の幢相、人中の帝日、彼によりて一切有情執受のためにかくの如き最勝の經典は說かれたり。[220]

【註】yena dṛśam=yenedṛśam

（四）釋迦牟尼如來は寂靜自在者、有情最勝者なり。寂靜の城に入れり。甚深の師主なり。勝者諸佛の境界に於て離塵の三昧に入れるが故に。

【註】samādhiḥ=samādhi

（五）かくて聲聞にとりて身は空なり。兩足最勝者の住は空なり。か

入於諸佛　所行之處
一切聲聞　身皆空寂
兩足世尊　行處亦空
如是一切　無量諸法
推本性相　亦皆空寂
一切衆生　性相亦空
狂愚心故　不能覺知
我常念佛　樂見世尊
常作誓願　不離佛日
我常於地　長跪合掌
其心戀慕　欲見於佛
我常修行　最上大悲
哀泣雨淚　欲見於佛
我常渴仰　欲見於佛
爲是事故　憂火熾然
惟願世尊　賜我慈悲
清冷法水　以滅是火
世尊慈愍　悲心無量
願賜我身　常得見佛
世尊常護　一切人天

れら一切諸法は本來空なり。有情も空なり。我はあることなし。

（六）我は常恒に勝者を念ず。又常に勝者の出現を喜ぶ。常恒に正覺日の出現のために作願す。

【註】 śocāmi = rocāmi

（七）常に此に地面に膝を立て、我は勝者の出現を望み、甚しく憂悲熱惱す。清白大悲導師なる善逝の出現を望み、甚しく渴せり。

【註】 rodimi = odāta abhi = ati

（八）我は常に普ねく憂悲の火にて燒かる。我れに出現清涼の水を與へよ。[221] 有情は汝の色身出現に於て渴せり。大悲の水を以て我を喜ばしめよ。

（九）導師よ、我に悲愍をなせ。我に喜ばしき色身顯現を與へよ。汝によりて世間救者は示されたり。聲聞にとりて身は空なり。

【註】 jagad eva は jagata eva なり。これが更に jagat'eva を經て jagad eva の如き形となれるなり。

是故我今　渴仰欲見
聲聞之身　猶如虛空
焰幻響化　如水中月
衆生之性　如夢所見
如來行處　淨如琉璃
入於無上　甘露法處
能與衆生　無量快樂
如來行處　微妙甚深
一切衆生　無能知者
五通神仙　及諸聲聞
一切緣覺　亦不能知
我今不疑　佛所行處
惟願慈悲　爲我現身
爾時世尊　從三昧起
以微妙音　而讚歎言
善哉善哉　樹神善女
汝於今日　快說是言
一切衆生　若聞此法
皆入甘露　無生法門

金光明經卷第四

(一〇) 虛空に等し。 虛空の自性あり。 幻、陽焰、水中の月の如し。 自然導師にとりては一切有情は夢の自性あり。 大邊際空なり。

時に世尊は座より起ち、梵音を以て宣へり。「汝にまで善きかな、善きかな、善家女神よ、師主は與ふべし。 汝にまで善きかな、善家女神よ、復び善きかな」と。

世尊はこれを說けり。 彼等菩薩と、菩薩集會善家女神、辯才大天女を上首とせる、天、人、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等を始めとせるかの一切衆會は世尊の所說を歡喜し逑得せりと。[222]

以上吉祥なる金光明最勝帝王經中、總結品第二十一。

以上吉祥なる金光明最勝帝王經完結。

すべて緣生なる諸法とその因とその滅とを如來は說けり。

是の如く大沙門は說けり。

【註】 麗、宋、元本には囑累品を添加すれども元來、曇無讖譯には之を缺くと見えたり。故に明本に之れ無きは正し。 故に今之を除く。

梵漢對照 新譯金光明經 終

梵漢對照

新譯金光明經

昭和八年五月三十日印刷
昭和八年六月五日發行

定價二圓五十錢

100

五百部限定版

譯者　泉芳璟

刊行者　高楠正男

刊行所　合資會社　大雄閣
東京・小石川・西江戸川・町一
振替東京　六六九二九
電話　小石川　八三八

印刷者　大杉直次郎

製本者　田中傳藏